

# 南海トラフ地震・津波に備えて

～2018年 AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動の検証～



**AMDA**

## はじめに

# 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動に対する感謝と将来方針



AMDA グループ 代表／認定特定非営利活動法人 AMDA 理事長 菅波 茂

「岡山の災害に関する安全神話が崩壊」した災害でした。具体的には、気候変動による、地震でなく水災害の発生ということです。地震に関しては大丈夫です。なぜなら、日本全国で地下マグマがゼロに近い場所は岡山県吉備中央町と兵庫県の丹波篠山の2ヶ所だけです。世界的には水災害に対する備えがますます不可欠になると思います。

「経験は知識を智慧に昇華させる。」片岡聡一総社市長の的確な判断、職員の迅速な対応、住民を代表する議会による支援、等々。災害支援条例の制定にもとづいた、過去の全国の災害被災自治体に対する職員の派遣に代表される真摯な取り組みの経験が、総社市民を今回の災害から守り抜くことができたと思います。それだけでなく、全国からの支援物資を受け入れて、高校生など次世代の若者を主体としたフリーマーケットを発足させて貴重な参加型の経験の場を提供しています。いわゆる市民オール参加型対応体制の確立というピンチをチャンスに変える骨太の発想には感動します。全国の自治体の未来モデルを彷彿とさせています。

「情けは人の為ならず、義理となって返ってくる。」相互扶助の原則です。自他同一性の思想の具現化です。総社市に過去の災害被災でお世話になった全国各地の自治体から職員をはじめとする応援が続々と寄せられました。これが日本の精神風土の原点と思いました。それと共に AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームに参加している自治体や医療機関からも人的・物的支援が寄せられました。未来への時系列の相互扶助の具現化です。相互扶助は信頼のネットワークです。

日本の災害被災者医療支援は災害対策基本法にもとづいて行われていました。今回、岡山県保健福祉部の英断により、災害対策基本法に加えて、保険診療の早期導入により次の3点が可能となりました。1) 患者とかかりつけ医の関係の早期回復。2) 被災した診療機関の早期回復。3) 医療ボランティアの医療訴訟対応。この紙面を借りて深く感謝申し上げます。

最後に、水災害は集中豪雨という形で日本全国のどこにでも発生します。瀬戸健康管理研究所が提供、ま



び記念病院で実施したような健診車を中心とした医療支援が主流となると確信しました。診療、検査、処置、医薬品、水、発電、燃料、簡易トイレなどを総合的に編成した AMDA 災害医療機動チームの形成と全国的な支援体制の確立を急ぎたく思っています。

今回の西日本豪雨災害被災者緊急支援活動にご尽力、ご協力いただいた多くの自治体、企業、団体、そして個人の皆様に心より感謝申し上げます。今後とも AMDA の活動に皆様のご理解とご支援をいただければ望外の喜びです。

# 南海トラフ地震・津波に備えて ～ 2018 年 AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動の検証～

## 目次

(敬称略)

はじめに AMDA グループ 代表／認定特定非営利活動法人 AMDA 理事長 菅波 茂

### 第一部：南海トラフ災害に向けて 西日本豪雨災害の経験を通して

1. 起こりうる南海トラフ災害と AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動に寄せて — P.1
  - ・岡山県保健福祉部長 中谷 祐貴子
  - ・岡山県総社市長 片岡 聡一
  - ・徳島県知事 飯泉 嘉門
  - ・岡山県赤磐市長 友實 武則
  - ・徳島県阿南市長 岩浅 嘉仁
  - ・徳島県美波町長 影治 信良
  - ・徳島県海陽町長 三浦 茂貴
  - ・高知県黒潮町長 大西 勝也
  - ・岡山県備中保健所長 兼 岡山県備中県民局次長 毛利 好孝
  - ・一般社団法人吉備医師会 会長 平川 秀三
  - ・学校法人帝京平成大学 ヒューマンケア学部鍼灸学科 教授  
AMDA 災害鍼灸ネットワーク 代表世話人 今井 賢治
2. 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動に対する総社市との連携：法の制定と相互扶助 — P.13  
AMDA グループ 代表／認定特定非営利活動法人 AMDA 理事長 菅波 茂
3. AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム最新概要 — P.19

### 第二部 AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動

1. 活動概要 — P.25
2. 各活動に対してのメッセージ — P.31
  - ・岡山県総社市 保健福祉部 部長 平野 悦子
  - ・学校法人平成医療学園宝塚医療大学 保健医療学部鍼灸学科 教授 北小路 博司
  - ・医療法人和陽会まび記念病院 院長 村松 友義
  - ・小規模多機能ホームぶどうの家真備 代表 津田 由紀子
3. 支援活動を支えてくださった団体からのメッセージ — P.35
4. 支援活動にご参加くださった派遣者・ボランティアの方からのメッセージ — P.49

### 巻末資料

1. 活動地を訪問してくださった団体一覧 — P.64
2. AMDA 本部で支援活動を支えてくださったボランティア一覧 — P.64
3. 時系列でみる活動の動き — P.65
4. 職種別派遣者一覧 — P.66

## 平成30年7月豪雨災害時の岡山県の対応



岡山県保健福祉部長 中谷 祐貴子

7月6日16時30分に県災害対策本部を設置。その後県内市町村で次々に大雨特別警報が発令され、県内各地で堤防の決壊、土砂災害、アルミ工場の爆発などの災害が発生した。県内随所で道路や河川の被害等が想定され、安全な移動が困難と考えられたため、降雨が収まり安全を概ね確保できる翌7日11時に、県災害保健医療調整本部とDMAT（災害派遣医療チーム）県調整本部を設置した。そして11日まで、県庁に参集した統括DMAT等の多大な支援を受け、さらに、厚生労働省DMAT事務局や隣県等からも多くの助言や人的支援を得ながら、両本部を一体的に運営した。

7月7日、両本部を設置した当初は、県内DMATに対して、二次保健医療圏ごとの活動拠点本部を設置し、圏域ごとに手分けをして、広域災害救急医療情報システム（EMIS）による病院及び有床診療所の被災状況の確認や、避難所の設置状況の確認を行った。発災直後、本部には、浸水や断水など様々な情報が寄せられつつも県内全体の状況が見えなかったが、次第に、まび記念病院や倉敷市真備地域の被害が特に甚大であることが明らかになった。このため、入院患者の避難や真備地域の住民が集まった避難所のスクリーニング等を目的に、厚生労働省DMAT事務局と調整して、香川県と兵庫県に、DMATの派遣要請を行った。そして、7月8日に、消防や自衛隊のボートによる病院からの患者の搬出と歩調を合わせ、ボート着岸後、DMATによるトリアージと応急処置、消防による病院への搬送、加えて、近隣の病院の自主活動による救急車で患者の出迎えと収容、さらにはNPOの自主的活動でヘリコプターによる透析患者の病院への搬送などが行われた。様々な官民の総力を挙げた病院避難であった。

その後、県内外からJMAT（日本医師会災害医療チーム）、AMAT（全日本病院協会災害時医療活動支援班）、AMDA、日本災害医療学会等から多くの医療救護チームや災害医療コーディネータ等（※）が応援に駆けつけた。これら多くのチームによる支援活動がしっかりと調和したものとなるよう、全てのチームに県活動調整本部に登録することと活動に当たっては本部の指示に従うことを求めた。また、研究目的の活動はお断りした。調整本部は、全体ミーティングにより各機関が持ち寄った情報や課題を共有し、避難所等のアセスメントや応急的な医療の提供等に必要なチームの派遣、物資の確保・調整等を行った。

7月9日に、県南西部保健医療圏（備中保健所、倉敷市保健所管内）にKuraDRO（クラドロ（倉敷地域災害保健復興連絡会議））が立ち上がった。情報の収集や各チームの活動の報告、これらを踏まえた次の活動の指示等は現場に近いクラドロが適していることと、県内の被災がこの地域に集中していたことから、順次こちらに権限を移譲し、県調整本部活動は7月19日をもって終了した。

また、医療機関の復興には、一日も早い保険診療の再開による収入の確保が不可欠である。まび記念病院の保険診療の再開について、7月17日にAMDAの菅波代表が同部医療推進課に相談に来られ、保険診療での避難所への往診等について御相談いただき、当方から中国四国厚生局に確認のうえ条件を満たせば可能である



県災害保健医療調整本部・DMAT調整本部 左 医療推進課内（～8日） 右 県庁9階大会議室（9日～）

旨の連絡をさせていただいた。こうしたことを経て、7月18日からの健診車（AMDAからの借用）での保険診療再開となった。

AMDAを含む災害医療関係の各チームの皆様には、多大なる御支援をいただき、心から感謝申し上げます。

※DMAT、DAPT（災害派遣精神医療チーム）、こころのケアチーム、災害拠点病院の医療救護班、日赤救護班・こころのケアチーム、JMAT、AMAT、TMAT、JRAT（大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会）、AMDA、ピースウィンズジャパン、HuMA（災害人道医療支援会）、セーブザチルドレン、小児周産期リエゾン、JDA-DAT（日本栄養士会災害支援チーム）、DHEAT（災害時健康危機管理支援チーム）、岡山県薬剤師会、岡山県看護協会 等

## 未曾有の豪雨・工場の爆発 「ひとりでも多くの命を救いたい」



岡山県総社市長 片岡 聡一

今回の西日本豪雨において、高梁川の水位が 12 m を超えた時点で決壊を覚悟した。

1,000 人、いや 2,000 人が死亡すると腹をくくった。「ひとりでも救いたい」との思いで私自身のツイッターで「逃げてくれ」と発信を続けた。このツイートで、ひとりの人が動いてくれれば、その人の命を救うことができるかと必死の呼びかけだった。

「情報が錯綜する」とよくいうが、まさしくそのとおりだった。高梁川が越水し、あちらこちらから、高梁川に人が引きずり込まれたという情報が飛び込んできた。日羽地区で 15 人、草田地区で 1 人、作原地区で 1 人、そして消防職員が 3 人、合計 20 人が濁流に飲み込まれたという情報だった。作原地区が浸かっている、美袋地区も浸かっている、どの情報も危機的なものだった。下原地区ではアルミニウム工場が爆発した。爆風で 115 世帯が全壊と聞いた。「逃げろ」という指示を発し、そして急遽バスをチャーターした。「いずれは被災地になる」と覚悟を決めていた私には、自らに課していた三つの掟がある。一つ目は「有事の際は、法律・条例を破れ」、二つ目は「決断、責任は自分でとる」、三つ目は「公平・平等の原則では、誰ひとりも助けられない」。発災から一週間、全精力をかけて三つの掟を実行に変えていった。

そして、この三つの掟はまさしく AMDA から学んだもの。菅波理事長の教えに心から感謝したい。最後に、何よりも嬉しかったのは、AMDA が災害対策本部の一員として、総社市を支えるために来てくれたこと。本来ならば倉敷市真備町や広島県に行き「大仕事」をなすべき集団が、総社市を見守ってくれたことに心の中で涙した。

ありがとうと心から申し上げたい。



## 「平成 30 年 7 月豪雨災害」における 徳島県の対応について

徳島県知事 飯泉 嘉門



今年は豪雨災害や地震など、全国各地で大規模な自然災害が相次ぐ年となりました。

とりわけ、「平成 30 年 7 月豪雨」では、徳島県内でも、三好市や那賀町で降り始めからの雨量が 1,000 ミリに達し、7 月の月間平均雨量の 3 倍を超える記録的大雨となったほか、全国的にも、「数十年に 1 度の重大な危機」が差し迫った場合に発表する「大雨特別警報」が 11 府県に発表され、西日本の広い範囲で甚大な被害が発生しました。

改めて、お亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

徳島県では、豪雨災害の発生直後に、愛媛県や高知県への「現地連絡調整要員（リエゾン）」を派遣するとともに、宇和島市の「対口（たいこう）支援（カウンターパート）\* 団体」として、市長を補佐する「災害マネジメント総括支援員」、避難所運営を担う「対口支援チーム」、さらには「災害時健康危機管理支援チーム（DHEAT）」による支援を行ったほか、「災害派遣医療チーム（DMAT）」を派遣し、愛媛県内での医療救護活動に従事いたしました。

また、倉敷市内の水害をはじめ、大きな被害に見舞われた岡山県についても、本県から「保健師チーム」や「緊急災害警備隊」などを派遣したことに加え、認定特定非営利活動法人 AMDA の皆様からのご要請に基づき、徳島県内で飲料水を手配して、総社市へと送り届けたところであります。

こうした被災地支援の活動には、多くの方々からご支援、ご協力を賜っており、改めて感謝を申し上げます。

本県では、近い将来に発生が懸念される「南海トラフ巨大地震」をはじめ、大規模災害に備えて、AMDA との間で「南海トラフ巨大地震等における医療救護活動に関する協定」を締結させていただいており、県が実施する防災訓練に、AMDA の皆様にもご参加いただくなど、様々な機会を捉えて、連携を深めて参りました。今回の支援活動についても、日頃からこのように連携を深めてきたことが、大いに活かされたものと考えております。

安全・安心な暮らしを守るために、防災・減災対策を一段と充実させていくことが求められる中、国内外で豊富な災害支援の実績をお持ちの AMDA の皆様の存在は、誠に心強い限りであり、皆様との連携強化は、非常に重要なものと考えております。

今後とも、本県の取組みにお力添えを賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

\* 対口（たいこう）支援＝大規模災害発生時に、被災自治体と支援する都道府県・政令指定都市をペアにする方式。

## 西日本豪雨災害被災者支援保健医療活動について 災害で助かった命、助けられた命を失わないために



岡山県赤磐市長 友實 武則

このほどの西日本豪雨災害の被災者支援において、赤磐市ではAMDAとの連携協定により、総社市開設の避難所へ保健衛生活動支援としてAMDAの要請により迅速に保健師等の派遣を行いました。また倉敷市真備町へも県からの要請に対して同様に行っています。災害時の応急対応は人の命を救う上でもスピードが命です。災害で助かった命、助けられた命を避難所で失わないために必要なのは避難所での応急救護・保健医療活動が大切であるとの認識により、派遣された職員は被災者に寄り添いつつ保健活動を行ったと報告を受けています。また、本市では災害医療に対して県内でも早くから災害時における応急医療体制として、「災害医療救護活動に関する協定」を医師会、歯科医師会、薬剤師会と結んでおり、要配慮者に対しても「福祉用具等物資の供給等協力に関する協定」を結び、災害時において被災者の保健医療活動が大切であるとの認識は非常に高く、また、こういった災害に備え、「大規模災害支援条例」を制定しておりAMDAとの連携協定を軸に大規模災害発災時において必要とされる地域に支援活動が出来る体制を整えていたことも今回の迅速な職員派遣に結びついたと考えています。

本市でも、この豪雨で大なり小なりの浸水被害、土砂災害が発生し対応に追われましたが、中でも市内を流れる吉井川の濁流が堤防を越えようとしていた矢先、雨が小康状態となったため大きな危機を乗り越えることが出来たことは幸運なことでありました。私がこういった異常事態に対し常に心がけていること、それは、大災害がまさに起きようとしている時、起きた時、首長たるもの敢然とそれに立ち向かう勇気と不撓不屈の精神を持ち事にあたることです。今後もどのような大災害が起こっても対応できるよう常に「常在戦場」を心に誓い「人は城、人は石垣、人は堀」として対応し自らを鼓舞し職員とともに対応にあたって行こうと考えています。



## 岡山への災害派遣



徳島県阿南市長 岩浅 嘉仁

平成30年7月に発生した西日本豪雨災害により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。そして、1日も早い復興と皆様の日常が戻りますことを心よりお祈り申し上げます。

AMDA と阿南市は、平成29年5月30日に「大規模災害時における医療救護活動に関する協定」を締結いたしました。この協定は、医療救護班の派遣等の協力体制を謳ったもので、今後、発生が危惧されている南海トラフ巨大地震に備える阿南市としては、非常に心強いものでありました。

そのような中、平成になってから一番被害が大きいといわれる豪雨災害が西日本で発生し、本市からは愛媛県宇和島市、広島県安芸郡へそれぞれ職員や消防隊員、給水車などを派遣し、支援にあたりました。

また、阿南市では初めてとなる AMDA からの協力要請により、相互協力をしなければならないという強い使命感から、保健師2名と職員2名を岡山県へ派遣し、支援活動を行いました。支援に携わった職員からは、「活動を通して、被災地の支援はもちろんですが、AMDA の活動についても理解を深めることができました。本市での発災に備え、AMDA やその他の支援団体の受入体制について検討する際にも今回の経験を生かしていきたい」と力強い言葉を残してくれました。

このように、今回の西日本豪雨災害で AMDA への協力支援を行った経験が、今後の災害対応につながっていくものと確信をいたしております。

本市では、これからも災害に強いまちづくりを目指し、日々の災害対策や訓練等、よりよいまちづくりのために皆様とともに連携を図りながら取り組んでまいりたいと考えております。

最後になりますが、AMDA の活動に参加した職員たちの言葉を紹介させていただき、私の思いとさせていただきます。

「支援活動の機会を与えてくださった皆様に感謝するとともに、被災地の1日も早い復興を願っております。」



## 西日本豪雨災害の被災者緊急支援活動 被災地派遣の経験から学ぶこと



徳島県美波町長 影治 信良

この度の西日本豪雨災害におきまして被災された皆様ならびにご家族の皆様にご心よりのお見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

さて、西日本豪雨災害の被災者緊急支援活動において、美波町においては、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームの連携自治体として、その中心自治体である総社市が被害に遭われたとのことで7月10日、副町長はじめ5名の職員を派遣いたしました。被災直後ということもあり、現地は、慌ただしい状況でありましたが、避難所への支援物資の搬送など交通網が十分でない中での支援活動となりました。

また、AMDA からの支援要請を受け8月8日（水）～11日（土）については、看護師4名、職員1名を派遣し、倉敷市真備町の真備公民館岡田分館において記録的な猛暑の中でのボランティア活動の支援として AMDA とともに医療・健康支援活動として被災者宅の巡回訪問や救護所でのボランティアの方々の医療ケアにあたりました。

今回の被災地支援において学んだことの一つとして各地から駆けつけていただける皆さまを受け入れる受援能力を高めることが大切であると痛感いたしております。また、近年の自然災害はいつ、どこで発生してもおかしくない状況であり、自治体としましては、状況を迅速に判断し、対応する能力が必要であると考えます。

美波町においても今後70～80%の確立で発生が予想されている南海トラフ巨大地震が発生すれば、町全体で甚大な被害の発生が予測されています。そのため日頃から住民と一体となって災害に強いまちづくりの推進や南海トラフ巨大地震を迎え撃つための防災・減災対策に取り組んでいます。

また、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議の中で参加自治体や医療機関などと共に、災害支援に対する体制と取組を早急に確立していく必要があると考えますので、美波町としましても災害医療支援チームとの事前交流などを深めながら、体制づくりに努めて参ります。

日本全国で AMDA の掲げる相互扶助の精神のもと助け合いの輪がさらに広がっていくことを期待しています！



熱中症予防を呼びかける美波町職員（左）

## 和を以て貴しとなす ～AMDA 派遣にて（7月22-25日）～



徳島県海陽町長 三浦 茂貴

日本豪雨災害、6月28日から7月8日にかけて、台風7号とそれに刺激された梅雨前線の影響で西日本を中心に各所で大きな災害が発生し、多くの尊い人命と財産が失われました。当町でも時間120ミリの観測するなど長時間にわたる大雨と河川の増水で、大雨特別警報が発令するかもしれないという非常に緊迫した状況でありました。町内各地で小規模な山腹崩壊が発生したものの、幸い大きな被災や人的被害に至る前に雨足は弱まっていったのですが、テレビでは非常に凄まじい各地の被害状況がライブで放映され、住民も非常に不安な時間を過ごしたであろうと思います。海陽町は何とか難を逃れましたが、被害の大きかった町では多くの方が避難所生活を余儀なくされました。一日も早くハード的にも、そして精神的にも元通りの生活が取り戻せるように切に願っております。

さて、海陽町職員のAMDA災害派遣は、7月22日から25日にかけて保健師2名と職員2名の計4名を選び、倉敷市真備町へと入らせて頂きました。現地では保健師は災害鍼灸とマッサージなどの支援、職員は避難所の運営手伝いなどを中心に活動をし、少しでも被災者のお役に立てたのであれば幸いであると思います。台風の通り道であり南海トラフ巨大地震での津波被害が想定される海陽町としましては、今回の職員派遣はただのボランティアではないと思っています。訓練とは違い実際の現場では支援サービスも日々変化をしております。その変化に瞬時に対応する方法や集団生活の中でのプライバシーを守ることの重要性、またボランティアの方に対する体調管理周知の必要性など、多くのことを今回の派遣で学ばせて頂いたと思います。南海トラフ巨大地震の発生確率が年を追うごとに高くなっている現状の中で、町民を守るために何を準備しておく必要があるのか。ハード面では、防災公園や津波避難タワー、また避難路整備などを積極的に進めておりますが、避難訓練や避難所運営などのソフト面の重要性を今回のAMDA派遣で再認識させられたように思います。今後はソフト面にも目を向け、現場を経験させて頂いた職員を中心として更に整備を進めていきたいと考えております。

いつどこに災害が発生するのかは「神のみぞ知る」というところではありますが、今までの教訓を生かし



て日本国が一丸となって自然に立ち向かえるように、AMDAやその他の枠組みの中で、災害援助や支援派遣を今後も積極的に続けていきたいと考えております。

結びとなりますが、「和を以て貴しとなす」日本国の根底にある思いやりや絆というものを大切にして、今後も災害時はもちろんのこと、平時においても仲間としての絆をつくり、すべての自治体と良い関係を築いていきたいと考えております。

## AMDA の活動へ黒潮町職員を派遣して

高知県黒潮町長 大西 勝也



AMDA から西日本豪雨により甚大な災害を受けた総社市へ災害支援として、保健師の派遣依頼を受け、本町職員の保健師 6 名のローテーションを組み約 1 ヶ月間、現地へ派遣をいたしました。今回の派遣は同じく AMDA と協定締結を行っている総社市への支援はもとより被災地での活動を実際に経験することで災害対応時の職員のスキルアップも視野に入れたもので被災地支援とあわせて貴重な経験をつませていただくことができました。

今回の保健師の活動は、支援者の展開に向けた体制構築も出来ている状態でありましたが、派遣による支援者が変わる中での避難者の方へのかかわり方等について困難な状況もあり、連携、引継ぎ、記録の方法等により情報共有をしながら点の情報を線にしていくことの重要性を改めて認識したところです。

想定される南海トラフ地震が発生すれば黒潮町は甚大な被害が予想されていることからその際には今回とは逆に支援を要請する立場となります。黒潮町には災害時に機能する医療機関がなく、さらにライフラインの機能停止、交通網の遮断など医療チームが実際に活動をはじめる前の状況が整えにくい状況にあると考えられます。そのため医療チームが到着した際にすぐに活動を開始できるように、どのような準備があるか、受援体制に関するガイドライン、マニュアル等を平常時から AMDA と意見交換をしあいながら、また今回被災地の活動で得た経験を元に実効性の高いものに再整理していくことが必要であり、その一環として黒潮町の医療救護マニュアルなどで活動のステージの共有を図りながら、様々なところから入る支援団体相互及び行政保健師との情報共有の方法を整備しておく必要があると考えます。

これからも引き続き災害時に対応できる医療活動体制が確保できるよう進めてまいります。医療施設、設備、人材等の資源が脆弱な本町では、医療分野での連携協定団体との災害応援体制のさらなる確立が必要不可欠です。今後も AMDA と連携しながら医療チームのバックアップ体制に関する訓練等取り組みを進めたいと思いますので、より一層のご支援を賜りますようお願いいたします。



黒潮町保健師の活動の様子

## 平成30年7月豪雨を振り返って



岡山県備中保健所長 兼 岡山県備中県民局長 毛利 好孝

早いもので先の7月豪雨から4ヶ月あまりが経ちました。仮設住宅の建設も進み被災者の生活再建に向けて一定の目途がたったとはいえ、医療機関や営業施設等の中には復旧途上のところも多く、街が元通りの機能を取り戻すにはまだまだ時間がかかりそうです。

今回の水害を振り返えるに、まさか岡山でという意識が被害を大きくしたのも事実であると思います。災害のない岡山県といわれますが、私が就職してからでも、約10年毎に大きな人的被害をもたらした水害が発生しています。

今回は、県内外から多数の医療、保健、福祉チームが岡山県に結集し、発災後早期から活動を開始したこと、倉敷市街の医療機関が被災しなかったことで、被災者に対する医療、保健、福祉支援は比較的滞りなく進められました。一方で、水が引くと同時に必要となる保健、福祉活動については、国を通じての調整という仕組みの中で初期には必要な人的資源が十分に確保できなかったのも事実です。この点、AMDAと総社市の連携は、素晴らしいもので避難所での医療救護活動、要援護者のトリアージ、まび記念病院の保険診療による診療機能の復旧等において、日頃の信頼関係に基づいた支援活動のお手本というものを目の当たりにすることができました。

さて、今後予想される南海トラフ地震への対応ですが、もっとも重要なことは、住民一人一人の防災意識の向上です。「災害は忘れたころにやってくる」の言葉通り、災害経験者がほとんどいなくなった頃を見計らったかのように発生します。皆さんも良くご存知なところでは三陸津波でしょうし、個人的経験からは、平成10年の高知豪雨災害を挙げることができます。それ以外にも古くからの伝承を顧みず、市街化を進めた結果として大きな被害が発生したという事例は数多く起こっています。やはり防げる被害はできるだけ避けるということが第一です。

次に早い復旧という観点から、代替のきかないインフラ機能を強靱化しておくということです。病院であればキューピクル(高圧受電設備)が水没すると復電しても院内に電気を供給することはできませんし、給水タンクの位置に問題があれば、給水車が配車されても建物全体に水を供給することはできません。他にも真備町ではNTT施設の水没により固定電話の復旧に長期間を要したり、愛媛県では浄水設備の水没により長期にわたり断水が

続いたところでした。

南海トラフ地震では、被害は岡山県だけでなく広範囲が被災するため、県外からの応援を求めることは不可能と思われます。今回の災害の教訓を活かして、事前の減災対策を進めるとともに、早い復旧ができるよう予め備えをしておくことが重要です。

最後になりましたが、被災された方々が当たり前の日常を取り戻されることを祈念して筆をおかせていただきます。



県南西部災害保健医療活動調整本部会議の様子

## 多くの支援に感謝 水害の経験を将来起こりうる災害につなぐ



一般社団法人吉備医師会 会長 平川 秀三

平成 30 年 7 月 6 日の豪雨水害に対し総社地区での医療援助協力ありがとうございました。行政の長である片岡市長が福祉先進市を提唱し災害対応に対し日頃先駆的に取り組んできたその一環として AMDA との日頃の協力体制の実際的成果が今回の水害に際し発揮されたものと考えます。AMDA の災害対応での迅速性は DMAT、JMAT での救助援助に有機的につながったものと思われま。災害への対応は迅速性、確実性が重要です。災害対応は実臨床です。

災害対応では教科書はなく過去の多くの経験事例からその実効性を演繹し実際に活かしていくものと考えます。グローバルな展開をしてきた AMDA でしょうが医療福祉の先進国である日本でも大きな役割を果たしたことは賞賛に値するものと考えます。災害の少ない岡山県では今回の水害は貴重な経験と考えます。

生活の基盤ともいえる医療体制が全崩壊の真備地区での災害直後の医療提供を支援していただいたこと非常に感謝しております。復興は遅々とはしているものの確実に進展しています。来る 2035 年（プラスマイナス 5 年）に想定されている南海トラフ（鎌田浩毅先生の言では西日本大震災の名称で昨年吉備医師会で講演していただきました）は 20 ～ 35 メートルの津波、マグニチュード 9.1、32 万人以上の死傷者、被害額 200 兆円と想像を絶する大きな災害と推定されています。

広範囲の災害のなかで地震断層の分布より岡山、鳥取、京都は被害は軽度と想定されています。災害の後方支援地区と援助物質の備蓄、ボランティア供給地区として期待されています。今回の水害とは比較にならない位の大災害と思われま。今回の水害で経験したことがらを来る災害に活かしていければと思われま。

今後災害に対する準備（物と心）と情報の伝達スキルは発展するでしょうが少子高齢化の問題が災害でも被災者側でも援助側でも起きてくると推測されま。

最後に、今回市内高校生の自発的ボランティアへの参加（1000 人以上）は感動的でした。（未来をになう人たち）



まび記念病院での健診車

## 災害鍼灸活動に参加して

学校法人帝京平成大学 ヒューマンケア学部鍼灸学科 教授  
AMDA 災害鍼灸ネットワーク 代表世話人 今井 賢治



7月14日（土）から真備町での災害鍼灸活動を開始することとなり、その導入から最終となる8月15日（水）までの両時期において緊急支援活動に参加させていただいた。AMDA 支援活動の展開は、状況に応じた展開があるため、活動開始の心積もりはしていたが、いざ活動開始となると治療用具の準備や、派遣者の調整など早急にすることが出てくる。鍼などの治療用具は最低限のものを準備して現地に入る予定であったが、近年はネットでの注文購入が中心であり、店頭での購入が極めて困難になっていた。活動が始まるというのに鍼を入手できずに困っていたところ、唯一都内では1店舗のみ販売しているという情報を得て、無事入手し持参することができた。活動開始の決定からすみやかに治療用具を準備することをシミュレーションする必要があることを知った。

初日の活動では、できる限りでプライバシーに配慮し、治療室となる幼稚園の床にマットとバスタオルをひいて鍼灸治療を行った。翌日には段ボールベッドが組み立てられ、治療室としての環境が整ってきた。最初の3日間は上肢や下肢の痛みを主症とする受療者の方々が多く、水害後の家の片づけなどの作業が原因であることが伺えた。これまでの経験では腰痛が最も多かったため、水害時の症状の特徴なのかもしれない。しかし、4日目以降はやはり腰痛を主症とする方が多くなっていた。また、小学生や中学生の鍼灸治療の受療もあり、四肢の痛みや、頸部痛を訴える子供たちにも鍼灸治療が貢献した。そして、AMDA は今回の活動で積極的にマッサージを導入し、多くの方々に喜ばれた。災害時における手当の意義は大きく、今後は、鍼灸とともにマッサージや柔道整復などの東洋医療技術も医療支援活動の中で貢献できることだろう。

今回は鍼灸活動に先立ち、熊本県益城町での活動の際に鍼灸師として参加された石堂智行先生が調整員として活動されていた。支援活動を円滑に遂行するのは調整員あってこそである。石堂先生の活動は、調整員兼鍼灸師の役割も大きいことを示していた。

真備町での支援活動では、多くの連携があっただけでなく、被災された方々に貢献できたのだと思う。連携協定による協力体制、関係者のチームワーク、多職種連携など、信頼関係に基づくネットワークの構築など、AMDA の活動を通して学ぶことがとても多い。発生が予想されている南海トラフ地震等に備え、災害鍼灸活動も様々な連携の構築、問題点や課題の抽出から改善までを備えとするのが重要と考え、引き続き関わらせていただきたい。





総社市下原でのボランティア熱中症対応



総社市にて台風対応のため避難者を巡回する AMDA 医師ら



サンワーク総社にて  
掲示物を準備する様子



総社市 避難所を巡回する AMDA 医療チーム



サンワーク総社での体操の様子



総社市・きびじアリーナ避難所で声かけを行う医師ら



まび記念病院健診車前でのミーティング



真備町内で片付けを手伝う様子



真備公民館菌分館を訪れたモンゴル人医師と AMDA 看護師



真備町岡田小学校避難所での弁護士無料相談ブースの様子

## 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動に対する総社市との連携 ～法の制定と相互扶助～

AMDA グループ 代表／認定特定非営利活動法人 AMDA 理事長 菅波 茂

「岡山の災害に関する安全神話が崩壊」した災害でした。具体的には、気候変動による水災害の発生ということです。地震に関しては大丈夫です。なぜなら、日本全国で地下マグマがゼロに近い場所は岡山県吉備中央町と兵庫県の丹波篠山の2ヶ所だけです。しかし、今後は世界的に水災害に対する備えがますます不可欠になると思います。

「経験は知識を智慧に昇華させる」。片岡聡一総社市長の的確な判断、職員の迅速な対応、住民を代表する議会による支援、等々。源流は2013年に総社市が制定した災害支援条例です。災害が発生するたびに、国内外の災害被災地にAMDAと共に職員を派遣してきました。この貴重な経験が総社市民を今回の災害から守り抜くことができたと思います。ちなみに、基礎自治体は地方自治法に縛られており、勝手に他の自治体の災害被災者支援のために職員を派遣できません。しかし、総社市はNGOであるAMDAとの協定に基づいて、AMDAとの合同チームの形式で、国内外に直接的に職員を派遣しました。時代に対応したGO(基礎自治体)-NGO(非政府組織)連携の発想により緊急人道支援に関する地方自治法の壁を突破しました。

GOとNGOの決定的な違いは法の制定の可否です。ノーベル平和賞を受賞した国境なき医師団の年間予算は約400億円ですが、法の制定はできません。岡山県の新庄村は人口がわずかに960人前後で年間予算は35億円ですが、「アジア有機農業プラットフォーム推進条例」を制定して、村長が交代してもその活動を継続しています。総社市は次々に災害対応を含めた社会福祉事業に必要な法の制定を行って事業の積み上げと継続性を確保しています。AMDAは複数の法の制定をしたGOと連携することによって事業の継続性を確保してきました。

今回の被災者支援活動において、総社市として全国初の新鮮な取り組みがありました。全国からの善意の支援

物資を断ることなく全てを受け入れて、高校生など次世代を担う若者を主体としたフリーマーケットを発足させて貴重な参加型の経験の場を提供しています。同時に被災者には選択の自由があり、援助を受ける側のプライドを傷つけていません。以前の災害被災地では、行政関係者が被災者に直接的に支援物資を配る形式のために、支援物資が倉庫に山積みになって不評を買っていました。何故に混乱した非常時にこのような発想ができたのか。理由がわかりました。片岡市長は総社市の各行政地域に複数の補助金を一括して運用を任せる方式を実施してきました。この「運用を任せて責任は取る」方式の応用かもしれません。基本は信頼です。この延長線としての、このような市民オール参加型対応体制を確立してピンチをチャンスに変えた骨太の閃きの発想には感動します。全国自治体の未来の災害対応モデルを彷彿とさせています。西日本集中豪雨被災者発生は総社市にとって初の本格的な被災経験です。にもかかわらず、なぜ全国的に高い評価がされた災害対応ができたのかについて、歴史的な流れを基本にして、少しでも紹介できれば望外の喜びです。

最初に、行政の危機管理対応はトップ次第という認識が大切です。片岡市長は橋本龍太郎元総理大臣の筆頭秘書として世界の一流政治家の言動を経験しています。このような事態の時に彼らならどのように動くのか、常に検証しています。そしてトップの役割は、自己責任でもって、混沌とした状況の中で方針を決定するが、決定が間違えば責任を取る。決定した方針を確実化するのが官僚の役割。法律として制定するのが議会の役割。なお、トップとしての役割は危機管理、公共性そして公益性の順序であると認識しています。公益とは有ればみんなの役に立つ。公共とは無ければみんなが困る。危機管理とは最悪を想定して最善を行う。最悪の状況とは一瞬にして命や財産を失うことです。ポイントは災害です。

2013年にAMDA、総社市と岡山県立大学は「世界の命を救う」連携協力に関する協定を締結しました。この協定にもとづいてAMDAと総社市は国内外の災害被災者支援に合同救援チームを派遣してきました。総社市は総社の名が示すように奈良時代に役所が置かれた場所です。災害に全くご縁がなかった地域ですが、片岡市長は、災害支援の経験により高梁川が決壊する可能性が高いと判断し、前日に複数の避難所を設置して住民を一斉に避難させています。予測が外れていたらオオカミ少年もどきと笑われたかもしれません。集中豪雨による被災を受けて、各災害被災地に派遣された経験者を含め556人(うち消防105人)もの職員が次に何を被災者のためにすべきかを判断して積極的に行動しました。議会は条例制定に関して片岡市長と議論を交わす過程で災害対応の在り方を深めてきていました。なお、市長、職員そして議会の三者のチームワークのすばらしさは2011年の東日本大震災の時に百円支援を議会で可決。約6万人の市民に一人百円を割り当て、約6百万円の緊急予算を創出し、迅速に東日本大震災被災者支援活動費を捻出した事例からも明白です。岡山県内の某市長から千円でなくてよかったと感想がありました。百円は絶妙な価格でした。



AMDA・総社市・岡山県立大学三者協定(2013年)  
左から菅波茂 AMDA グループ代表、辻英明岡山県立大学理事長、  
片岡聡一総社市長、渡邊繁雄総社市議会議員

ちなみに、AMDAが総社市との合同チームを過去に派遣した事例は下記の如くです。

東日本大震災、広島土砂災害(広島県)、北関東東北豪雨災害(栃木県日光市)、熊本地震(熊本県益城町)、糸魚川市大規模火災(新潟県糸魚川市)、北九州北部豪雨(福岡県朝倉市)、北陸豪雪災害(福井県勝山市)、計7件、のべ164人の総社市職員が派遣されました。

今回は総社市との災害支援協定にもとづいて、AMDAは総社市災害対策本部にメンバーとして参加し、被災者への保健と医療事業を支援しました。具体的には、総社市では、医療チームによる避難所での健康支援・災害鍼灸・救護所でのボランティア対応、倉敷市真備町では避難所でのマッサージ・鍼灸・足浴等を行いながらの健康相談・病院支援・仮設避難所での看護師による健康支援を行いました。

**【AMDAのもとにボランティア参加した人数(職種別)】**  
調整員87人、看護師40人、医師12人、薬剤師15人、医療調整員6人、理学療法士1人、保健師12人、鍼灸師40人、調整員・心理士1人、弁護士4人、助産師2人、あん摩指圧マッサージ師1人、介護福祉士1人、学生ボランティア43人、合計265人

一方、総社市の隣町である倉敷市の真備町は警戒警報の発令が遅れ、小田川の堤防の決壊で発生した洪水により家屋が水深4.5mに水没し、51名の死者と多数の被災者が発生。被災者は総社市の用意した避難所へと向かいました。真備町にある11の医療機関のうち10が被災して診療不能となりました。地区の基幹病院であるまび記念病院の2階から患者が自衛隊のポートにより救出される映像が、集中豪雨災害の象徴としてテレビで全国に何回も放映されました。皆様もご覧になったと思います。倉敷市全体の被災者医療支援に関しては、備中保健所と倉敷市保健所のもとに対策協議会が設置され、全国から参加した厚生労働省が設立したDMATや日本医師会が設立したJMAT、全日本病院協会が設立したAMATなどの団体や個人が大いに活動をしました。阪神大震災の反省から、72時間以内に助かる命を助けるために、創設されたDMAT、JMAT、AMAT、NPO法人TMAT(徳洲会グループが設立)などの組織と活動は世界に誇るべきものと思っています。なお、AMDAは吉備医師会およびまび記念病院と協力して、健診車(香川県丸亀市一般社団法人瀬戸健康管理研究所提供)と給水車(十字屋グループ提供)をまび記念病院に横付けする形で外来診療を再開しました。いつ診療が再開されるかと待っていた患者さんの喜びは大きく、尋常ではありませんでした。まび記念病院関係者には大変な混乱時の決断と実施に敬

意を表します。ちなみに、後で紹介しますが、まび記念病院の再開は、災害対策基本法と並行して、保険診療の早期導入にもとづいて行われました。日本災害医療の歴史において画期的なことでした。

洪水被災と津波被災は似たところがあります。浸水による膨大な家具などの不用品や廃棄物などの瓦礫の産出です。すべての主要な道路を埋め尽くしていました。自衛隊により道端に山のように積まれました。ようやく医療支援活動が可能になりました。問題はその後の瓦礫の処理です。膨大な瓦礫を撤去したのは環境省と倉敷市の要請により全国一般廃棄物環境整備協同組合連合会が岡山県環境整備事業協同組合を窓口にして100台の車両により撤去した事実も忘れてはいけません。

今回の洪水の一番の問題点は小田川の堤防の決壊でした。なぜ決壊したのでしょうか。小田川の堤防の修復の必要性は20年前から指摘されていました。その修復工事は、民主党政権による「コンクリートから人へ」のスローガンによってストップしていました。いわゆる忖度です。自由民主党政権に戻った時に工事の再開がなされていましたが、今回の集中豪雨に間に合わなかったのが事実です。小田川堤防決壊による洪水被害のシミュレーション図と今回の被災実体は重ね合わせることができました。人災の要因も否定できません。

一方、被災した真備町住民の避難場所に関して、素晴らしい提言がありました。加藤康子氏（内閣官房参与）による客船を活用した避難所案です。船室での生活空間は従来の避難所の欠点であるプライバシーの確保に加えて快適さが保証されます。私自身が27歳の時に3ヶ月間ほどシップドクターの経験がありますから、船舶内の生活については熟知しています。船主の了解のもと、倉敷市議会有志の議員や岡山や倉敷の経済界の賛同と協力を得ましたが、時期を失って見送りとなりました。南海トラフによる地震及び津波発生時の広範囲な被害に対して非常に有効な対策とと思いました。是非、温存して欲しいものです。

「情けは人の為ならず、義理となって返ってくる」。相互扶助の原則です。総社市に過去の災害被災でお世話になった全国各地の自治体から職員をはじめとする応援が続々と寄せられました。これが日本の精神風土の原点と

思いました。後ほど具体的に紹介します。

「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」は、2014年に具体的に動き始め2015年に第1回の調整会議を行いました。南海トラフによる地震と津波が発生した時に、岡山から近くて最大の被災地域となる徳島県と高知県の被災者に対する医療支援の組織です。中核は自治体連携、医療機関連携そして経済団体連携です。現在、2県9市町村、16の連携自治体、15の協力医療機関、そして1つの協力企業の団体が参加しています。毎年1回の調整会議を開催して南海トラフ災害に対する能力の



第4回南海トラフ調整会議の様子

向上に努めてきました。

ちなみに、総社市は南海トラフによる災害発生時にはAMDAとの合同対策本部を設置して、各地から総社市に集結する医療チームを自衛隊のヘリコプターや民間の船舶で四国に搬送する計画です。なお、災害発生2週目からは総社市から被災地に毎日チャトル便を出します。交代する医療チームや派遣された医療チームのための食事や必要品などを搬送するためです。「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」に参加している自治体や医療機関からも人的や物的支援が寄せられました。この総社市への支援は未来への時系列の相互扶助の具現化です。相互扶助は信頼のネットワークのキーワードです。総社市に対して職員や物的支援をされた自治体は人的支援が17、物的支援が40。のべ2558人のご協力を頂きました。

#### 【人的支援をされた自治体】

仙台市が先遣隊の派遣・本部員・罹災証明の発行・ごみ、新潟市が先遣隊の派遣・本部員・罹災証明の発行・避難所支援、大分県豊後大野市がごみ・消毒、島根県益田市が消毒、東京都杉並区がごみ、新潟県小千谷市がご

み、北海道名寄市がごみ、神奈川県伊勢原市が罹災証明の発行、神奈川県大和市が先遣隊の派遣・罹災証明の発行、山口市がごみ・罹災証明の発行、吉備中央町が罹災証明の発行、香川県丸亀市が罹災証明の発行、熊本県益城町が先遣隊の派遣、徳島県美波町が物資配分、三重県鈴鹿市が罹災証明の発行、福岡県朝倉市が先遣隊の派遣、大阪府松原市が消毒。

#### 【物的支援をされた自治体】

仙台市が毛布・敷毛布・アルミシート、長野県飯田市が毛布、熊本市がブルーシート、福岡県田川市がブルーシート、福島県相馬市が毛布、玉野市が毛布、瀬戸内市が毛布、三重県津市が毛布、富山市が毛布、山口市がエアベッド、神奈川県大和市が携帯トイレ・ウェットティッシュ、長野県茅野市がブルーシート、大阪府和泉市がブルーシート・飲料・おむつ・生理用品、埼玉県本庄市が土のう袋・ブルーシート・飲料水、大阪府松原市が安全靴、埼玉県和光市が飲料水・ブルーシート、福井県勝山市がブルーシート、神奈川県伊勢原市が毛布、三重県名張市が毛布、京都府与謝野町がブルーシート、鹿児島県日置町が飲料水、静岡県浜松市が飲料水・ブルーシート、福島県伊達市がブルーシート・角スコップ・笹ほうき・缶詰他食品、新潟県見附市がブルーシート、高知市が飲料水、熊本県菊池市が飲料水・土のう袋、杉並区が飲料水・土のう袋・軍手他、東京都稲城市が飲料水・土のう袋他、高松市が消石灰、群馬県太田市がうちわ、浅口市が麦わら帽子、愛媛県西条市が下着・生理用品等生活用品、美作市・備前市・新見市・赤磐市・津山市・津山圏域消防本部がそれぞれ土のう袋、高知県香美市が防災食・生理用品・紙おむつ

日本の災害医療の歴史においてなかなか実現しなかったことが今回の活動中に現実化しました。日本の法律の運用は前例主義ですが、画期的な前例が具現化した事実を紹介します。日本の災害被災者医療支援は災害対策基本法にもとづいて行われています。災害対策基本法は避難所にいる被災者の医療支援が主たる目的です。今回、驚くべきことが起きました。岡山県保健福祉部の英断により、災害対策基本法に加えて、保険診療の早期導入が可能になったことです。この英断により次の3点が可能

となりました。1) 患者とかかりつけ医の関係の早期回復。2) 被災した診療機関の早期回復。3) 医療ボランティアの医療訴訟対応。被災した医療機関が回復して患者とかかりつけ医の関係が回復しないと外部からの医療ボランティアは撤収することができません。しかし、災害対策基本法には被災した医療機関の早期回復に関する支援はありません。加えて、AMDAは1995年の阪神大震災以後、国内の被災地に医療ボランティアを必ず派遣してきましたが、彼らが医療事故に巻き込まれることを常に心配してきました。岡山県保健福祉部の判断は今後の災害医療ボランティアの医療事故対応の偉大な前例になると確信しています。この紙面を借りて厚く感謝申し上げます。



まび記念で早々に健診車を活用して保険診療が再開された

最後に、太陽の黒点の減少に誘発される水災害は集中豪雨という形で日本全国のどこにでも発生します。これに対しては、まび記念病院で実施した健診車を中心とした、機動性に富む医療支援が主流になると確信しました。診療、検査、処置、医薬品、水、発電、燃料、簡易トイレなどを総合的に編成した「AMDA災害医療機動チーム」の形成とこれを支援できる全国的な体制の確立を考えています。「AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム」の全国版化です。

西日本集中豪雨被災地である総社市に、総社市が「災害支援条例」にもとづいて支援をした全国各地の基礎自治体から人的および物的支援が続々と寄せられたことを紹介しました。そして、今なお、日本人の行動科学（精神）の原点は「相互扶助」であることが明確に証明されました。全国の基礎自治体は太陽の黒点減少に起因する気候変動による水災害にいつでも直面せざるを得ない現実と向かい合わなければなりません。住民をどう守るのか？トップの危機管理事項です。基礎自治体及び住民に

よる事前対策そして被災した時の対策等の重要性は言うまでもありません。しかし、限界があります。外部からの支援が不可欠になります。災害支援はスピードが要求されます。それには基礎自治体同士の直接支援が有効です。どうすればよいのか？日常レベルでの関係性が必要です。姉妹都市縁組などがその一例です。最も有効なのが「困った時に助けてくれるのが真の友」という古今東西の心理です。極論を言えば、災害時に助け合う実績を積み上げていくことです。これこそが「相互扶助」の応用です。様々な相互扶助のネットワークを日本国内に重複させることが真の保険になります。

将来の構想を紹介します。片岡市長と友實武則赤磐市長を中心として岡山県内の複数の基礎自治体による連携で前述の「AMDA 災害医療機動チーム」の実現に向けて各方面に働きかけています。この基礎自治体連携に「災害鍼灸」を推進している鍼灸界や、炊き出しを支援する AMDA 支援農家グループの参加による「医療、鍼灸、炊き出しの複合支援体制」で国内の災害対応が迅速にできればと考えています。実施する過程において参加する基礎自治体がどんどん増えて、結果として、日本国内に災害関連「相互扶助」ネットワークがはりめぐらされることを期待しています。

友實市長は、岡山市の危機管理監の役職を務めた経歴があります。赤磐市の防災士の資格取得者は人口比率において岡山県内トップの実績を誇っています。

2016年にAMDAと災害支援協定を締結して、2017年より「防災国際フォーラム」を年に2回のペースで共催しています。柔道と空手も行う武闘家です。2018年8月にはAMDAが2011年より実施しているスリランカ平和構築プログラムに5名の赤磐市中学生と3名の職員と共に参加されました。スリランカ現地での会議に臨んで物おじせずに堂々と意見を述べられました。国際社会に立派に通用する貴重な日本人の一人です。

ちなみに、片岡市長も2018年6月に、インド連邦首都ニューデリーで開催されたWHOの会議に招待されて、総社市の社会福祉政策を紹介しました。200人から集まっていた各国の局長クラスから大きな拍手があったのは彼の発表だけでした。お世辞にもあまり上手とは言えない英語でしたが、実績に裏付けられた内容と伝えた

という強い気持ち参加者を感動させました。片岡市長と友實市長は両者ともに国際社会で活躍できる人材であることを報告しておきます。自治体の首長の外交の時代の到来を示唆しています。

なお、吉報としては、2018年3月にAMDAと総社市の共催で開催した「総社市の挑戦～全国屈指の福祉先駆都市へ～」福祉フォーラムにパネリストとして参加された葛西健氏がこの10月に世界保健機構西太平洋地域事務局長に選ばれました。西太平洋地域事務局には日本や中華人民共和国を含めて30ヶ国・19億人が加盟しており、フィリピンの首都マニラに事務局があります。葛西氏は総社市の社会福祉政策は海外に紹介、普及をさせる価値が充分あると発言されました。具体的には、片岡市長の世界保健機構のニューデリー会議における招聘スピーチとして実現しました。葛西新事務局長には感謝と共に今後の連携についてもご助言とご指導をお願いしたく思っています。ちなみに、2018年4月にジュネーブにおいて横倉義武世界医師会長（日本医師会長）が世界医師会と世界保健機構本部と災害対応を含む協定を締結したことを付記します。



総社市の挑戦～全国屈指の福祉先駆都市へ～の様子  
左から蒲原基道・厚生労働事務次官  
葛西健・WHO西太平洋地域事務局事業統括部長  
松田久・岡山経済同友会代表幹事  
片岡聡一・総社市長

なお、南海トラフに関する政府予測として、「死者数が30万人以上、被災者数が300万人以上、流通機能が30%に低下して2ヶ月以上続く」と発表されています。これは完全に国内対応能力を超えています。国際的な支援体制の構築を急いでいます。2018年4月に開催された世界医師会理事会において、横倉世界医師会長（兼日本医師会長）による世界医師会災害医療体制 - アジア大

洋州医師会連合モデル構築の提案が決定されたことも奇貨として大いに活用できます。

私としては、世界医師会災害医療体制に、国連機関、各国政府、NGO/NPO、大学、公益団体そして企業を加えた7者連携で構成される「世界災害医療プラットフォーム」の形成を目指しています。どの団体にも災害医療に対応する時に長所と短所があります。各団体の長所を組み合わせることにより、人類に貢献できる素晴らしい災害対応のプラットフォームが形成できると確信しています。また、AMDAがその推進役をできるなら望外の喜びです。

「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」に参加されている医療機関には錚々たる世界に通用する医療機関もたくさんあります。この厳しい医療財政にもかかわらず、被災地に無償で医療スタッフを派遣する意思と能力があること自体が評価されるべきです。更に、世界の災害被災者医療支援に協力することにより、世界規模の「相互扶助」のネットワーク形成になります。このネットワークが南海トラフによる地震や津波の発生時に被災者医療支援に大きな力となって寄与すると確信しています。したがって、「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」と「世界災害医療プラットフォーム」は相互に関連する両輪と考えてもおかしくない時が近いと考えています。

2017年1月に松田久岡山経済同友会代表幹事(当時)とジュネーブにある災害に関連する国連及び国際機関を訪問しました。世界保健機構(WHO)、国連国際防災戦略事務局(UNISDR)、国連高等難民弁務官事務所(UNHCR)、国連人道問題調整事務所(UNOCHA)、国際赤十字委員会(ICRC)などです。

驚いたことに、どの団体も南海トラフによる地震・津波による大災害が発生する可能性について情報を持っていませんでした。日本には岡山と丹波篠山の2ヶ所だけマグマが0である科学的根拠を提示して、日本に大災害が発生した時には、岡山が国際支援を受け入れるのにふさわしい場所であると説明しました。国連機関は日本

政府の要請によって災害発生時の協力が可能になるが、事前の準備には特に必要がないとのことでした。AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームとこれらの国連機関や国際機関との連携強化の必要性と可能性をひしひしと感じています。



2017年1月ジュネーブ訪問  
松田久氏、新垣尚子氏(UNISDR)とともに

2015年に飯泉嘉門徳島県知事はAMDAの世界災害医療支援に関して年間百万円の予算を決定してくれています。「南海トラフ災害発生時に徳島県の被災者はAMDAのお世話になるのだから」と。友實市長はAMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームの強化のために職員1名を2年毎に出向させてくれています。AMDAとしては、国内外の災害支援に積極的に派遣して災害対応の経験を積んでもらっています。片岡市長はAMDAとの合同チームを編成して国内外に「相互扶助」のネットワークを拡充しています。今後も、自治体との人的交流を積極的に推進したく考えています。

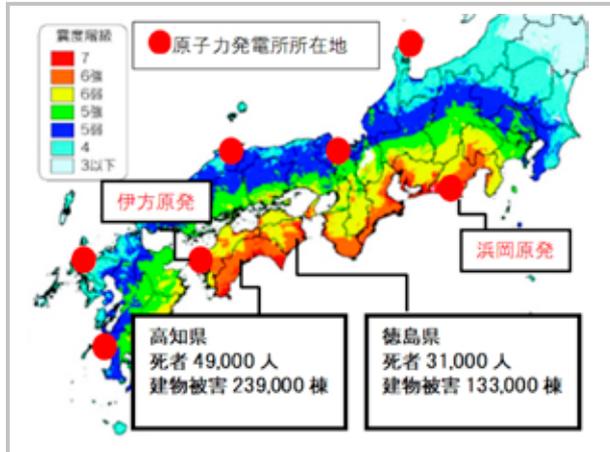
結論として、総社市の災害対応事例から、相互扶助が日本の原点であると共に、基礎自治体-NGO連携を活用して基礎自治体の枠を超えてお互いに助け合うことの積み重ねこそが日本国内の災害に対応する最大の求心力であることを再認識しました。

今後ともに、基礎自治体-NGO連携のますますの強化が国内外の気候変動による災害被災者支援に大きな役割を果たすことを祈念しています。

# AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム 概要説明と進捗状況

## 1. 南海トラフ地震被害想定と徳島県・高知県支援

### <南海トラフ巨大地震による被害想定 全国版>

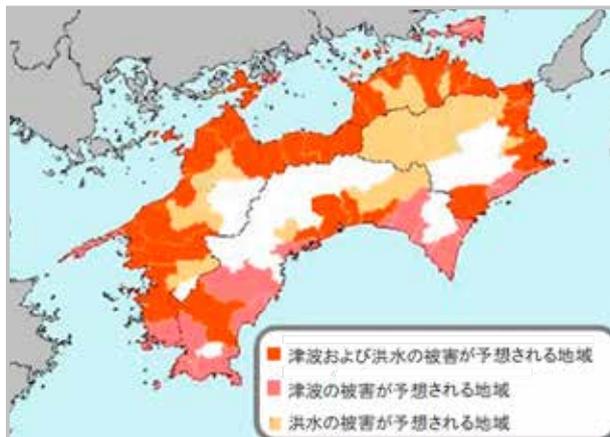


#### 被害状況 (予想)

東京都：死者 1,500 人、建物被害 2,400 棟  
 静岡県：死者 109,000 人、建物被害 319,000 棟  
 大阪府：死者 7,700 人、建物被害 337,000 棟  
 兵庫県：死者 58,000 人、建物被害 54,000 棟  
 和歌山県：死者 80,000 人、建物被害 190,000 棟  
 岡山県：死者 12,000 人、建物被害 34,000 棟  
 宮崎県：死者 42,000 人、建物被害 83,000 棟

\*データ引用：内閣府発表 ([http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku\\_wg/pdf/20120905\\_06.pdf](http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg/pdf/20120905_06.pdf))

### <南海トラフ巨大地震による被害想定 四国版>



#### H.25 年 11 月徳島県発表

建物の被害：116,400 棟  
 人的被害：死者 31,300 人 (津波による死者 26,900 人)  
 避難者数：360,000 人

#### H.25 年 2 月高知県発表

建物の被害：153,000 棟  
 人的被害：死者 42,000 人 (津波による死者 36,000 人)  
 負傷者 36,000 人、避難者数：438,000 人

\*データ引用：国土交通省ハザードマップポータルサイトより (<http://disaportal.gsi.go.jp/viewer/index.html?code=4>)

地元医師会は膨大な遺体の検視に忙殺され、圧倒的に医療スタッフの不足が予測される

**医療支援の必要性が増す**

### 徳島県・高知県を支援

日本の大部分がこのように被災する中で、どこまで日本政府が機能するのか不透明であり、国内および海外からの支援が大都市に集中する可能性がある。加えて四国は、島であるためアクセスが難しく、支援が十分に行き届かず孤立する可能性が高いと考える。そこで AMDA は、徳島県・高知県の 10 か所を支援することを決定した。

## 2. AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームとは

AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームとは、AMDA、岡山県、徳島県、香川県、高知県の協力自治体、全国の協力医療機関と企業などに参加いただいているプラットフォームであり、発災前から協力して準備を行い、被災地支援を行っていく体制を構築している。

AMDA は、岡山県総社市、岡山県備前市、岡山県赤磐市、岡山県和気町、徳島県、徳島県阿南市、徳島県阿波市、徳島県美馬市、徳島県牟岐町、徳島県美波町、徳島県海陽町、香川県丸亀市、高知県、高知県高知市、高知県須崎市、高知県黒潮町と協力協定を締結している（2018年5月16日現在、建制順にて記載。協定一覧は別紙参照）。

## 3. 予測される被災地の状況

- ① アクセス困難：明石海峡大橋不通、瀬戸大橋不通、しまなみ海道不通、四国山脈山崩れによる道路不通
- ② 死傷者数＞医療スタッフ数 圧倒的な不足
- ③ 地元医師会の疲弊 膨大な数の遺体の検視
- ④ 被災地が広域 アクセス、大都市被災などの要因による応援医療スタッフ確保が困難
- ⑤ 医薬品、医療物資の不足 全国的な物流停止
- ⑥ 冬の災害発生 低体温による死亡者の増加
- ⑦ 海外からの医療チーム、支援団体 殺到、混乱
- ⑧ 原発事故の可能性 浜岡（静岡）、伊方（愛媛）

**事前準備の必要性あり**

## 4. 避難所における医療分類

- ① 外傷、低体温
- ② 上気道感染症、胃腸疾患、精神疾患（不眠、神経症）、非衛生症候群（皮膚）、廃用症候群、運動器疾患
- ③ 集団感染症、インフルエンザ、ノロウイルス、ムンプス等ウイルス感染
- ④ 生活習慣病
- ⑤ 巡回診療
- ⑥ その他（エコノミー症候群）

災害発生後数日間

避難所生活に起因

## 5. 想定している AMDA 派遣医療チームの概要

- ① 派遣期間：1週間（6泊7日）
- ② 派遣場所：徳島県（阿南市、阿波市・美馬市、牟岐町、美波町、海陽町）、高知県（高知市、須崎市、黒潮町）
- ③ 募集職種：医師、看護師、薬剤師、介護福祉士、鍼灸師、理学療法士、臨床検査技師ほか
- ④ 予定医療チーム撤収日：災害発生から8週間後
- ⑤ 最大投入人数：1避難所につき、最大20名のAMDA派遣者（調整員を含む）を想定している。
- ⑥ 対応避難所数：10避難所

\*「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム＝概要説明＝」に記してある事柄が、被害状況によって、突然、変更になる可能性も大いにあり得ることをあらかじめご了承ください。

## 6. AMDAが想定している被災地に入るまでの派遣医療チームの動き



## 7. 中国・四国地方の主な拠点と想定被災地地図



## 8. 想定被災地の食料備蓄先

< 2018年10月時点で AMDA から四国への食糧備蓄先 >



## 8. 想定被災地の活動予定避難所、宿泊施設と備蓄場所例

### <徳島県美波町モデル>



### <高知県黒潮町モデル>



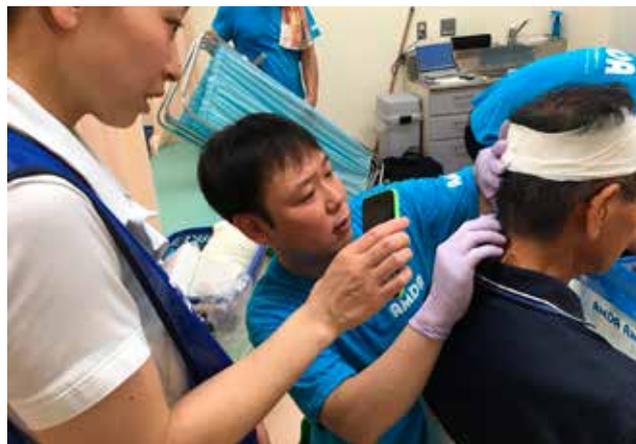
## 10. 南海トラフに向けた活動一覧（協定一覧）

締結日	内容
2007/10/26	生活協同組合おかやまコープと AMDA との協定
2011/12/16	十字屋グループと AMDA との連携協力に関する協定
2013/09/10	AMDA と岡山県立大学、総社市との「世界の命を救う」連携協力に関する協定
2014/08/30	丸亀市と総社市と AMDA の3者連携協定
2014/12/26	高知県と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定（株式会社高知銀行との事前融資枠の設定）
2015/02/02	須崎市と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定
	黒潮町と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定
	高知市と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定
2015/02/03	南海トラフ巨大地震等における医療救護活動に関する協定 （徳島県、株式会社阿波銀行、AMDA との3者連携協定）
	美波町と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定
2015/03/14	株式会社ザグザグと AMDA との連携協力に関する協定
2015/03/17	NGO 台湾ルーツとの協定
2015/04/13	阿波市と AMDA との大規模災害発生時における施設使用に関する協定
2015/05/22	一般社団法人徳島県医師会と AMDA との大規模災害時における支援に関する協定
2015/08/12	美馬市と AMDA との連携協定（大規模災害時の支援に関する協定）
2015/09/12	両備ホールディングス株式会社との連携協力に関する協定
	牛窓ヨットクラブとの連携協力に関する協定
2015/10/08	徳島県と連携協定（国際的な医療救護活動の支援に関する協定）
2015/11/11	全国訪問ボランティアナースの会キャンナスと AMDA の連携協力に関する協定
2016/03/24	一般社団法人岡山経済同友会と AMDA との大規模災害発生時における緊急医療支援活動実施に関する連携協定
2016/05/29	特定非営利活動法人航空医療研究所と AMDA との連携協力に関する協定
2016/05/30	独立行政法人国立病院機構福山医療センターと AMDA との連携協定
2016/05/31	備前市と AMDA との連携協力に関する協定
2016/07/04	和気町と AMDA との連携協力に関する協定
2016/07/05	AMDA と公益社団法人岡山県看護協会との連携協力に関する協定
2016/07/06	吉備学区連合町内会と AMDA との緊急人道支援活動推進にむけての連携に関する協定
	学校法人川崎学園と AMDA との連携協力に関する協定
2016/10/11	社会医療法人全仁会倉敷平成病院と AMDA との連携協定
2016/12/21	赤磐市と AMDA との連携協力に関する協定
2017/02/01	医療法人創和会しげい病院と AMDA との連携協力に関する協定
2017/05/15	ムネ製薬株式会社と AMDA との連携協力に関する協定
2017/05/30	阿南市と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定書締結
	牟岐町、海陽町と AMDA との大規模災害時の支援に関する協定
2017/08/25	学校法人朝日医療学園朝日医療大学校と AMDA との連携協力に関する協定
2017/09/18	岡山流通情報懇話会、一般社団法人岡山経済同友会と AMDA の大規模災害発生時における緊急医療支援活動実施に関する連携協定
2017/10/12	公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構倉敷中央病院と AMDA との連携協力に関する協定
2017/11/02	ラッフルズメディカルインターナショナル/中国と AMDA との連携協力協定
2017/12/26	有限会社アイ薬局と AMDA との連携協力に関する協定書

## AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動 活動概要

2018年7月5日から西日本を中心に降り始めた大雨は各地に甚大な被害をもたらした。この状況を受け、AMDAは7日より総社市での被災者支援活動を開始、さらに12日からは倉敷市真備町での被災者支援も実施した。8月31日まで被災者の健康支援を中心としたさまざまな支援活動を行った。活動期間中の派遣者総数はのべ265人（学生ボランティアを含む）。

なお、医療支援活動の実施に際して、AMDAは、岡山県保健医療調整本部に活動を登録している。（7月10日付）



### 1. 活動の概要

活動期間	2018年7月7日（土）～8月31日（木）
活動場所	<p><b>総社市</b>                  きびじアリーナ、サンワーク総社（勤労者総合福祉センター）、昭和公民館、下原公会堂ほか</p> <p><b>倉敷市（真備町）</b>                  倉敷市立岡田小学校、真備公民館菌分館、真備公民館岡田分館</p>
派遣者数のべ人数	<p><b>総社市 総数：145人</b>                  医師   9人、看護師   28人、薬剤師   15人、医療調整員   4人、鍼灸師   10人                  保健師   11人、心理士   1人、調整員   61人、学生ボランティア   5人</p> <p><b>倉敷市（真備町） 総数：170人</b>                  医師7人、看護師   19人、薬剤師   1人、医療調整員   5人、鍼灸師   38人                  あん摩マッサージ指圧師   1人、弁護士   4人、調整員   51人、助産師   2人                  保健師   3人、介護福祉士   1人、学生ボランティア   38人</p>
協力自治体	黒潮町（高知県）、美波町（徳島県）、海陽町（徳島県）、阿南市（徳島県）、赤磐市（岡山県）

### 2. 活動のタイムラインと活動地、活動内容の推移

日付	活動地	主な活動内容
急性期	7/7（初日）	総社市役所での情報収集、避難所での医療支援開始（A）
	7/8-7/9	総社市 避難所での巡回医療支援、避難所移動に伴う調整業務支援（B）
亜急性期	7/10-8/31 総社市 倉敷市真備町	避難所での避難者を対象とした健康支援活動、被災者を対象とした法律相談、物資支援、復興ボランティアを対象とした医療支援、台風上陸に伴う特別医療支援活動（C）

### 3. 活動時期に沿った緊急支援活動内容の詳細

#### A. 災害急性期（7/7）の活動詳細

時間	活動内容
11:35	第一次派遣者として AMDA 調整員が総社市役所到着。
11:52	災害対策本部において片岡聡一総社市長と活動について協議。避難所を巡回することに決定。
12:00	AMDA 本部を第2次派遣チーム（看護師、調整員各1名）が出発。
13:45	AMDA 第2次派遣者が総社市役所到着。
14:00	モバイルファーマシー（移動調剤車）が総社市役所に到着。 総社市、地元医療機関、および AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関の協力のもと、医師3人、薬剤師2人、看護師1人、調整員1人で医療チームを編成。
14:12	きびじアリーナ避難所に向けて総社市役所を出発。
~ 18:00	393人が避難していたきびじアリーナで避難者に対応。外傷患者2人を含む11人を診察し、必要に応じて薬を処方した。
18:00	昭和小学校避難所に向けてきびじアリーナを出発。 総社市、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関、および地元のボランティアらと医師1人、薬剤師1人、保健師1人、調整員2人の医療チーム体制で次の避難所へ。
~ 20:30	11人を診察したほか、エコノミー症候群予防の体操を伝えた。
21:30	総社市対策本部での会議にて情報共有。



総社市災害対策本部での協議の様子



モバイルファーマシー到着



きびじアリーナ避難所に向けて出発

#### B. 災害急性期（7/8-9）の活動詳細

8日

きびじアリーナ避難所に「AMDA きびじアリーナ救護所」を開設。医師4人、薬剤師14人、看護師7人、理学療法士1人、調整員7人の医療チーム編成で、午後6時までに計83人を診察した。うち2人は医療機関への救急搬送となった。また、38人に薬を処方した。



きびじアリーナ避難所の様子

9日

熱中症対策のためきびじアリーナ避難所で過ごす962人全員を他の避難所へ移動させた。総社市健康医療課と協働し、看護師、保健師、調整員が3人1組×4チームの体制で、避難者一世帯ごとを調査。医療介入の必要な方や要支援者の情報を収集し、それぞれの状況に応じて、移動先の避難所を決定した。特に医療介入の必要な方はサンワーク総社避難所に移動。夜にはほぼ全員の避難者の移動を完了することができた。



AMDA きびじアリーナ救護所の様子

## C. 災害亜急性期（7/10-8/31）の活動詳細

被害の状況が明らかになる中、緊急的な支援活動から長期化する被災者への支援活動が求められるようになった。これを受け、AMDA では自治体と連携を取りながら被災者のニーズに合った活動を実施。活動場所や活動内容が多岐にわたるため、活動場所ごとに以下のように活動を区切って内容を紹介する。

① サンワーク総社（勤労者総合福祉センター）
② 倉敷市立岡田小学校
③ まび記念病院
④ 真備公民館菌分館
⑤ 救護所（昭和公民館、下原公会堂、真備公民館岡田分館）
⑥ 総社市内避難所（台風 12 号緊急対応）
⑦ その他

### ① サンワーク総社（勤労者総合福祉センター）

#### 活動背景

サンワーク総社避難所は医療介入の必要な方がおられる世帯を集めた福祉避難所的役割をもつ避難所。総社市在住の被災者だけでなく、倉敷市真備町で被災された方も同避難所に避難しており、最大で 29 世帯 76 人の方が避難生活を余儀なくされていた。



避難者に声掛けを行う AMDA 看護師

#### 活動内容（活動期間：7/9～8/15）

##### ■ AMDA 医療チームによる避難所での健康支援活動

避難所を運営する総社市からの要請を受け、AMDA ではサンワーク総社避難所で日中の医療チームの常駐を決定。活動期間中、毎日、看護師（保健師）と調整員が、避難所で過ごす方たちの見守り、声掛け、生活介助や避難所の環境整備などを行った。また、状況に応じて医療機関や市役所など関連窓口に繋ぐ役割を担い、これらの活動を自治体の保健師などと情報を共有することで、避難者の安心と安全を確保することができた。



避難所での鍼灸治療の様子

##### ■ 避難所での健康支援活動（鍼灸支援）

長期化する避難所生活で体の痛みやストレスを訴える方も多かったため、心身の健康改善に効果が期待できる鍼灸治療の導入を決定。AMDA 災害鍼灸チームが訪問する形で鍼灸治療やマッサージの施術を実施した。のべ 63 人に鍼灸治療を、のべ 13 人にマッサージを行うことができた。

### ② 倉敷市立岡田小学校（真備町）

#### 活動背景

倉敷市真備町内に設置された避難所の一つである岡田小学校避難所は、甚大な浸水被害となった。自治体より保健師の派遣は行われており医療チームの派遣は必要ないと判断した。しかし、避難生活の長期化が予想され、別の形での健康支援が必要であると判断した。

## 活動内容（活動期間：7/11～8/15）

前述の状況を鑑み、AMDA 災害鍼灸チームが中心となって鍼治療の施術を行うほか、あん摩マッサージ指圧師による施術や足浴などを提供することで、避難所で生活をする方々や自宅避難をされている方々の心身の健康支援を行った。さらに、弁護士による無料法律相談や在日外国人被災者へのサポートなども行った。

### ■避難所での健康支援活動（鍼灸支援）

避難所内に AMDA ケアルームを設置し、長引く避難所生活でストレスが蓄積した避難者の方や、自宅の復旧作業で身体を酷使する方々への健康支援として、鍼治療、マッサージ、足浴などを提供した。いずれも、一人一人に時間をかけながら対応するのが特徴。このため、自覚症状がないものであっても、主訴とは別に体の不調を発見するケースも多かった。被災者の方の状況によっては、避難所を担当する自治体の看護師・保健師などに健康状況を共有するなどし、連携をはかりながら健康支援にあたった。

利用者は小学生から高齢者の方まで。毎日、話をしに来られる方も多く、気軽に立ち寄りことのできる「憩いの場」としても利用していただくことができた。利用者が派遣者らとゆっくり時間を共有することで、不安や悩みなど気持ちを吐露する場所ともなっていた。期間内にのべ522人の方に鍼治療、200人の方にマッサージの施術、242人に足浴を提供することができた。

### ■弁護士による無料相談（7/15、16、21、28、8/3）

自宅や職場が被災し、今後の生活の見通しが立たない中、浸水による保険請求、借家の家賃問題、休業など、それぞれが様々な悩みを抱えて避難所生活を送っていた。このような方々に対し、弁護士が避難所内を巡回するなどし、声掛けを行い、のべ76人に対し無料法律相談を実施した。弁護士が専門的な観点から相談に応じることで、避難者の不安感やストレスなどの軽減の一助となった。

### ■在日外国人被災者へのサポート（7/15）

必要な情報が日本語のみで発信されることが多い中、必要な支援が受けられていない在日外国人のために、AMDA 調整員1人が在日外国人を法律相談への誘導や必要に応じて通訳の支援を行った。



ケアルームでの鍼灸治療の様子



岡山県立大学の学生ボランティアも足浴を担当した

## ③ まび記念病院（真備町）

### 活動背景

倉敷市真備町にあった11の医療機関のうち、10が甚大な浸水被害を受けた。特に地域の基幹病院である医療法人和陽会まび記念病院は、7月6日の深夜から浸水が始まり日付が変わった7日の未明に1階部分が全て浸水（2階は被災していない）。一時は患者や周辺地域から避難した被災者の方200人以上が病院に取り残された。病院は電気、水道、固定電話などライフラインはいずれも断たれた状態となり、病院機能は全面停止となった。8日から開始された自衛隊などによる救出活動により、すべての避難者が救出された。

## 活動内容（活動期間：7/18～7/28）

### ■病院支援と保険診療の早期再開

いち早く被災地の基幹病院の機能を回復すべく、吉備医師会、まび記念病院、AMDAの3者が協力体制をとることを確認し、再開に向けて始動。「健診車1台をまび記念病院駐車場に置き診療を再開する」「運営は吉備医師会が主導し他の被災した診療機関の医師も診療可能とする」「保険診療を行う」とし、岡山県医療推進課、保健所、厚生労働省の許可を得ることが出来た。これを受け、7月18日より3日間の試験的運用を経て、上記3者による健診車を用いての診療活動を開始した。（7月23日からは吉備医師会とまび記念病院の運営となった。）

AMDAは18日から28日まで一般社団法人瀬戸健康管理研究所（丸亀市）より健診車を借り受ける形で保険診療の再開に協力。同時に医療者及び調整員の派遣も実施した。

なお、まび記念病院は30日より、健診車にかわり設置されたプレハブの仮設診療スペースで患者の受入れを継続。約2か月を経て9月18日に院内の一部で外来患者の診療を再開した。



健診車の前で診察を待つ患者たち



診察前の問診を行う AMDA 医療調整員ら

## ④ 真備公民館菌分館（真備町）

### 活動背景

倉敷市真備町箭田地区の小規模多機能ホーム「ぶどうの家真備」は、西日本豪雨で浸水被害を受けた。このため、その入居者と職員は、真備公民館菌分館を仮設避難所として、そこでの生活を余儀なくされていた。ほかの行先のない避難者の方も受け入れる状況の中、高齢者が多く、日夜を通じた見守りや介助が必要であった。そのため、発災当初から施設スタッフが24時間体制で見守りを続けた。日中は施設のスタッフで対応したものの、中には被災したスタッフもいて、支援する側の疲労が出始めていることが判明した。

### 活動内容（活動期間：7/21～8/31）

#### ■仮設避難所での看護師による健康支援

このような状況を受け、7月21日からAMDAは夜勤を中心に担当可能な看護師を派遣。施設の職員らと共に、避難された方々の支援にあたり、特に夜間は見回りやトイレ介助などを行った。そのほかにも学生ボランティアの協力を得て、避難者の日中の支援活動も行った。具体的には布団干し、食事の準備と見守り、レクリエーションの時間なども設け、避難者の生活に寄り添った支援活動を行った。特に学生ボランティアが企画・運営を行ったレクリエーションでは歌を歌ったり、身体を使ったものが多く、支援開始時には椅子に座っていた人も立って踊りだすなど、楽しく過ごす様子が見られた。また、活動の後半には避難者の方からは、「夜眠れなかったが、1か月経ち、避難所生活にも慣れてきて、以前より眠れるようになった。」という声も聞かれた。



避難者に声掛けを行う AMDA 看護師

## ⑤ 救護所（昭和公民館、下原公会堂、真備公民館岡田分館）

### 活動背景

広域にわたり甚大な被害を受けた総社市および倉敷市真備町には、全国から多くのボランティアが詰めかけ被災した住民の方々とともに復旧作業を行った。特に連休や夏休みなどを利用して来岡される方も多か

った。しかしながら、7月、8月は台風の日を除き連日35度を超える猛暑日が続いた。このため、作業されている方の熱中症や作業中の負傷などに対応すべく、救護所が設置された。

### 活動内容（活動期間：右表参照）

#### ■救護所でのボランティア対応

復旧作業にあたる住民やボランティアの方を対象とした救護所へ、総社市の保健師と看護師1、2人に加え、調整員を派遣して、負傷者や熱中症患者の対応などを行った。のべ11日の活動で77人の患者に対応。そのほか、水分補給やこまめな休憩の呼びかけや、スポーツドリンクなどを配布するなど熱中症予防にも力を入れた。

### 【救護所の設置と活動期間一覧】

昭和公民館（総社市美袋）  
7月14日～7月16日

下原公会堂（総社市下原）  
7月14日～7月16日

真備公民館岡田分館（倉敷市真備町）  
8月5日～8月12日

## ⑥ 台風12号特別対応～総社市内10カ所の避難所を巡回医療相談～

### 活動背景

西日本豪雨被害から復興に向けて進んでいる中、7月29日には台風12号が西日本に上陸した。西日本豪雨の教訓を受けて、早めに避難される方も多く、総社市内だけでも多くの避難所が開設された。

### 活動内容

#### ■医師による避難所巡回

台風通過に伴い、AMDAは総社市、吉備医師会と連携を取りながら特別体制を敷いて支援活動にあたった。AMDA医師2人と調整員1人が総社市保健師と合同で、市内10カ所全ての避難所を丸一日巡回し、避難者の医療相談を行った。巡回を行ったのは昭和公民館（総社市美袋）、総社市役所西庁舎（総社市中央）、久代分館（総社市久代）のほか7カ所の公設避難所。のべ28人の医療相談に対応した。

このような非常時に医師が避難所を巡回していること自体、避難者の方々にとっては大きな安心材料になった。バイタルチェックや、避難者の健康状態の問診を中心に、一人一人の方に時間をとって対応することができた。台風の通過、長引く避難生活、今後の生活再建に向けた不安などのストレスのため、血圧が上昇している方、不眠、頻尿などの方も中にはいたため、必要に応じて、病院への受診を勧めた。



巡回医療相談の様子

## ⑦ その他

#### ■物資支援

多くのボランティアが復旧活動に従事している被災地では、7月、8月と酷暑が続き、熱中症の危険性が高まっていた。このため、飲料水やタオルなどを以下の団体に物資支援として寄贈した。物資支援の内容は以下の通り。

寄贈先	支援物資内容	実施日
総社市社会福祉協議会	スポーツドリンクおよび経口補水液（130箱3120本）、経口補水ゼリー（1箱6本）、野菜ジュース（3箱60本）、タオル（新品60枚）	7/20,31 8/13,15
総社市役所	タオル（新品200枚）	8/13
岡山市社会福祉協議会	スポーツドリンク（10箱、240本）	8/4

#### ■海外医療スタッフの支援活動への参加

モンゴル人医師2人が医療調整員としてAMDAの支援活動に参加した。直接の医療行為はできないものの、被災者の方とお話をする機会もあり、遠いモンゴルからの来訪者に被災者の方から感謝の言葉をいただいた。モンゴル人医師は、今回の活動を通じて、被災地の惨状に心を痛め、活動ののちに出席した総社市災害対策本部会議で困難にみまわれた子どもと高齢者に対する心のケアの必要性を強調した。

総社市での支援活動に関して

## 平成30年7月豪雨災害を振り返って

岡山県総社市 保健福祉部 部長 平野 悦子

美しい紅葉が見られる頃となりました。高梁川沿いの山々も少し紅葉しかけてきました。家屋や人まで飲み込んだ高梁川は、穏やかな流れになり、美しい景観の一端を担っています。こんな景色を見てさえ自然って本当にすごいと畏敬の念を感じます。

今年7月の豪雨は「まさか」の災害でした。防災訓練で「まさか」に備えると言ってきましたが、想定外の「まさか」でした。

7月6日の夜、高梁川の水位がどんどん上がっていく。緊迫した本部会議。避難勧告から避難指示へ。そして、40か所近い避難所に7,300の方が避難しました。

翌7日には、雨も止み被害のなかった方は、順次自宅へ帰っていき、多くの避難所が閉じられていきましたが、吉備路アリーナに約1,000人。その中身は、真備町からの避難者に入れ替わっていました。高齢者の施設が丸ごと避難。とても一般の避難所で避難生活ができる方々ではありませんでした。施設の職員の方に話し、入所、入院を促しましたが、動きが鈍い。アムダの方から、職員も被災者ですよと耳打ちされる。そうだった丸ごと面倒見よう。

しかし、猛暑の中、熱中症の発生。急いで冷房のある施設への移動を検討。アリーナの約1,000人をトリアージし、ケアのいる方を一か所にまとめ、それ以外の方は、できるだけ同じ住所の方がまとまるように配慮、全部で11か所に分散、移動をかけました。発災後の4日目から5日目の事です。移動後の7月12日、11か所の避難所に738人、ペット34匹が避難されました。そしてその後、みなし仮設、建設仮設、リフォームした自宅へと皆さんをお送りし、11月4日に総社市内のすべての避難所を閉鎖しました。

いろいろな問題はありましたが、発災当初から、アムダの皆さんが入って一緒に対応して下さったことが、一番の支えでした。アリーナからの移動が、あれだけスムーズにできたのは、まず避難者の皆さんが、協力的だったこと。誰一人として不満を訴える方もなく感謝の言葉までいただきました。これは、アムダの協力があつたおかげで、我々が自信を持って動くことができ、それは、避難者の安心感にもつながったのだと思っています。ケアのいる方を集めた一か所の避難所を始め他の避難所においても感染症や重病患者を出すことなく閉鎖をむかえることができました。

災害支援の経験豊富なアムダや過去に災害を乗り越えてきた方々のアドバイスは、本当に参考になり、皆さんからの言葉が励みになりました。何をしようかと悩む前に目の前の方が、少しでも笑顔になることをする。問題には、即対応。迷わない。迷っていると、あっという間に1日、2日、1週間たち情勢は変わってくることを痛感。そして何よりも我々自身が、疲れていない。疲れているとベターな対応はできないということ学びました。

発災から4か月。当時は時間の感覚がなくなっていました。被災された方は、まだその状態が続いているかもしれません。時間が心を癒し、元気が戻ってくることを心から祈っています。



岡田小学校を中心とした災害鍼灸支援活動に関して

## AMDA災害鍼灸支援に参加して

学校法人平成医療学園宝塚医療大学 保健医療学部鍼灸学科 教授 北小路 博司

この度、西日本豪雨災害被災者支援活動を AMDA 災害鍼灸チームにて参加させていただきました。参加を通じて感じたことを述べさせていただきます。

振り返りますと、明治鍼灸大学（現、明治国際医療大学）に勤務しておりましたときに阪神・淡路大震災（1995年1月）が発生したことから、大学教員・大学院生と鍼灸ボランティアチームを立ち上げ、被災者の苦痛軽減を目的とした鍼治療の提供を行ったことがあります。当初は地元の西宮市の避難所に出向き被災者に鍼治療を提供していましたが、対象地域が広範囲であること、避難所と鍼灸に対する被災者のニーズなど情報不足から、兵庫県鍼灸師会の佐伯正史先生（当時会長）へ連絡し、兵庫県鍼灸師会からの指示・派遣として明治鍼灸大学スタッフは灘区・東灘区・宝塚市および西宮市の避難所を巡回する支援を同年3月末まで（土日祭日のみ）実施しました。当時は、一度訪問した避難所に再訪することはありませんでした。ひたすら異なる避難所を巡回するだけでした（一方通行の支援）。中には気がかりな被災者の方もいましたが、その後の状況は知る術もありません。

この度、西日本豪雨災害被災者支援活動を AMDA 災害鍼灸支援に参加させて頂き、勤労者総合福祉センター・サンワーク総社（総社市）と岡田小学校（倉敷市真備町）での災害鍼灸支援活動を行いました。そこで感じましたのは、「拠点を置いた災害支援」と「地域の支援者・ボランティアとの情報共有」の重要性でした。「拠点を置いた災害支援」では、治療を通じ被災者と支援者の意思疎通を図ることが容易で、被災者が長期間の避難所生活により、身体的苦痛に加え精神的にも疲弊し様々な身体的変化を発現する状況を受け取り、被災者のニーズにあった医療支援を提案することも可能だと感じました。

治療を通じ、被災者の医療情報を自治体の災害支援組織、地域の支援者・ボランティア団体と共有することによって、被災者を包括的に支えることが可能であると思いました。その時に必要な支援が可能であることを強く感じました。

災害時における各種の支援を支える大きな要因として調整員の役割が重要であることが確認できました。災害支援を俯瞰的に捉え、必要なところへ情報・人材・物資などをマネジメントする。大変重要な役割を担われていると認識しました。

近い将来に必ず起こる南海トラフ災害に対し、AMDA は既に準備を進めておられます。災害鍼灸支援の一人として必要な時期に出動できるよう準備をし、少しでも被災者の役に立てるようにしたいと思います。



まび記念病院での支援活動に関して

## 西日本豪雨により機能を停止し 「助けられる側」となった病院の復興に際し目指すもの

医療法人和陽会まび記念病院 院長 村松 友義

私共のまび記念病院は先の西日本豪雨により病院の機能を完全に断たれ、「助けられる側」となった。被災時はDMAT、NGO、自衛隊の皆さんに院内に収容していた患者さん、施設利用者さん、近隣の避難住民の皆さんを救出していただいた。被災後は1日でも早い診療再開が必要であると思うものの、良い方法が浮かばない、また少しずつ病院の復旧が進んできた昨今においても病院内へ電気を十分配電できないため完全復旧までに時間がかかるなど、地域住民の方々に対しても大変なご苦労やご迷惑をかけているのが現状である。これはひとえに、「水害がここまでくとは思わなかった」という経験則が根底にあったうえで、責任者の病院長が災害について何も知らず、BCP（事業継続計画）\*の作成・周知を完全に怠っていたのが原因である。



しかしそんな中で周囲より本当に多くの温かい手を差し伸べていただいた。被災直後には吉備医師会とAMDAが協議を行い、①健診車をまび記念病院に配置し診療を開始する。②吉備医師会がこれを主導し、まび記念病院だけでなく他の被災した診療所の医師も診療できるようにする。③災害医療ではなく保険医療を行う。この3本の柱を軸に真備町での保健診療を再開した。その後しだいに復旧はすすみ、当院では病院内での診療へ移行し、真備町の他の診療機関も次々と診療を再開されている。

被災時や被災後のこうした温かい援助は何ものにも代えがたく、それらがあってはじめてその地域の医療の復興が始まったといっても過言ではない。願わくはさらに多くの援助が縦割りではなく、横の繋がりをつけた状態で被災した地域へ提供できれば、早期の復興が可能となるのではないかと愚考する。

このような大きな災害あるいは将来起こるとされる南海トラフに対し十分な備えが必要であり、災害拠点病院、自治体などはBCPを作成している。しかしながら、大規模災害が発生した際地域の医療の被害を少なくし、復興を1日でも早く進めるためには、その地域の中小病院をはじめ診療所、薬局、介護施設など医療、介護に関わる組織もその機能に合わせBCPを作成しておく必要がある。さらにその作成したBCPがその地域の実情にあっているのかを検証する必要がある。自治体、災害拠点病院との検討や意見交換が望まれる。

現在まび記念病院は職員一丸となって1日でも早く元の病院機能を取り戻し、さらに「災害に強い病院」づくりを目指している。



\* BCP(事業継続計画)＝災害などの緊急事態が発生したときに、企業が損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るための計画

## 菌分館での支援活動に関して

## 小規模多機能型居宅介護からみた真備町水害

小規模多機能ホームぶどうの家真備 代表 津田 由起子

ぶどうの家真備を心配しご支援くださっている全ての皆様に感謝いたします。

真備町の大半の住宅や商業施設が水没した平成30年7月7日、私たちは倉敷市の配慮で小学校横の菌公民館を避難所の一部として、10月28日までのほぼ4か月を過ごしました。雨の中、利用者やご家族を救出し避難してきた時にはこんなに長くなるとは思っていませんでしたが、長い避難所生活の中で多くのことを学ぶことができました。

これら避難生活を送る利用者や近隣の要援護高齢者の状態把握について、被災直後から市当局や団体から毎日多数のアセスメントを受けましたが、毎回ほぼ同じ内容の質問で、なぜ専門職集団で連携できないのか不思議でした。また、それがどのように活かされたのかわからないことも多々ありました。アセスメントは必要な時に必要な情報を得るべきだと、支援される立場になって痛感しました。混乱し疲弊している時に困っていることを尋ねられても、整理し言語化することはできません。そんな中、AMDAは災害支援のプロです。約20分の初回面接で「わかりました。明日からこの人を職員と同じように使ってください」と職員を派遣してくださったのです。それは押し付けではなく私たちの意志を十分確認しながらの支援プランでした。さらにすばらしいのは引き際で、当事者の自立のために少し厳しくらいの状況で手を引く代わりに、別の形の支援をいただきました。

また、今回の経験から、どんな状況や環境でも小規模多機能型居宅介護はできると実感しました。暮らしや生活を支える専門職ですから、自立支援が基本にあり、今回もそれは変わりませんでした。たとえ年をとっても避難者でも、できることは自分たちです。避難所での生活でも次々にできることが増え、自治会も作り自分たちの生活を快適にするための決まりも作りました。また、体調を整えることも介護の基本ですから避難翌日から口腔ケアと簡単な体操を行いました。避難当日は13の方が避難していましたが、大半の方はご自宅や仮設住宅に戻り、災害前と同じように生活されています。

今回「他の避難所でも認知症状などで対応に困る方があれば、お連れしてください。私たちが対応します」と発信したのも地域密着型サービスとして自然なことでした。

突飛な考えですが、災害時、一時避難ができることや生活を奪うことになってしまう自宅に戻れない片道切符の避難ではなく、現地の小規模多機能型居宅介護と行政、支援団体の方が協力して支えることで、また自宅や地域に戻ることができる避難という仕組みもできるのではないかと、この度の経験から思いました。

今、ぶどうの家真備は仮設に移り、次のステップに進んでいます。事業所として一日も早く自立したいと職員一丸となって取り組んでいます。今後ともぶどうの家真備の前進をAMDAはじめ多くの団体や皆様、見守っててください。どうぞ今後ともよろしく願い致します。



## 西日本豪雨災害をふりかえり

医療法人芳越会 理事長／ホウエツ病院 院長 林 秀樹

これまで皆さまのご協力のおかげで AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームを介した医薬品など各分野の準備を進めて来られました。また AMDA 調整員の皆さまは菅波代表の指揮のもと、プラットフォームが有機的に活動出来るよう供給体制を築かれています。ここ 2,3 年国内で多発している自然災害に対してもこの体制が活かされ、非常に頼もしく思っています。

いまだに大規模災害の超急性期には国、県、市町村は連携構築に時間を要し、亜急性期を過ぎてやっと落ち着く状況です。大きな市、これまで平穏であった県ほどその兆候は著しく、被災された皆さまには二次災害の危険もはらんでいます。同プラットフォーム調整会議に関わられている国、県、市町村の皆さまは日頃から危機管理意識をお持ちで、発災時には即応性をもち官民間問わず強固な連携を取って頂き、まさに対照的です。その典型例が今回の西日本豪雨災害、なかでも総社市片岡市長の行動であったと思います。さらに菅波代表は南海トラフ地震に対し協力医療機関の輪を広げて来られた結果、今回の豪雨災害では倉敷中央病院、川崎医科大学をはじめ近隣の医療機関のご協力が得られました。まび記念病院において、瀬戸健康管理研究所健診車により鈴記先生をはじめ AMDA の仲間が素晴らしい地域への医療提供が出来たことは皆さまご承知のとおりです。

自分を振り返ると、ホウエツ病院は徳島県中央部で津波が来ない処であり、南海トラフ地震に対し後方支援体制を構築するべく活動しています。例えば国や県と一緒に DMAT における医療活動などの公的な連携や、全日本病院協会救急防災委員会

を通じての民間病院同士の連携、さらに避難所運営に長けた AMDA との連携を築いて来ました。また当院が事務局を担っている地域連携の会～絆～を介し周辺の介護福祉施設と避難所運営にも取り組んでいます。この連携こそが今回の西日本豪雨災害はじめ色んな支援に繋がる事を改めて感じました。

今後も災害はあらゆる形態で起きると思われ、南海トラフ地震に限らずいつでも被災者側になる可能性もあります。現場の支援に参加して学べる事で相手の立場になり考え行動し、備えもより充実出来ると思います。また普段離れている相手こそ大規模災害時には助け合いが出来る仲間です。皆さまで輪をもっともっと大きく育てて生きましょう。これからも、よろしくお願い致します。



AMDA 総社災害対策本部で活動するホウエツ病院からの派遣者

## 相互扶助社会の進展につながっているプラットフォームの取り組み

清水博文税理士事務所 清水 博文

発生から4か月経ちましたが、西日本豪雨災害で被災された皆様のその後の生活が心配されるところです。私自身も、総社市の出身で実家には両親が住んでいますので、豪雨の日は心配でなりません。一晩明けて被害状況が明らかになってくるにつれ愕然としました。実家の被害はなかったのですが、地元の友人も住む倉敷市の真備町に大きな被害が発生したのです。

弊社のスタッフも西日本豪雨支援に参加させていただき、また私自身も被災地域にお見舞いに行き惨状を実際に目の前にし、出来るだけこのような災害は防がないといけなく強く感じました。とはいえ自然の起こすことです、策を講じていたとしても絶対に起こらないとは限りません。いえ、むしろどこかでまた起こると想定していた方が無難ではないでしょうか。これまで災害の少ないと言われていた岡山県でさえ、このような被害が出てしまいました。日本に、いや世界に絶対に安全と言える地域はないのではないのでしょうか。

であるとすれば、事が起こった時にいかに迅速かつ効果的な行動をとることが出来るか、そのためには何を準備し、どんな

ネットワークを構築しておけば良いか。それを実現するのが正に「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」ではないでしょうか。過去の大規模災害の経験を基にし、実行する組織として結成された同プラットフォームに、参加の声を上げた多くの方がいることが最大の安心です。

私どもは日々、企業や団体のバックオフィス業務として会計のお手伝いをさせていただいております。中でも力を注ぐ企業の ICT 化支援業務には、AI の発展や人材不足に対応するための業務効率化の意味もありますが、その他に大きな役割として災害に強い企業を創る、という側面もあります。災害時に企業・団体の大切なデータを確実に守り、被害を最小限に収めるための ICT 化という側面です。

これは一例として、各企業・団体が必要な対策をとり、お互いのネットワークを強化しておくことで、関係する従業員・取引先やそのご家族、その経済圏に住む人々の被害を最小化することが出来るのではないのでしょうか。このような取り組みは、たとえ災害が起ころうと起こらまいと、相互扶助社会の進展に繋がっていくと信じます。

## 経験を風化させない 被災エリアの医療機関として災害を振り返る

医療法人サンス あさのクリニック 院長 浅野 直

西日本豪雨で大きな被害を受けたエリアのひとつ、倉敷市真備町及び総社市にある都市医師会員として、このエリアで在宅医療を行っている医療機関として、ここで生まれ育った一人の市民として、この度の災害を振り返ります。

いつもより長く続いた梅雨に少し不安を覚えながらもいつもどおりを願う気持ちで迎えた7月6日の夕方から総社市には避難勧告、避難準備、避難指示と次々発令されました。在宅療養している要介護の患者さんを多く担当しているため、21時すぎにクリニックへ移動して、事務長と手分けして当院スタッフ、在宅医療を担当している患者さんを中心に避難状況の確認、必要に応じて避難を促しました。

23時35分頃、大きな音とともにクリニックにも衝撃がありました。アルミ工場の爆発です。

23時50分頃、総社市内の老老介護で自宅2階への垂直避難ができない要介護5の患者さん（重度認知症、全介助、ASV利用あり）宅へ迎えに行き、クリニックへ移動していただきました。

7月7日の早朝、真備エリアの要介護5の患者さん（重度認知症、全介助）が通常の避難所で避難生活することが現実的ではないため、担当介護事業所より当院へ受け入れ要請があり、お引き受けしました。

院内スタッフで、出勤可能な看護師へ声をかけ、交代シフトを組み7月7日の朝～8日の昼までの臨時体制を組み、対応しました。8日の午後には2人とも総社市内の介護事業所へ引き継ぐことができました。

7月8日はきびじアリーナの避難所で行われた医療支援に参加させていただきました。担当している患者さんたちが多く被災され、避難してきていることを改めて確認しました。

その後、平日の日中は通常の医療に加え、被災地からの医療ニーズに答えることに専念し、夜間と休祭日は災害対応を行う日々となりました。

7月21日は、まび記念病院で行われた健診車両による仮設診療に当院スタッフ（看護師3名、事務4名、相談員1名）

と一緒に参加させていただきました。不慣れで迷惑をおかけいたしました。当院スタッフと一緒に仮設診療所の支援という経験ができたことは、今後において大きな意味があったと思います。

被災エリアに隣接する医療機関としてこの度の豪雨災害を経験し、強く感じていることは、全体像を把握して情報発信や方針を決めることの重要性とその困難さでした。発災直後から行政がやってくれることではないし、いち民間医療機関ができることもごく限られています。しかし、被災した医療機関を含む地元の保険診療の復興をいち早く推し進めた今回の対応は、AMDAのご支援があったからこそと思います。また、AMDAのような大規模災害の対応に熟練した団体との具体的な連携が大きな実行力となることを改めて痛感しました。

できれば起きてほしくない次の大規模災害にしっかりとした備えを行うこと、それは今回の経験を風化させず、引き続き我が事として防災能力を高めることと思います。誰かがやってくれるのではなく、個々が、そして当院が、そこからつながる地域が。



## 経験や教訓を継承して

生活協同組合おかやまコープ 理事長 平田 昌三

今年ほど天気予報を見た年はありませんでした。全国 29 の生協から人的応援をいただき、今回の西日本豪雨災害に対して 8 億円を超える組合員募金も寄せられたそうです。その約半分くらいが岡山県に送られるようで、あらためて全国の生協組合員や市民の思いを受け止めさせていただきました。

安全神話の岡山もついに大規模被災地となったことに、全国よりも県民の方が驚かされたことでしょうか。全自治体と災害時の物資支援協定を結んでいるおかやまコープも、要請のあった 7 市町村に 14 回、5 万点の物資をお届けすることができました。これも初めての発動で、机上での仕組みがあっても、有事の際にその通り動くことは稀です。決断を早くする組織が最も役立ち、いずれあてにされる存在となることが今回の災害支援で証明されました。

AMDA は国際支援活動に拘わらず、日本各地の災害時にも迅速な対応が都度されています。今回もおかやまコープ「AMDA 基金」からの拠出や物資提供に留まらず、医師や看護師の移動手段や運転手の要請を受け当たり前のように派遣することができ、少しはお役に立てたかもしれません。長年のお付き合いの中でのお互いの信頼関係がネットワークの中で生き続けること

を願っています。「孤独になっても孤立はさせない」という精神の基に、共生社会への関与を進めている私たちの現在地も感じることができました。残念ながら、同様の災害は全国各地で続くと思われます。今回のそれぞれの経験や教訓を継承していくことは私たちの責務でしょう。初動段階の支援活動から、復旧し自立していくまでお役に立ちたい気持ちを持って、今後とも意思あり経験ありの AMDA と協力を重ねていきたいと考えています。



## PDP (ピクルスデリバリープロジェクト)

人道援助宗教 NGO ネットワーク (RNN) 事務局長 黒住 宗道 (黒住教教主)



災害直後から AMDA のスタッフとして岡田小学校に入っていた RNN メンバー (真言宗僧侶) から、高齢者への野菜提供の相談があり、RNN として自家製ピクルス (新鮮野菜の酢漬) の配給を決定。小切りにした野菜を数分間熱湯に通した後に予め調味した酢に 30 分ほど漬けて冷やして完成するピクルスは、安全性とともに適度な塩分もあり、栄養豊富でさっぱりと美味しく食せる、夏場には最適の炊き出しメニューであると考えたのが理由。黒住教が担当責任教団になって人的協力と野菜提供を広く呼び掛け、宗忠神社 (岡山市) を野菜の集積と調理の会場とし、RNN 委員長 (天台宗僧侶) が運搬のための保冷車を手配して、まず岡田小学校と藺小学校と二万小学校への配給を開始。8 月は月・水・土の週 3 回、9 月は水・土の週 2

回実施したが、8 月後半からは新聞報道を見て依頼のあった総社市下原地区と「まきび荘」(真備町) へも配給先が広がった。

現地入りの出来ない人々 (女性や初老の方々) の協力 (調理ボランティアと野菜提供) を多数得られたことと、配給弁当ともボランティアによる炊き出しメニューともバッティングしない“ニッチ”な栄養提供が展開できたこと、とりわけ自力で新鮮野菜を摂れない高齢の被災者に非常に喜んでもらったことが具体的な成果と考えられる。個人的には、ピクルスを直接手渡しながら会話を重ねることで、顔見知りになった数人の被災者から苦しい胸の内を聞くことができ、少しは支えになれたように思う。活動詳細は以下の通り。

期間	平成 30 年 8 月 4 日～9 月 29 日 (全 21 回) ※ 8 月は月・水・土曜日、9 月は水・土曜日
配達先	岡田小学校、藺小学校、二万小学校、総社市下原地区まきび荘
ピクルス総数	15,490 個
奉仕者数	調理奉仕者：延べ 315 人、運搬奉仕者：延べ 94 人
使用野菜	胡瓜・大根・キャベツ・人参・瓜・蓮根・玉葱・パプリカ・ズッキーニ・とうもろこし・プチトマト・茗荷 合計 1,352kg

調理奉仕者と野菜提供者は、(一社)岡山経済同友会と大学コンソーシアム岡山の事務局からの通知、及びテレビ・ラジオ・新聞・インターネット配信に応じた協力者と、黒住教を中心とした RNN 関係者。

## 西日本豪雨災害をふりかえり

日本青年会議所医療部会 部会長 千葉 貴治、運営専務 宮本 晋吾

日本青年会議所医療部会は、日本各地の青年会議所の正会員及び特別会員で、病院、医院、薬局、製薬会社等の医療およびこれに関連する事業に従事するメンバーによって構成される団体です。単年度制の組織で、毎年、部会長をはじめ組織並びに活動を刷新しながら、現在は現役会員、特別会員合わせて約400名の会員が所属しています。活動は、青年会議所の綱領を基盤として、日本の医療の正しい発展を担うべく、1964年の創立よりこれまで医療制度の研究や、ネパールやカンボジアなど国内外での医療支援活動を行ってまいりました。近年は、10年近くカンボジアにおいて、現地の児童を対象に、公衆衛生指導や医科歯科検診などの医療支援活動を行っています。2011年発災の東日本大震災においては、宮城県気仙沼市大谷地区の皆様と現在でも被災地支援交流事業として交流を続けています。

この度は、西日本豪雨災害に際し、認定特定非営利活動法人AMDA様の活動に参加させていただきました。青年会議所としては、中国地方の青年会議所が中心となり、発災直後より被災地へ支援物資を届けたり避難所の運営面での補助などの支援活動を行っていました。我々、医療部会としては、中国地方のメンバーを中心に支援活動の希望が出たため、医療部会としてどのような支援ができるかを検討した結果、以前にやりとりを

させていただいたことがある経験からAMDA様の支援活動に参加させていただくことに決まり、連絡を取らせていただきました。

7月25日(水)に看護師並びに医療従事者の2名のメンバーで活動に参加させていただきました。当日は、避難所となっている倉敷市立岡田小学校にて、被災者の皆様に対し足浴をはじめ、鍼灸の問診受付など、避難所での支援活動をお手伝いさせていただきました。また、現地にて被害の大きさと範囲の広さ、そして酷暑の中での過酷な支援活動の現状を目の当たりにし、継続的な支援の必要性を感じました。

この度の支援活動に際し、大変お忙しい中にもかかわらず参加させていただき心より御礼申し上げます。

この度の貴重な経験をこれからの我々の活動に活かしていけるよう精進してまいります。

この度は誠にありがとうございました。



## 西日本豪雨災害でのAMDA緊急支援活動への職員派遣について

医療法人社団かとう内科並木通り診療所 院長 加藤 恒夫

この夏、西日本豪雨災害により、災害が少ないと言われていた岡山も甚大な被害を受けました。当院では家族や友人が被災している職員もおりました。決して他人事ではなく、身近でおこった災害に対して、必ず支援を行わなければいけないと考えました。そこで、緊急支援活動を行なうAMDAに対して、募金活動と職員派遣を行なうことを決定いたしました。

当院ではまず被災地支援を希望する職員を募り、AMDAへ「私たち職員が活動へ参加できることはないか」と連絡をいたしました。そしてAMDAより、「避難所での活動に看護師を派遣してほしい」とお話をいただき、その翌日には職員を派遣し、避難されている被災者の健康管理などに従事させていただきました。

災害が発生したとき、当院のような診療所が独自に緊急支援を行なうことは困難です。そこで当院では災害支援を専門とし、活動実績が豊富で信頼のおけるAMDAの緊急支援活動に、職員を派遣することを第一に考えております。東日本大震災や熊本地震の際にも、AMDAの緊急支援活動に対して職員を派遣しました。職員を派遣したことで、当院での緊急支援が必要な際の迅速な体制が構築できるようになりました。また、職員全体が、お互いが困った際の相互支援の大切さなどを学ぶことにもなりました。そして、これらの経験はこのたびの西日本豪雨災害での支援にも生かされたように考えます。

災害はいつ、どこで起こるか分からない状況です。地域医療を行なう当院も自分たちが医療を提供する地域社会で災害がおこったときに、どのように対処するのか準備しておく必要があります。AMDAの緊急支援活動への職員の派遣は、まずは現地の被災者支援へ主体的に取り組むことが第一です。そしてもうひとつは、この取り組みから自分たちの生活する地域社会が被災した場合の、緊急支援の備えを学んでいかねばならないとも考えております。

最後に、AMDAのみなさまには、上記のような考えで派遣している当院職員をあたたかく受け入れてくださり、ともに活動させていただけたことに、心より感謝申し上げます。



## ILOHA 活動報告書

岡山大学工学部3年 国際医療勉強会 ILOHA 第8期部長 秋山 美咲

私たち国際医療勉強会「ILOHA」は、岡山大学などの学生を中心に活動している医療系サークルです。大学では教えてくれない「海外」や「日本」の医療、社会問題を学んでいます。

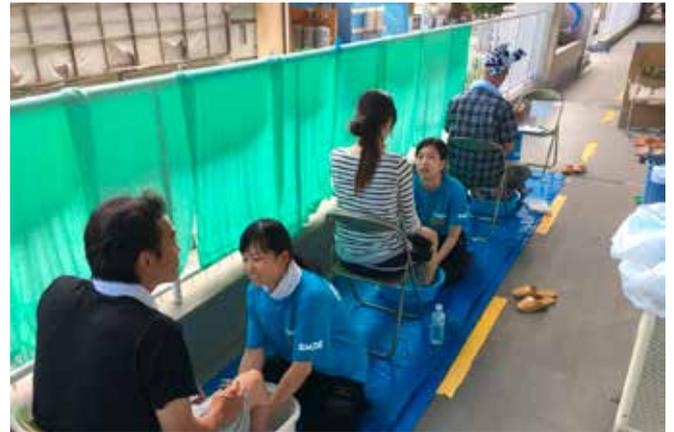
災害が少ないと言われてきた岡山で起こった今回の西日本豪雨。岡山で生活している私たちがいち早く行動するべきだと感じました。そんな中、AMDAさんから声をかけていただき、西日本豪雨災害のボランティアスタッフとしてILOHAの部員が何名か参加させていただきました。

テレビでみたり、聞いたりして被害の状況は知ることができました。しかし、実際に避難施設を訪れることで空気の重み、被災された方の思いを肌で感じ、想像よりはるかに酷い現状であることに気づかされました。その現状に驚きながらも、私たちにできることを精一杯取り組みました。

ボランティア参加者の受け入れ作業のマニュアル化の手伝いや災害当初からのAMDAさんのスタッフ同士のLINEのやり取りを書き起こす作業。また、被災された方に足浴をおこなったり、バイタルサインを測ったりと実際に現地の方と関わることも行いました。被災された方の訴えを職員の人に代わりに伝える部員もいます。被災された方の環境、体のケアはもちろんで

すが、思いを聞いて心のケアを行うことやその思いを多くの人に伝えることも私たちの役割だと実感しました。

大変微力ではあったと思いますが、ボランティアとして参加したことは大変勉強になりました。今回の活動で感じたこと学んだことを忘れず、災害への対策やボランティア活動をこれからも行っていきたいと思います。



## 給水車による被災地支援

十字屋グループ 代表 牧 一穂

私ども十字屋グループはこのたびの西日本豪雨災害において、環境省の要請を受け、倉敷市真備地区、高梁市において災害ゴミの撤去を進めてまいりました。またAMDA様とは災害時における連携協定を締結しており、菅波理事長の依頼で、弊社社長が当時「万一の時に地域の役に立ちたい」と備蓄米や災害用補助食品などを整備した際購入した給水車にて被災後の7月19日から3日間、現地に給水をさせていただきました。

「災害がない」と言われてきた岡山で、甚大な豪雨被害が起き、犠牲者の遺族や被災者らは悲しく、辛い思いをされているとお察し申し上げます。現在の日本は様々な観点から“安全神話”が崩れてきており、想定外とは言えない現状があります。天災が頻発する日本でなぜ対応が遅れるのか、みんなで未来を見つめ、万一の際、人々が助け合える社会を構築する必要があると考えます。

弊社は1916（大正5）年に創業し102年になります。長いスパンでみれば、苦しい時期もありました。しかし創業時より企業の目的は「社会」「福祉」「文化・教育」「地域」に対する貢献であると考え、それを活動原点とし、「問題の解決者」として「利益のために仕事はしない」との方針を貫いてきました。結果として生き残れたのは、皆様のお陰であると考えています。現在は真庭市と一緒に持続可能な開発をテーマに「地域資源が循環するまちづくり」を目指しています。

岡山の歴史を見ますと、当時多くの方がその理念に立って、この岡山の基盤を作られてきたことがわかります。その中で大

切な事はコミュニティの回復であると考えています。お年寄りから子供たちまでが集まり、志を抱く者たちが当時のように何かをすることができれば何かが変わると信じています。権利を主張せず、義務を果たしていく。まさしく「受けるより、与えさせていただく者へ」そんな思いで活動させていただいております。

AMDAは「救える命があればどこへでも」と相互扶助の精神で取り組まれています。今の社会には欠かせない貴重な存在です。今後は“精神的な被災者”とも言える心の飢餓を抱える子どもたちの支援に向け、AMDAと共に頑張っていければと考えております。



## 鍼灸治療が災害支援の一端を担う

公益社団法人岡山県鍼灸師会 副会長 國安 俊成

平成30年7月豪雨災害では西日本、特に広島、愛媛、岡山の3県に甚大な被害をもたらしました。岡山県では過去に例をみない大きな災害となり、岡山県内の鍼灸師の先生方もいろいろな形で災害支援に加わりました。(公社)岡山県鍼灸師会は昨年 AMDA 様と、南海トラフ地震発生時についての協力協定を結ばせていただいていたので、この度の災害支援にも多くの会員の先生方が参加されました。

私は活動の初日に倉敷市真備町の岡田(幼稚園)小学校に設営された鍼灸ブースにボランティアとして参加しました。初日の現場は環境的に施術者にとっても、利用者にとっても厳しいものでした。まだ施術ベッドも届かず、当然冷房も動いていない状態でした。水分補給を十分するよう注意がありましたが、室内温度も36℃を超える中での活動でした。活動の全体像が掴まっていくなかに思ったのは、そこが被災地の中でも最も需要の高い場所だということ、つまり困っている人が一番多い所だろうということ。設営等も含めて支援活動が迅速で正確であること。また撤退時期も早いうちに設定され、活動がスムーズに終わったことなどでした。なぜこんなに情報が正確で、活動が迅速なのだろうと感じました。

私は昨年、一昨年と災害鍼灸チーム育成プログラム、南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議に参加させていただきました。そこで過去に東日本大震災、熊本地震などで活躍された方々のお話を聴きました。特に鍼灸チーム育成プログラムでは我々鍼灸師が被災地で何ができるか、また、場合によっては何をすることはできないかなども詳しく教わりました。しかし事前に知識があったにも関わらず、実際に活動に参加してみると、思った以上に現場は混乱していました。支援現場での活動の困難さ、被災者の皆さんに接する難しさを痛感しました。

私たちの業界も遅ればせながら上部団体の(公社)日本鍼灸師会に危機管理委員会ができ、その指導で各県師会に災害対策本部を設置し、災害対策マニュアルを作成しました。会をあげての災害支援活動はまだ始まったばかりです。また会では災害支援認定鍼灸師講座を各地で開き、災害支援に参加できる鍼灸師の育成に努めています。この講習は平成30年2月に岡山で開催され、岡山県を中心に中四国から約50名の方が集まり、AMDAからは難波妙理事に講義をいただきました。そして熊本でのご自身の活動を通じて、災害現場の臨場感のあるお話を頂きました。現在我々岡山県鍼灸師会は業団の中では最多の25名の災害支援鍼灸師を有し、徐々に活動できる体制を整えつつあります。我々の活動は災害現場で十分役に立つ活動だと思えます。

我々鍼灸師会は災害支援を通じて社会に、特に地域医療に貢献できる団体造りを目指しています。この先もご指導、ご鞭撻いただけますよう、宜しくお願いします。



## 岡山倉敷フィリピーノサークルから AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動に参加

岡山倉敷フィリピーノサークル 代表 西 アニー

7月7日、豪雨による洪水で西日本を中心に多くの人たちが被災しました。岡山倉敷フィリピーノサークル(OKPC)が拠点を置くここ岡山も例外ではなく、倉敷市真備町に住む私の友人や同僚も洪水により家を失った人もいて、心を痛めました。

有事の際、岡山倉敷フィリピーノサークルは、困難に遭遇した人たちに寄り添い、必要であれば支援の手を差し伸べています。7月14日と8月8日、OKPCメンバーと一緒に総社市下原地区で被災家屋の片付けボランティアとして活動しました。加えてOKPCメンバー3名はAMDAの医療支援活動にも参加し、団体としても素晴らしい経験となりました。

フィリピンで災害が起こった時、AMDAはいつも被災者に寄り添い、被災地で支援活動を展開しています。そのお礼として、日本で災害が起こった際には、被災者支援をしたいと思っていました。今回のボランティア活動で、今までの支援に対する日本へのお返しができることができました。信頼性の高いAMDAと協力

して活動できることはOKPCにとって光栄であり、AMDAがミッションとして掲げる世界平和へ寄与できたかと思えます。

OKPCメンバーにAMDAの活動に参加する機会をいただけたこと、感謝しています。ありがとうございました。



モンゴル医師の通訳を務めるOKPCメンバー(写真中央)

## 被災地への健診車の派遣を通じて感じたこと

一般社団法人瀬戸健康管理研究所 SHL 丸亀健診クリニック 院長 麻田ヒデミ

この度、AMDA 菅波代表からのご依頼により、西日本豪雨災害の被災地に総合健診車の派遣をさせて頂きました。

派遣して思ったことは、このようなスタイルの車は、被災地での医療支援に非常に有意義であるということです。特に避難所で心身共に疲れ果てておられる被災者の方にとっては、プライバシーが確保された上で医師や看護師に相談出来る空間というものは、非常に安心できるものであったようです。

被災者の方の心と体に寄り添うという面でも、とても大きな役割を果たしたのではないかと思います。

一方、さまざまな課題も見えてまいりました。一つには、現地でオペレーションを行うスタッフの、設備に対する慣れの問題です。総合健診車としてつくられた車ですので、血液検査はもちろん、心電図、エコー、胸部 X-P、胃透視までかなりの機能を有していますが、今回のような短期間での使用に際しては、機能面では半分程度しか発揮出来ていなかったように思い、少し残念に思います。

また今回のようなケースは、災害医療としての請求が可能とのことですが、今後は保険診療の取り扱いも考えられるようになるようです。大型災害により医療の拠点を完全に失ったような場所で、AMDA が目指す3ヵ月を目途とした中長期的な医療活動を行う場合、保険診療を行う医療機関として活動出来るならば、役割はもっと広がると思います。

現在は、健診データをIDとともに完全デジタル管理してい

ますが、長期にわたり被災地で医療支援をする場合は、受診者の方のカルテや医療情報を、どのように管理していくかは今後の課題であると思います。

今回提供した車は健診を行う車ですから、今後は初めから被災地支援を目的とした医療車を設計することで、より機能的な車が可能になるのではと思います。日本は現在、毎年のように大型災害に見舞われており、今後ますます AMDA の活動が求められてくるでしょう。

私どもも、被災者・被災地に対し、その時可能な限りの最善の医療支援を、AMDA を通じて行っていきたいと考えています。



## 西日本豪雨支援プロジェクトチーム・がんばるんジャー

学校法人ノートルダム清心女子大学 人間生活学科4年 遠藤 睦子、小倉 綾奈

西日本豪雨の被害状況を目の当たりにしたとき、はじめは正直、戸惑うことしかできませんでした。しかし、「自分たちにも何かできることがあるのではないか」と考えるようになり、私たちは、学内で立ち上げられた西日本豪雨支援プロジェクトチーム（がんばるんジャー）に参加しました。心の中で復興を願うだけでなく、想いを行動として表したいと強く思いながら活動を始めました。

プロジェクトでは主に、学内での募金活動と物資の収集（タオル）、岡山市・倉敷市災害ボランティアセンター本部での電話対応やデータ入力を行いました。その他、個々のメンバーでさまざまな活動に参加し現在も継続しています。アムダさんのデータ入力もさせて頂きました。

募金活動では、学生、教職員、幼稚園や小学校の皆さま、その他、多くの皆さまにたくさんのご協力をいただきました。1か月も経たないうちに100万円を超える支援金が集まり、被災された方々にお届けすることができました。今まで貯めてきた1円玉貯金をそのまま持ってきてくれた学生もいました。人の温かさを感じながらの活動でした。

プロジェクトを通して、自分ひとりの力は小さいけれど、それが集まることによって大きな力になることや、活動を継続することの大切さなどについて考えさせられました。また、活動の源には清心での人間的な学びが大きく影響していると思います。少しでも成長できているなら嬉しいし、私たちも何らかの形で学びを受け継いでいきたいと強く思いました。



## H30年7月豪雨災害の活動から南海トラフ対応に向けて

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 学校長 柚木 脩

岡山県は「晴れの国・岡山」など、事ある毎に気候が温暖で穏やかな県である事を公言してきた。岡山大学を卒業後、人生の大部分をこの地で過ごした自分自身にとっても「自然災害」は他人事であった。

2011年、その気持ちを一変させた事実がある。東北地震が発生した時、自分自身は東京有明医療大学（鍼灸・柔整・看護系）に在籍していた。直後、学生と教職員の一部から各自、「居ても立ってもおれないから、ボランティア活動に行かせて欲しい」という要望が聞こえてきたのである。

更に、2012年県国体チームの本部役員として岐阜国体に参加し、必勝祈願で有名な信長ゆかりの熱田神社に参拝した。「岡山国体チームが勝ちます様に」と必勝祈願。

この時、我々と並んで眼差しの生き生きとした現地女子高校生2人が真剣に参拝していた。「東海地震が来ません様に」と安全祈願。

我々はお互いに顔を見合わせ、「私達大人は何と人間として小さいね」と反省した記憶がある。同時に、地域の対南海トラフ地震への意識の高さを垣間見る事が出来た。

その後、参拝時には何時も「災害もなく世界中に平和が来ます様に」と祈願する事にしている。すがすがしい気持ちになれるから不思議である。

東北大震災において、鍼灸・柔整に至っては「現地で初期に活動の場がなく苦勞した事」、そして初期のボランティアが引き上げた後で「心身に異常をきたした被災者の皆様の役に立ち評価された事」など直接耳にする事が出来た。特に、避難所と仮

設住宅に在住の人々への医学的対応は、適切な技術と相手思いやる気配りが求められる。

AMDAでは「人道援助の三原則」（ボランティア三原則にも置き換えられる）が唱えられている。【1】誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある【2】この気持ちの前には、国境、民族、宗教、文化等の壁はない【3】援助を受ける側にもプライドがある

2017年、学校長として上記の経験やコンセプトに基づき、AMDAと朝日医療大学校との提携を躊躇なく決定した次第である。【1】自然災害に対する対応への一歩として、「自然災害」という事を、女子高校生に意識付けしていただいた【2】医療系にはボランティア活動に積極的な人々が沢山いる事も判っている【3】その活動内容の実態についても報告を受けている

今回の豪雨災害での活動を、朝日医療大学校は「南海トラフ地震対応」へと発展させる為の社会の一員となる事をお約束します。



## 西日本豪雨における岡山医学検査センターの活動報告

株式会社岡山医学検査センター 第一営業部営業二課 副主任 苅山 勝

今回の西日本豪雨は倉敷市真備地区をはじめ岡山県各地域に前例のない大雨で甚大な被害をもたらしました。災害に見舞われた各医療機関様が診療再開に至るまでどんな方法で弊社がサポートできるのか、どの様な支援ができるのかを考えることから始めました。

弊社は創業以来、臨床検査をコアに地域に密着した検査センターを目指し、精度の高い検査結果を報告することだけに止まらず地域医療にいかに関与できるかを考え、安定したシステム体制、様々なトラブルにも対応できるネットワークを設け多面的なサポート体制を確立したつもりでした。

しかし、この様な災害は初めての経験でありどんなサポートをして良いのかもわからず、取引先である医療機関様と電話やインターネット等の連絡手段も絶たれた中で被害状況も確認できなかったため、まずは連絡を取れる体制の再構築に向け一軒一軒直接伺い情報収集を行うことで、何を必要とされているのかどんなことに困っているのかなど様々なニーズを把握し被災された医療機関様に寄り添った活動が少しでもできるよう努めました。

いち早く診療再開される体制を整えられたまび記念病院様を例に挙げると、先生やスタッフの方々、また支援されている医師会やAMDAの方々等とコミュニケーションを密に取り、検査センターとして臨床検査の受託から検査結果を提供するまでの体制を整えるだけでなく、採血針・採血管等の医療材料の提供から迅速検査キット等の機器試薬に至るまで取扱商品を速やかに提供できる体制も整えました。

この西日本豪雨を経験したことで見えてきた課題として、社員が別々に動くだけではなく対策チームを速やかに立ち上げるなどしてチームで対応していくこと、また集めた情報を一括管理し速やかに対応していくための指揮系統の確立をすること、会社自体が受ける被害を最小限に抑えるための災害対策を講じないといけないことなどいくつも見えてきました。このような課題があることを気づかせてくれたAMDAの方々に感謝すると共に見えてきた課題を一つ一つクリアしていくことで、今後起こりうる南海トラフ災害などの大規模な災害に直面しても柔軟に対応し乗り越えていけるような盤石な体制を整えた企業へ成長していくことが弊社の責務だと痛感しました。

## H30年7月豪雨災害の活動から南海トラフ対応に向けて

医療法人ときわ会藤井クリニック 理事長 藤井 基弘、副院長 菊本 健一

### 今回西日本豪雨災害支援に参加した経緯

7月7日土曜日の朝10時頃当院に患者家族から連絡が入りました。「先生！どうしよう！水が家に入ってきた！どうしよう！近所の人が出て来て二階には上がったけど…」そのお宅の患者さんは意識はあって認知症もないけど頸髄損傷で四肢麻痺で気管切開管理も必要な寝たきりの方で奥様とふたり暮らしです。すぐに消防と警察に連絡するようにいいました。「警察も消防も何回電話してもつながらない！先生！どうしよう！二階にも水があがってくる！もう逃げる場所がない！」自衛隊に緊急救難要請をしました。他にも救難要請の電話が鳴り響きました。

同日昼、AMDAに所属している吉備医師会会員の高杉医師から緊急コールあり。私と当院副院長、職員らとともに吉備路アリーナ体育館避難所の医務室に向かい、救護支援を開始しました。その時すでに1,000人を超える方々が避難されていました。とにかく連絡がとれた藤井クリニックスタッフにも集合してもらい救護班として活動を開始しました。

### 今後起こり得る南海トラフ災害に向けた提言や検証

#### ■災害カルテ

被災後ただちに、災害カルテを稼働して当座の必要な内服薬やインスリン注射液を処方することができました。これはAMDAからの多大なる支援があつてこそ、これだけ素早い対応ができたと感じています。地域の薬剤師連携も本当に素晴らしかったと思います。多くの被災者が体調維持するために必要な医療を受けることができました。

#### ■医療情報の管理

7月7日の被災者は自分の医療情報を持ち合わせておらず個人での医療情報管理の限界を感じました。「救護対応の内容をその後の病院受診や避難所移動があると把握が難しい状況だったと思われる。」患者一人一人の医療が時系列管理できるICT情報管理の整備が必要だと思います。

#### ■平時からのICT情報管理

患者だけでなく被災者全員の情報を管理統合するためには、日頃から平常時に登録できるシステムが全国規模で稼働している必要があると考えます。発災直後に必要だと言ってもそれからのシステム構築は難しいと思います。

#### ■災害時の膨大な情報管理

支援部隊の情報管理、避難所の情報管理、各病院への救急患者情報の管理、患者の医療情報管理システムが、すべてバラバラに稼働しています。常にオンタイムで情報を統合してICTで確認できると医療処置の対応にしても、災害支援にしても早くできるようになると考えます。まだまだ整備が必要だと思います。

#### ■災害は起きる

今回のような災害は前もって発災予想がある程度可能であるが、地震は難しいかと思えます。連絡方法の確立、医療情報の集約と管理、災害状況や支援物資の管理、支援者の管理支援、様々な情報を統合して管理するシステムが常備されれば大規模災害であっても、より早く効率的な対応ができると思われれます。

本当に情報が混乱し、周囲の情報は入らず、本当に辛い状況でした…

今でも信じられない状況が、その時にありました…



## ボランティアに参加して

学校法人加計学園玉野総合医療専門学校 保健看護学科長 三浦 都子

7月末、AMDAボランティアセンター事務局長 竹谷和子様から、真備町へのボランティア募集がありました。

折しも、本校保健看護学科の学生から「私たちに何かできることはないですか？」との声が届いていたこともあり、学校としても準備を整え募集したところ60名を超す応募がありました。事務室と協力して、ボランティアに臨むにあたっての心得、ボランティア後の心のケア、保険等の手続きも含めたオリエンテーションを実施。医療職を目指す学生ということもあり、被災された方々の思いに心を寄せ活動していました。

学生たちは、「被災された方々は、年齢問わず避難生活に苦

痛や不満が溜まっていた。」「今後のことを少し考えることができるようになった人は希望を感じているように思えた。」「歌や体操、マッサージなどを通し話す機会を持つことで、笑顔になった人、スッキリした表情になった人、明るくなった人がおられた。このような場の提供は大事。」「長いスパンで、学生でもできることを継続していきたい。」と、健康支援の重要性を再確認する機会となりました。

## 西日本豪雨災害を経験して～ AMDA と吉備医師会を通じて～

医療法人高杉会高杉こどもクリニック（吉備医師会災害担当理事） 高杉 尚志

私は、AMDA 所属の医師、吉備医師会医師（災害担当理事）として活動に参加しました。

総社市全域に避難指示が出された翌日、7月7日午前中になんとかクリニックの診療を終えて、AMDA からの要請で総社市の吉備路アリーナ避難所へ向かいました。避難所には大勢の方が避難していましたので、すぐに吉備医師会の藤井基弘先生、菊本健一先生、浅野直先生に応援要請しました。

アルミ工場爆発による家屋損傷と浸水被害を受けている方、真備町から救助された方が入り乱れる状況で、時間が経つと医療が必要になる方、認知症があり環境の変化に敏感な方など、災害弱者の方であふれていました。総社市災害対策本部と連携をとりつつ、看護師、薬剤師、市職員と協力して、救護所を立ち上げました。

一方、吉備医師会では、①総社市内の医療機関の通常診療維持、②真備地区医療機関の被害状況確認、③岡山県医師会への協力要請（JMAT 派遣など）を確認していました。親しい友人の「自分が診ていた患者さんが被災して避難所にいるのだから、少しでも診てあげたい」という率直な気持ちを聞き、「真備町に早く地元医師による保険診療を復活させたい。」という想いで動き出しました。保険診療再開で、診療報酬も得られ、患者を診る医療者も元気になるとも思いました。これを強力にサポートしてくれたのが AMDA でした。

被災から10日後の7月18日、AMDA のサポートで丸亀市の瀬戸健康管理研究所から血液検査、XP、心電図、エコーを装備した健診車を提供いただき、まび記念病院玄関前で、吉備

医師会医師が中心となった保険診療を再開しました。さらに岡山県医師会、岡山大学、川崎医科大学、倉敷中央病院等のサポートを受け、真備地域医療復興プロジェクトを立ち上げ、7月30日からはプレハブの仮設診療へ移行しました。

現在、NGO ピースウィンズ・ジャパンの復興支援事業がスタートし、経産省の中小企業復興支援補助金事業などを利用する形で、被災した10医療機関のうち、6医療機関が復興の歩みを進めている状況です。

今回の災害を経験して、現実的な災害対策の重要性を痛烈に実感し、「医療者同士、医療機関、行政、NGO などとの事前の連携と協力」が何より大切だと思いました。近年の地球温暖化による豪雨や台風による災害のリスクも上がっていますし、次は南海トラフ地震かもしれません。早急に連携体制の構築など、具体的に実行可能な事を整えていきたいと考えています。



## 困っている方のために 社会福祉法人としての使命

社会福祉法人旭川荘 理事長 末光 茂

旭川荘は、障害者や高齢者に対して、法制度に基づく医療福祉サービスを提供することを主な目的とする法人であり、AMDA のように災害時の被災者支援を目的とする法人ではありません。

しかしながら、制度に基づくサービスにとどまらず、災害等で困っている方がおられれば、私たちの持つ人的・物的な資源を活用して、できる限り手を差し伸べたいと考えています。これは、社会福祉法人としての使命であると言えるのではないのでしょうか。

大きなきっかけは、東日本大震災でした。全国社会福祉協議会からの要請を受けて、福島県の心のケアセンターに3年間、社会福祉士等を交代で派遣しました。また、南相馬市の市立病院にも1年間、看護師を派遣しました。熊本地震の際にも看護師を派遣しました。

今回の西日本豪雨においても、7月から8月にかけて、AMDA や岡山県看護協会への看護師の派遣、DWAT（災害派遣福祉チーム）への社会福祉士等の派遣、倉敷市による全戸訪問

（安否確認）事業への介護支援専門員等の派遣を行いました。

今後、遠からず「南海トラフ巨大地震」の発生も想定されています。地震発生時には、AMDA と連携し、大きな被害が予想される四国に職員を派遣するなど、最大限の協力をしていきたいと考えています。



すべては被災者のために

AMDA 兵庫 理事長 江口 貴博

この度の平成30年7月西日本豪雨災害で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

私たち AMDA 兵庫は、阪神淡路大震災をきっかけに立ち上がり、AMDA の掲げる相互扶助の精神に共感し、「震災の時に頂いた支援のお礼をしよう」という掛け声の元、東日本大震災や熊本地震など、多くの災害の現場で AMDA 本部と行動を共にして参りました。そして、世界中の災害現場での経験を持つ AMDA のスタッフから多くのことを学ぶことができました。今回の豪雨災害における岡山県総社市と倉敷市真備町への物資支援や人的支援などでも、その経験が生かされたように思います。支援物資の輸送について、宅配業者による輸送では東日本大震災での遅配や九州北部災害での未達の経験から、自ら運ぶのが確実だという思いがありました。また、必要な支援物資は日々変わることや、現場の人間に直接聞くのが一番であるという思いから、AMDA 本部の調整員と連絡を取り合い、前日の夜や当日の高速インター付近で必要物資を調達しながら現地に入りました。まさに AMDA の行動原則、ローカルイニシアチブと言えます。

また、今後起こるとされている南海トラフの津波災害において、AMDA 兵庫は徳島県阿南市を担当することになっていますが、調整員が不足するとの観測から、今回の災害支援においては、看護師、薬剤師、検査技師、保健師の派遣者が調整員としての経験を積むことができました。南海トラフ地震の発災時には、できるだけ自分たちのスタッフで現場に入り、AMDA 本部調整員の負担軽減に努めたいと考えております。また、今回の医療支援では、被災したクリニックや病院の支援という新たな試みにも関わることができました。鈴記副理事長が、医師として地域医師会とともに被災医療機関の保険診療再開に尽力いたしました。これも、南海トラフ津波災害の際、被災医療機関の再生を手助けするという、AMDA の新たな支援の方向性との認識を深めました。

今回、私自身も医師として現場に入りましたが、菅波代表の現場統率力と人を動かす力にも学びがありました。印象に残っ

た言葉は「すべては被災者のために」。その言葉を胸に刻みながら、これからも様々な災害において AMDA 本部と行動を共にして参ります。今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。



最後に、手作りパンの支援を頂いた、知的障害者就労支援施設「パン工場なないろ」の子供達、そして飲料の支援を頂いた、AMDA の応援団「奇兵隊」のメンバー寺嶋社長にも感謝申し上げます。



## 相互扶助のバトン ～支援の輪の広がり～

一般社団法人 Bridge for Fukushima 代表理事 伴場 賢一

2018年8月14・15日と、私も Bridge for Fukushima の大学生4名が、AMDA様を通じて西日本水害復旧支援のボランティアに参加させていただきました。この大学生たちは中学生で被災、県内外での避難生活を経験し、その後当団体に参加し様々な活動を行ってきました。

Bridge for Fukushimaの代表である私は、2000年～2004年まで職員としてAMDAにお世話になり、2011年の東日本大震災を機に日本に帰国し復興支援の団体を立ち上げ、現在は高校生・大学生の人材育成事業を行っています。

今回の岡山での支援活動に参加させていただいたのは、2人の大学生の発案でした。西日本豪雨被災直後に、大学生から「中学時代に様々な支援をいただいてきたから、どんな形でも恩返しをしたいと思っていた。被災で支援してもらった経験があるからこそ、役に立てることがある」と提案を受け、AMDA本部の難波さんにご相談させていただきました。

大学生たちは2日間の現場での体験をさせていただき、行政のサービスとコミュニティの役割、現地でのギャップ、自立に向けてのシナリオなど様々なことを学ぶ貴重な機会をいただきました、ありがとうございました。

今回の活動を通じて印象に残ったのは、AMDAの理念でもある「相互扶助」の精神はバトンのように引き継がれ、支援の輪が広がりを持つことでした。支援を受けた者だからこそ、恩

返しをしたい、役に立ちたいという思いは福島の誰にもあり、被災自体は悲しいものですが、その思いを行動に移すことが出来る若者たちが増えていることを誇りに思います。

今回の活動を機に南海トラフにむけて、福島の経験をよりお伝えする機会を作っていきたいと思います。具体的には暗黙知となっている福島をはじめとする東日本大震災の行政・コミュニティの知識・経験をケースメソッドを通じて可視化して、お伝えしていきたいと考えています。これによって緊急時に必要とされる、組織ルールの明文化と、個人の判断力を高めることに寄与したいと考えています。



## 西日本豪雨災害 AMDAの活動に参加して

社会医療法人全仁会 倉敷平成病院 理事長 高尾 聡一郎

この度の西日本豪雨により、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。また犠牲になられた方々にご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。

当院では2016年にAMDAと連携協定を結び、以来「AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム」に参画し、想定訓練に職員が参加する等の連携を深めておりました。

今年7月の豪雨災害においては、AMDAでは直後より医療チームを派遣されています。当院でもAMDAからの依頼を受け、医師、看護師などの専門職が、サンワーク総社（総社市）や岡田小学校（倉敷市真備町）を中心に、医療、健康調査ボランティアとして参加させていただきました。

突然の災害に加え、暑さと疲労で体調を崩される方、ご家族や友人、知人が行方不明であったり、命を落とされた方、自宅が浸水被害に遭われた方等、避難所では過酷な境遇の方々がおられました。

実際に派遣された看護スタッフからは、「健康調査をしながらお話を伺うと、今後の不安から涙を浮かべる方や歯がゆい現状に怒りを訴える方もおられた」とのこと、持って行き場の無い思いを吐露される方もおられたそうです。

まさかこれほどの大きな災害が、自然災害が比較的少ないとされるこの倉敷で起きるとは、多くの方々を驚愕されたことで

しょう。この災害を教訓に今後一層防災対策に取り組む必要性を強く感じております。

災害から4か月が経ち、復興に向けた動きも進んでいますが、まだまだ不安は尽きません。当法人としましても、AMDAと連携しながら息の長い支援活動の継続に努めてまいります。



## 西日本豪雨災害によせて—被災地支援と大学生—

岡山大学法学部 教授 黒神 直純

本年7月に西日本を襲った豪雨は、われわれ岡山県民にとって予想だにしない災害でした。このたび被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

同僚や教え子など身近な人たちが多大なる被害に遭い暗いムードが立ち込める中、私の周りには被災した人たちの助けになりたいという学生たちが現れ始めました。早速、学生たちには、AMDA 本部と連携して、事務所や被災地でのボランティア活動に参加してもらいました。

こうした志の高い学生が出てきたのは今回に限りません。東北の震災の折にも、多くの学生が自発的に AMDA 本部に集まり、連日被災地支援の活動に取り組んでくれました。また、これらの活動は国内にとどまりません。AMDA のアジア各地での活動においても、「おかやま国際塾」という AMDA 主催の国際貢献プログラムにより、これまで多くの学生たちが被災地の支援活動に関わってくれてきています。

大学の財産は学生です。AMDA が強みとするネットワークと、大学の資源である学生が結びつけば、可能性が無限に広が

るように思います。岡山大学の教員として、まず私にできることは、その双方のつなぎ役となることであると確信しております。これからも、微力ではありますが、さまざまな形で AMDA の活動に協力できれば幸いです。



元おかやま国際塾生が医療調整員として活動に参加

## AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動参加報告書

認定特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS)

西日本を中心とした活発な梅雨前線による豪雨被害が拡大し、7月6日(金)午後7時40分に大雨特別警報が県内全域に出された。

翌7日(土)、特定非営利活動法人アムダによる総社市での緊急支援活動開始に伴い、MINDS では SNS 等を活用した広報支援を開始。8日(日)にはアムダに対し、状況の確認とともに職員の派遣について打診を行った。

9日(月)より Web サイト及びメールでも広報を開始し、当団体支援者や企業・団体からの問い合わせに対応し、寄付や支援物資の提供等についてはアムダ本部(岡山市北区伊福町)と連携し、受け入れ等のサポートを行った。

11日(水)、アムダより職員派遣要請があり、総社市内に開設された避難所・サンワーク総社(総社市駅南 1-5-7)に7月22日までの計12日間にわたり、延べ14名を調整員として派遣し支援にあたった。20日(金)にはアムダ本部にも職員1名を派遣し、後方支援にあっている。

AMDA 社会開発機構では7日午後には岡山在住・出身の職員及びその家族の安否確認が取れ、幸い大きな被害もなく、災害支援に参加することができた。岡山県内各地が被災したこともあり、多くの当団体の支援者・関係者の皆様からご寄付や物資の提供、激励をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

### 今後起こり得る南海トラフ災害に向けた提言

AMDA 社会開発機構として携わった過去の国内災害(中越沖地震、東日本大震災、熊本地震)と比較し、使用機材、提供

物資、人材等に今までの支援活動の経験が活かされ、対応ができていたと感じた。しかしながら、職員でも使用できない機材や、使用方法が共有されていない機材もあり、災害時に備えて機材のメンテナンス、使用方法の共有(いつでも使える、誰でも使える)をしておくことが必要だと感じた。

避難所によって差はあるが、提供されている食事・飲料など、東日本大震災や熊本地震と比較し、質・量ともに向上していると感じたものの、アレルギー対応、特定の疾患への対応などには改善の余地があったので、南海トラフ災害対応プラットフォームにおいて、各避難所などの現場の事例を共有し、今後の対策に活かすことができると考える。



## 晴れの国で起きた西日本豪雨災害に思う

一般社団法人岡山県薬剤師会吉備支部 支部長 堀江 政行

今年7月に発生した西日本豪雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々やご遺族の皆様に心からお悔やみ申し上げます。

7月5日から降り続く雨が6日の夕刻には大雨特別警報が報じられ、初めて聞ける着信音の緊急メールが続けざまに着信します。午後十一時を過ぎた頃薬局全体を揺るがす爆音に店を飛び出し、地震？まさか堤防が決壊した衝撃波？しかし地震速報の報道は無し。

一体何が起きているのか、これはただ事ではないと思いつつも暴風雨の中を帰宅。その後も鳴り続く緊急メールと幾度となく往来する緊急車両のサイレンに、翌日から始まる激動の日々を想像する事もなく、標高四十三mの我が家では避難する事もなくサッカーワールドカップ中継に夢中になっていました。

翌7日、早朝テレビの画面に映し出される衝撃映像に、真っ先に真備町内の旧知の薬剤師に連絡を取り全員無事を確認後、同町内の薬局に連絡するもすべての薬局と連絡が取れず、事の重大さを少しずつ頭の中で整理する自分に気付きました。総社市内の薬局はすべて連絡が取れたので、薬剤師会本部に状況を報告。その後も多方面より多くの連絡や報告をいただきましたが、この時点で何をすべきか思案していた所に、若手薬剤師より「今、きびじアリーナにいます。五百人以上の避難者がいて、真備町方面から多くの避難者が到着中！すでにドクターも診療に携わっています」との一報を受けてこの瞬間から激動の六十日が始まりました。急ぎアリーナに出向き、すでにAMD Aの的確な判断の下で運営されている避難所の医務室に飛び込み、診察のサポートを実施。今後の薬剤師会としての対応を検討し、翌八日は日曜日にもかかわらず薬剤師会本部も職員が待機していたため岡山より人員と物資の応援をいただき、十四名の薬剤師が救急医薬品や衛生材料を市内の薬局からかき集めアリーナに集合しました。早速避難者の健康状態のチェックを行い緊急に医師の診療が必要な人と、緊急性のない人のトリアージを実施して診療が必要な方には事前に服用している薬剤等をお薬手帳や患者情報より可能な限り特定した後に医務室に入ってもらい、薬剤が必要と医師が判断した場合は、災害処方箋に基づきアリーナの近隣薬局で調剤を行い避難者の元にお届けする作業が延々とつづきました。翌日からは地域医療を守る事に主眼をおいて、各々の薬局において避難者の処方箋応需体制を整えて、災害処方箋をはじめ無保険処方箋等初めて経験する事ばかりでしたが、多くの薬局が休日も返上して押し寄せる避難者＋日常患者の対応に追われる毎日でした。

また長期化する避難生活で体調を崩す人も多数発生したため、仕事を終えた薬剤師が夕刻より、OTC薬（一般市販薬）を携えて総社市内十一か所の避難所を訪問して、避難者の様々な健康不安の相談対応を八月三十一日まで実施いたしました。避難所生活から仮設住宅へ生活環境が大きく変化する中で、心身

両面に負担のかかる被災者のケアはこれまで以上に重要になります。

薬剤師会本部としても、岡田小学校への移動薬局派遣と倉敷保健所内への仮設薬局の長期に渡る設置等、災害発生以降限られた人材の中知恵を結集して対応いたしました。今思えばあれをすればよかった、こんな事も出来たのではないかと思うことばかりです。

最後に今回の災害で真備町内において薬剤師会員一名が命を落とされました。残念でなりません！この貴重な災害経験を今後起こるであろう運動型大規模地震や狂暴型広域豪雨災害に対して「想定外」を一割でも二割でも減らせるよう、今から出来る対策の必要性を痛感いたしました。



有限会社アイ薬局 代表取締役社長 薬剤師 村木 理英



医師へ災害処方せん疑義照会

南海トラフ大地震に備え、弊社のある総社市は丸亀市と災害時相互応援協定を締結し、支援活動の拠点となることが決まっている。そこで、総社市にある調剤薬局として、薬剤師として、最大限の支援が行えるよう移動薬局車両（EPV）を、平成30年2月に整備した。同時にAMDAさんと備蓄薬の協定を結び、今回の支援活動に参加させていただいた。テレビに映る真備町の光景は目を疑うもので、これが本当にあの隣町なのかと信じられなかった。多くの方が総社市へ避

難され、総社市内からの避難者も合わせて、きびじアリーナには1200人の避難者が集まった。避難者の方々の不安や疲労が少しでも解消できればと思い、7月7日（土）～7月10日（火）の4日間、支援活動を行った。

岡山県薬剤師会吉備支部から12名の薬剤師を派遣していただき、4日間で、きびじアリーナ、美袋小学校、サンワーク総社の3カ所の避難所で支援活動を行った。AMDAの医師・看護師と共に避難者の方へ聞き取りを実施し、その聞き取りを基に受診勧奨し、医師に災害処方せんを発行していただいた。その後、市内にある弊社の薬局（アイ薬局総社店・みわ薬局）で調剤を行い、避難者の方へ避難所で投薬を行った。

弊社は今回が初めての災害支援であった。右も左も分からないまま、活動に参加したが、AMDAスタッフさんのリー

ダーシップのおかげで大きな混乱もなく、活動を進めることが出来た。特に、活動計画の立て方や避難所の環境づくりなど、手際よくとても迅速な動きで避難者の方だけでなく、我々も強く安心感を覚えた。今回の活動を通して、いざと言う時の体制・連携づくりの大切さ、素早い初動の重要性を痛感した。住民の方への防災意識の向上と同時に、支援体制の構築、実践的な訓練の実施などを行っていく必要があると強く感じた。



避難者の方への聞き取りの様子

徳島大学大学院医歯薬学研究部総合診療医学分野

AMDA 緊急救援ネットワーク登録医師 AMDA 兵庫 副理事長 鈴記 好博

今回の西日本豪雨災害支援活動に私は2度、AMDAから派遣されました。

初めの派遣は2018.7.19～22、大きな被害を受けたまび記念病院において、健診車を用いた仮設診療所開設の手伝いをするというのが主な仕事でした。この仮設診療所は、私が被災地入りした日の前日から始まったばかりで、まだ診療所としてのシステムを手探りで構築しているところでした。それが、私がお世話になった4日間で診療の流れや処方体制などのシステムが改善されていき、患者さんの流れが日ごとにスムーズになっていきました。そして私が帰る7.22で当機関へのAMDAからの医師派遣は終了となりましたが、その時点で健診車撤収後の診療継続の道筋も見えながらのいい状況で、うまく地元の先生方に仮設診療所を託せることができたのでした。

帰り際に、まび記念病院の村松院長先生から、「はじめ、こんな健診車を持ってこられてどうなることかと不安でした。しかし笑顔で帰っていく患者さんを

見て、今となってはやってよかったと思います。先生がいなければここまでできなかったでしょう。本当にありがとうございます。」と、大変うれしい言葉を頂きました。しかしそれは、まび記念病院職員の皆さんをはじめ、地元の吉備医師会の先生方、AMDAのメンバー、そして真備地区に集結したその他の医療支援チームの方々のすべての力で進んで行ったものだと思えます。

2度目の派遣は2018.7.28～30、豪雨災害後の台風12号直撃に先んじて総社市入りし、豪雨災害に対応した避難所に加え新たに総社市が立ち上げる台風12号に備えての避難所への緊急対応支援というもので、徳島県立海部病院の稲葉先生と一緒に活動させていただきました。

台風直撃の7.28の夜はオンコール体制で緊急対応に備えましたが、幸い大きな被害も出ず台風は過ぎていきました。翌日は総社市内の11カ所の避難所を巡回、健康相談を受けました。現在受けている感染治療についての質問や、保険証

の紛失の相談、血糖検査が病院でできなかった不安、災害後のストレスなど、多くの相談に対応させていただきました。

最終日に所用でまび記念病院へ寄ったところ、診療所は健診車からプレハブになり、外来はすっかり地元の先生方の力のみで回っているという、理想的な状況となっていました。

今回はいつもの避難所などでの医療支援とは違う活動をさせて頂き、僕もいい勉強をさせていただきました。ありがとうございました。



## AMDA 緊急救援ネットワーク登録看護師 山河 城春

AMDAチームが岡山県総社市および倉敷市で活動しているなか、災害発生後約2週間後から参加させていただくことになりました。当初は、総社市内避難所や、病院での活動を予定して、その挨拶をかね巡回中に、先にDWATで活動していた方から、避難所に避難している施設の夜勤の手が足りておらず、職員が睡眠時間をまともにとれていないという情報が入りました

菌分館避難所に行くと、避難している施設は小規模多機能型ホームで、もともと利用されている高齢者の方や、今回、避難された方を含めて、職員が24時間対応を行っておりました。施設には常駐夜勤スタッフはいないため、昼夜問わず活動している職員の、少しでも負担軽減になることを目的として、AMDAチームとして支援活動に入りました。

主に夜勤対応のお手伝いをさせていたいただきましたところ、職員の方から睡眠時間が取れ、昼間に片付けなど行えるという言葉をいただきました。職員も被災されている状況の中、勤務負担の軽減は図れたのかなと思えました。

そんな中、避難されている高齢者の方で、陥入爪により炎症を起こしてしまっている方がいました。すぐに保健師チームと連携して、地域の病院へ受診手続きを行いました。処置後、包帯交換や、内服薬の状況観察、ご本人および家族の避難所から出たあとの対応を、保健師チームや、DWATと何度も話し合ったりしながら協力して、ひとつのチームのように連携してケアに繋がっていくことになりました。

被災地、避難所では、様々な支援団体や、医療団体を名乗って、被災者の目の

前を駆け抜けるようにやってきます。動きも別々でした。しかも別の団体には、なかなか情報共有はされません。先ほど上げた例でも当初は、それぞれの団体の場所で、それぞれに、経緯を何度も伝えたりして情報共有をしていきました。

やがて繋がりひとつのチームのようになれたのです。今後発生してしまう災害において、今回のように、いろいろな支援団体と密な協力体制を作り、連携していくことが、被災された方々のために繋がっていくことと思えました。



## AMDA 緊急救援ネットワーク登録看護師 堀内 美由紀

まず、西日本豪雨で被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。僭越ながら、熊本地震に続き岡山での緊急支援活動に参加して学んだこと、考えたことを述べさせていただきます。

災害時の緊急支援の目指すところは、救える災害死をなくすことです。これは、近年、問題になっている関連死も含みます。ではどうすれば？やはり訓練です。チームメンバーが同じ認識/目的、知識や技術を持つことが緊急時の効率的な活動につながります。そのためには訓練が欠かせません。現在AMDAが連携機関と定期的に行っている南海トラフ地震に向けたシミュレーションは大きな意味があると思います。また平時の訓練で育まれる仲間への信頼も重要です。私自身も総社に到着した時、益城町でAMDA統括をされていた難波妙氏のお顔が目に入った時には、とても気持ち落ち着きました。熊本での活動時に難波氏に抱いた信頼感だと思えます。まだ状況把握も十分ではありませんでしたが「〇〇はお願いね」「〇〇は任せますよ」といった言葉に動揺すること

もなく、「難波さんが私にでもできると判断した仕事なのだからできる！」みたいな、魔法の自己効力感が生まれたように思いました。信頼するから自分の意見も伝えられ、メンバーの意見も聞くことができる、当たり前のことですが、実際には難しいことです。災害医療活動の柱であるCSCA「Command and Control」「Safety」「Communication」「Assessment」は、信頼を基盤に強化されるものであり、AMDAの活動には、それを証明できる場面が多く見られます。

医療従事者としての意見を少し書きます。被災され避難所に来られるほとんどの方は、たとえ病気が障がいがあっても、普段は地域で普通に暮らしている方々であり、病院のように治療を求めて集まっている方々ではないので、どこまで介入するか、どのように介入をするか、は大変難しい課題です。確かに異常の早期発見は重要ですが、被災地に赴く医療従事者の多くは、まだまだ予防より治療に意識が向きがちで、医療を押し売りしてしまったり、問題を探すことにエネルギーを注ぎがちだったりするので、時々自分

やチームの関りを客観的に振り返ることは大切だと思います。私自身も、看護の原点、ケアの意味は「気遣う」ですので、プロの「真の気遣い」を心がけたいです。さらに、看護職は、保健師、支援ナース、看護師ボランティア、AMDA看護師、など、同じ場所に派遣される同じ看護職でも派遣の目的や役割が異なります。重要なことは、被災住民の方々の支援となるべく、その時々でうまく役割分担できることですので、そうした面でリーダーシップが取れるよう有事に備え日々研鑽していきたいと思えます。

災害はないに越したことはありませんが、AMDAの活動で学んだことですので、お役に立てることがあればと思えます。



AMDA 熊本鍼灸チーム 鍼灸師 松村 幸子

熊本地震の時に AMDA を知り、『東日本の時にお世話になったから』『困った時はお互い様だから』と沢山の方に支援して頂き助けられました。

AMDA の精神である相互扶助に賛同して西日本豪雨被害の支援活動に熊本でのお礼が出来ればと参加しました。

真備町、総社市での AMDA の活動は熊本地震の時も同じでしたが医師、看護師、薬剤師、保健師など他職種の方々と

私達鍼灸師も協力しながら支援出来た事が被災者の皆さんに安心感を感じて頂いたのではないかと思います。

豪雨被害の片付けや慣れない避難所での生活で起こる腰痛、肩凝りや、不安やストレスから起こる様々な症状に鍼治療を受けられて笑顔になって帰られる被災者の様子が我々鍼灸師の喜びとなりました。

今後も起こりうる災害時に『困ってい

る時はお互い様』の精神で一緒に活動が出来る鍼灸師の方が1人でも増えてくださると嬉しく思います。



AMDA 熊本鍼灸チーム 鍼灸師 後藤 英二郎

支援に入る我々自身のことについてですが、まずは健康体であることが求められます。我々自身も生活習慣を見直し、適量の食事と適度な運動を習慣化させておくことは大切です。

合わせて、鍼灸支援といえども活動の場は避難所なので、ボランティア心得は理解しておいた方が良いでしょう。もちろんお住いの自治体の社会福祉協議会に行って、ボランティア活動保険に加入するとお良いでしょう。

そこから届く便りに傾聴ボランティアや見守りボランティアの募集もあるので、それらに参加し経験しておくことも

有益です。

現代は何かと価値観や考えが偏りがちな世の中で、溢れる情報も真偽のほどが定かでなかったりするので、いろんな意味で中庸であることが求められると思います。常に自分の知識を疑い、世の中の常識を疑う目（心）も必要なかも知れません。自分の中身もアップデートしておかないとですね。

最後に、大規模自然災害は自分たちの住む街でも必ず起こるといふ当事者意識を高めておくことが何より必要で、そこを出発点として想像力を高め、行動に移すこと以外に減災は実現不可能です。

AMDA 緊急救援ネットワーク登録鍼灸師・調整員 石堂 智行

7月6日、非常に強い雨が続けている中、土砂災害などの恐怖心から、私は避難所に避難をしました。幸い私の自宅は無事でしたが、その翌日、先に AMDA の活動に参加していた友人の声掛けもあり、AMDA の調整員として活動に参加しました。参加を決めたのは、自分が助かったから他の人を助けなければという気持ちと、真備町に住む私の鍼灸院の患者さんたちと連絡が取れず、避難所で活動していれば患者さんたちに会えるのではないかとという願いもありました。

避難所で鍼灸を必要とする方がいれば、いつでも治療を行えるよう準備もしていました。しかし、熊本地震での活動から避難所での衛生面の大切さを感じていたのと、今回暑い避難所生活で脱水症状や熱中症疑いの方が頻発するなど危険

な状態にあったことから、まず避難所の状況を改善しなければと感じました。そこから、避難者の方々の安全、そして遠くから活動に参加している方々の安全を守るため、調整員として最後まで活動を行いました。調整員としての活動は、他の派遣者の方々が円滑に活動を行えるよう移動・食料調達などの手配から、避難者の方々が安心して過ごせるように避難所の掃除まで多岐にわたります。避難所環境を整えたり、他の派遣者の方々の活動を円滑に行うお手伝いをする事で、避難者の方々の不安な気持ちを少しでも和らげる手助けが出来ていれば非常に嬉しく思います。

また、私が今回調整員として活動して感じたことは、AMDA の活動のネットワークの軽さです。支援を必要とする場

所のアセスメントや、ニーズを発見した後の派遣・調整などの流れがとてもスムーズでした。日頃から、災害支援の経験の蓄積があり、災害対応に関して準備をしている AMDA だからこそ迅速な活動が可能になったと思います。今後、南海トラフはじめ大きな災害が起こった時、私も今回の経験を活かし被災地で被災者の方々の役にもっと立てるようにしていきたいです。



独立行政法人国立病院機構 福山医療センター 看護師 大島 瑞穂

平成30年7月12日、西日本豪雨による甚大な被害に、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関である福山医療センターの災害チームとして、当院より2名災害被災者避難所支援に参加しました。活動内容として、倉敷市真備町7世帯18人を避難所のサンワーク総社から、倉敷市内の避難所へ移動する前の健康状態の確認と把握、避難者の健康相談を行うことを中心とした活動でした。

西日本豪雨3日目ということもあり、JR山陽本線の運転中止や見合わせ、区間内本数制限とまだ見通しの立たない中、避難所ではドクター・DMATや理学療法士・保健師・看護師・地元ボランティア・市役所職員など様々な被災地支援の方が揃い活動していました。

環境の面ではダンボールのベッドや、発熱など感染している避難者の部屋の確保、午後からは総社市長の慰問があり、「どのようにすれば避難者の人権が守れるか」「カーテンを付けるべきか、他の素材を考えた方がよいか」と提案があり、AMDAスタッフの方もタイムリー

に様々な内容について対応していました。私達もAMDAのゼッケンを身に付けるからには、「救える命があればどこへでも」のAMDAの精神で避難者と関わらせていただきました。

まずチームで昨日の避難者の健康状態の共有を行い、避難者のもとに手分けして伺い、その中で様々な避難者の心身ともに疲弊した切実な思いを知ることができました。「家や家具はもちろんのこと、金庫の中に入れていた通帳までびしょびしょになり一晩かけて通帳1枚1枚にティッシュを挟み、翌朝銀行で新しいものに換えてもらった。なんでこんなことを・・・」「糖尿病があり、今まで様々な事に気を付け食事を作って体調を整えてきたのに。ここではパンや弁当と準備してくれていることはありがたいが、わがままなことは言えないけど、病気がどうなるのか不安」「長年の腎臓病で週に3回透析を行なっている。避難場所を換えるならば透析対応してくれる病院の近くの避難所を希望。歩いて通えるなら他の人にも迷惑をかけなくてすむ・・・」「寝られなくて、血圧が高い日が続いている」

等多くの不安を抱えていました。1日の支援であったため、被災者の言葉を傾聴し、関係者の方に伝えるところまでしかできず心残りもあり、今後避難者の精神的・身体的フォローに、多くの継続した支援の必要性を感じました。

日本は自然災害、特に地震が多い国です。私は、岡山県民として「晴れの国！岡山！」と言われ続け、岡山に災害なんてと誰もが思っていたのではないのでしょうか、しかし、西日本豪雨災害があり、この経験・課題（①よりよい避難生活（安全・安心・安楽）の確保②正確な災害の情報③今後の災害の見通しなど被災者へ提供④適切に対処するシステムづくり）を、次に繋げていく必要があります。この度災害支援に参加出来たことを機会に、今後ぜひ災害対策に協力していきたいと考えています。



独立行政法人国立病院機構 福山医療センター 整形外科 副看護師長 片山 智之

真備町に到着する前に、被災地の状況はニュースやインターネットで情報を得て、ある程度被災地での活動についてイメージしながら参加させて頂きました。岡山駅で、AMDAの方々とは合流し、避難所に到着するまでの車中で、情報交換を行いました。メディアの情報だけでは、詳細状況まで知ることはできないことに気づきました。真備町は、2005年に倉敷市に編入合併しましたが、災害当初は、倉敷市が支援できず、隣接自治体である総社市が支援を行っていました。CSCATTTの中の、C（command：司令

部）に対して、どこまで支援を要請して良いか、難しい場面があったと思います。刻々と変わる被災地の状況に合わせたCSCATTTの情報共有が支援を行うにあたり必要だと感じました。

私たちが、支援に到着していた時の避難所は、交通が可能であることから食料などの最低限の支援物資は届いていました。被災者は、日中は、自宅の片付けに行き、避難所には高齢者や有病者が残されていました。夜間は、日中より支援スタッフが少なくなる反面、自宅の片付けを終えた被災者が戻ってこられ、管理上

困難な場面も想定されるので、支援スタッフにとっての負担を考慮した体制が必要だと感じました。

最後に、この度は短い期間ではありましたが、被災地での活動に参加させて頂いたことを大変光栄に思います。現地では、とても丁寧に対応して頂き、支援者同士のコミュニケーションが重要であることを実感しました。今後、南海トラフ地震に備え、災害時は少しでも被災地の支援につながるよう活動したいと思います。

あん摩マッサージ指圧師 山崎 克枝

岡田小学校のAMDAの部屋で、私がマッサージ施術を提供できたのは、たいへん大きな喜びでした。私も真備町の自宅が水没したので、特に被災者の患者さんたちには、同じ被災者の立場で体験や思いを共有することで私にしかできない「特別な治療」ができたのではないかと自負しています。そのことで、私自身も大いに励まされました。また、このような活動に携わる機会を得たことで、新しい視野が広がりました。

モンゴル・ウランバートルエマージェンシーサービス 103 医師 アルタンザガス アディヤス

まず初めに、今回の支援活動の参加報告ができることを大変嬉しく思っております。私は2012年から緊急医療サービスセンターに勤務しており、私の部署はこの5年間 AMDA と合同で医療支援活動をしています。その活動の一つに AMDA 多国籍医師団による災害時の緊急救援活動があります。

私が初めて参加したのは、2013年の台風30号によって被害を受けたフィリピンでの支援活動でした。そして今回、AMDAの西日本豪雨災害支援活動への参加が私の2度目の支援活動です。

まず、これらの機会を与えてくれた AMDA へ感謝をお伝えしたいと思っております。そして、今回訪れた避難所の被災者の方々にまず必要なのは精神的サポートだと感じています。真備公民館菌分館ではご年配の避難者の方にモンゴルの歌を歌って差し上げました。それは避難者の方にも私にとっても、忘れることのできないひと時です。

その後訪問した岡田小学校では、AMDAの皆様が被災者の方々にできる限りの支援をするべく活動されていました。

今回の支援活動で共に活動して下さった皆様に、心から感謝申し上げます。そしてまた岡山県を訪れる日を、楽しみにしております。



モンゴル国立医科大学病院 内視鏡医 バトラフ ムフバヤル

私は、岡山県国際貢献助成プログラムにAMDAから推薦を受け、岡山済生会総合病院で2か月間の内視鏡研修の機会に恵まれました。

医師として私は、自国での災害発生時には必ず現地へ救援に向かいます。今回は、私の来岡直後に西日本豪雨災害が起こり、被害を受けた真備町や総社市の避難所でAMDAの支援活動に参加しました。そこではこの災害によって自宅を失った方、愛する家族を亡くされた方が多くおられました。

自然災害に対する備えが万全でも、実際の被災状況を予測することは大変難しい。今回の災害も同様ですが、ボランティアの方々の様々な支援は大変尊い活動であると感じています。災害後、被災者の方々は精神的に落ち込み、また身体的にも傷を負われているのを目の当たりにし、今回私が被災者の方々の助けになれたことは、大変光栄なことでした。

皆様が私を歓迎してくださり、モンゴルと日本は、例えば血の繋がりはなくとも兄弟であるかのような絆を感じてい

ます。医師として、モンゴル人として、今後も災害被災者の方々の支援を継続するとともにAMDAの尊い活動に心からの敬意を込めて感謝いたします。



徳島県阿南市 原田 真理子（保健師）、柳田 麻衣菜（保健師）、七條 隆能（事務職員）、西野 高史（事務職員）

阿南市は、AMDAと平成29年5月30日に連携協力協定を締結し、災害時の医療救護班派遣等の協力体制を構築しています。今回は、保健師2名と調整員2名で、サンワーク総社と真備町の岡田小学校の2か所に分かれて活動を行いました。鍼灸師・マッサージ師による施術の補助業務や、健康相談、本部との連絡・調整を行いました。施術を通して、「楽になった」と笑顔で帰る方も多く、避難所の中でリラックスできる場所を提供しているAMDAの活動の重要性を実感しました。活動を通して、被災地の支援はもちろんですが、AMDAの活動についても理解を深めることができました。阿南市発災に備え、AMDAやその他の支援団体の受け入れ体制について検討する際にも、今回の経験を活かしたいと思っております。支援活動の機会を与えてくださった皆様に感謝するとともに、被災地の1日も早い復興を願っています。

AMDA 緊急救援ネットワーク登録医師 稲葉 圭佑

避難所を巡回診療することで、大切な思い出が流され瓦礫となった悲しみを知り、先のことも考えられない程、呆然としている状況を目の当たりにし、復興の難しさを実感した。復興には行政、医療、地域住民などすべてが一致団結する必要があると感じた。

独立行政法人労働者健康安全機構岡山労災病院 小児科 医師 安藤 由香

友人（高杉こどもクリニック院長）が先陣を切って活動していたため協力を申し出た。被災者の方々の問題が時間を追うごとに刻々と変わっていること、実地で無ければ分からないことも多く学ばせていただいた。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録医療調整員 高倉 果林**

AMDA の岩尾様より調整員のお話を頂き、何かお役に立ちたい気持ちで支援させて頂きました。  
AMDA の様々な支援を実際に知ることが出来たと同時に、もっと勉強してより質の高い支援が行えたらと思っています。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録看護師 菅原 久美子**

未曾有の災害と突然の避難生活で、被災者の心身の負担が大きいと感じ、サポートしたく参加致しました。傾聴や足浴でストレス軽減に努め、他団体とも連携し、希望を持って復興に臨めるようにと調整を行いました。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録医療調整員 大阪市立総合医療センター 藤田 麻緒**

現地の状況を知り、何かできることがあればと AMDA に連絡しました。被災地での活動は初めてで、見るもの聞くもの全てに衝撃を受けました。学ぶことばかりでしたが、今回の経験を忘れず、今後に活かしていきたいと思っています。

**ケアハウス タなぎ苑 介護福祉士 藤田 智幸**

地元倉敷で水害が起きた事を目の当たりにし、「何かできる事はないか」と思い参加させていただきました。高齢者の夜間対応で施設職員が少しでも安心して休める時間を提供できればと思い活動を行いました。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録看護師 小曾根 京子**

AMDA スタッフと参加されたボランティアの皆様を支えられて活動することができ、感謝しております。被災地では、ご自身が被災しながらも、被災者のために働く自治体職員の皆様の献身的な様子が印象的でした。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録看護師 小野田 春花**

AMDA と出会った学生時代から、看護師として AMDA で活動することをひとつの目標にしています。この度地元岡山で多くの友人が被災する中、動ける自分にできることを模索する日々でした。健診車の立ち上げや避難所運営等に関わることで、医療技術だけでなくマネジメント力の重要性を体感。期待に応えられなかった悔しさを糧に、医療者が迅速な対応をすることで被災者に安心を感じてもらえる事実を勇気に、災害看護を学び直します。

**医療法人社団かとう内科並木通り診療所 看護師 西村 公江**

西日本豪雨災害支援活動に参加させていただき、ありがとうございました。熊本地震から学ばせていただいたおかげで、避難所での医療支援、健康支援活動に重点をおき、被災者の方々へのサポートを行なわせていただきました。調整員の方々が、被災者のニーズに沿った支援活動を速やかに行える体制をとって下さっているおかげで、無事支援を終えることができました。ありがとうございました。

**地元ボランティア 看護師 森野 佐奈美**

親族が熊本地震で被災しており、以前から支援活動に参加したいと思っていた。今回参加していた知人から人が足りていないと聞き、参加を決めた。避難所で被災者の方々の話を傾聴する中で、災害の悲惨さを実感した。

**社会福祉法人旭川荘療育・医療センター 看護師 森田 良子**

私が参加したのが、まび記念病院での外来診療、岡田小学校での鍼灸支援の補助、分館でのボランティアサポートでした。当たり前前の事かもしれませんが、実際の現場を見る事の大切さを改めて感じました。

**社会福祉法人旭川荘療育・医療センター 看護師 太田 博美**

H30年7月20日まび記念病院の支援活動に参加。病院玄関に常駐させた健診車を診察室とし、待合の設営、問診、診察介助、処方薬の説明、被災者の方のお話を伺う、支援物資（補水液など）の配布など様々な対応を行いました。



まび記念病院の健診車の前でミーティングする様子

**看護師 匿名**

以前からボランティア活動への参加を検討していた。今回地元での豪雨災害が酷く、参加を決めた。公民館で被災者の方々と体操を行い、怪我された方は継続的にケアを受けられるよう、保健師と連携して活動をした。

**総社市山手福祉センター 看護師 難波 亜矢**

看護師が足りないと知り合いに聞いて、役に立てるならさせていただこうと思った。受付の担当で具合の悪い方、怪我をした方をドクターに繋ぐボランティアをさせていただいた。AMDA は最前線の現場で働いているイメージだったので、自分ができることがあって良かった。良い体験をさせてもらった。

**社会福祉法人旭川荘療育・医療センター 看護師 伏見 由美子**

私は、7月18日に岡田小学校で鍼灸師の方たちと共に活動しました。診療補助やカルテ作成と整理を中心に行いました。その中で、被災者の方の心や想いに寄り添いながら関わることの大切さを感じた一日でした。

**医療法人横浜柏堤会 戸塚共立第2病院 看護師 堀野 大樹**

今回の活動を通し感じたことは地元でAMDAが根付いていること！被災者から「AMDAが来たから安心！」と声をかけて頂きました。人との連携と顔の見える関係が大事であることを再確認しました。貴重な経験をさせて頂き感謝致します。

**総社市山手福祉センター 看護師 林 智恵子**

避難所となっている吉備路アリーナが支援者が足りていないと聞き、避難所へ行ったのがきっかけでした。災害支援は初めてで、また発災直後と言う事も不安もありました。暑い避難所で体調を崩される方も多く、被災された方々へどう声をかけていいのかわくこともありました。スタッフの方や先生方の的確な指示があったから初めての私でも支援に参加する事が出来たのだと思います。一日も早い復興をお祈りしています。

**徳島大学 助産師 増矢 幸子**

今回の豪雨支援に携わり、現場のニーズに応じた柔軟な対応の重要性を感じた。AMDAの精神「困ったときはお互いさま」という気持ちで、これからも自分ができるところをすぐに行動に移せるような医療人でありたいと思う。

**地元ボランティア 看護師 多田 由美子**

初めての参加で、看護の仕事以外で社会貢献をしたいと思った。真備町でいところが被災し家が全壊した。身近な人の為にボランティアをしたいと思った。岡田小学校での活動でAMDAチームのメンバーが快く行動を共にして下さり、安心して活動ができた。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録調整員 サヒラ・イクバル**

日本国内で災害が起きた時に寄付以外の支援をしたいと思っていて、派遣を希望しました。普段の裏方の仕事とは違い、直接被益者と会って、仕事の成果を体験できたことにやりがいを感じ、保健師や鍼灸師ともいいチームワークで仕事ことができました。



サンワーク総社避難所  
鍼灸チームと避難者の治療状況の共有

**医療法人高杉会高杉こどもクリニック 調整員 逸見 奈加子**

馴染みのある隣町が浸水したことが信じられない気持ちの中、私は当クリニック院長と避難所へ駆けつけました。憔悴し不安そうな方々を目の当たりにし、私は少しでも力になりたいという一心で活動をしました。

**赤磐市職員 調整員 明石 光広**

私は、発災からおよそ1週間後にあたる7月13日にサンワーク総社、14日に総社市役所で調整員として活動しました。自治体職員として、赤磐市で仮に災害が起きたと想定したとき、亜急性期における避難所運営について、大変多くのことを学ばせていただきました。

**医療法人芳越会 ホウエツ病院 調整員 岩脇 美和**

AMDA に派遣された方々を把握するためのスケジュールツールをエクセルにて作成しました。また、寄付された物品の運搬もお手伝いしました。日に日に変化する情報を次に繋ぐことがこんなに大変な事なんだと認識しました。

**医療法人ときわ会藤井クリニック 調整員 橋本 宏美**

7月8日に吉備路アリーナで当院の医師の救護所の活動と一緒に参加しました。

とにかく暑くて、何をどうしたらよいかわからない状況でした。その中で独居暮らしのおばあちゃんにお会いしました。薬もなく、冷房もなく、硬い床へ毛布を敷き1人で過ごされていました。この方はこれからどうなるのか、息子さんがおられると言っておられたが無事に会え、元気に過ごされているのだろうか、今もずっと心のどこかへ引っかかっています。

**AMDA 兵庫 医療調整員 原田 弥生子**

東日本大震災での活動以降、医療調整員の必要性を感じていましたので、この度は調整員としての参加を決めました。短い時間内の活動でしたが、何とか本部の方の指示を頂きながら業務を行うことが出来、改めて医療調整員の用途が色々あると思いました。

**地元ボランティア 調整員 古郝 祐蔵**

7月末から真備町岡田小学校に入りました。AMDA チーム(マッサージ師、鍼灸師、看護師、調整員)は、被災者一人ひとりに向き合いストレスを軽減し、より困難な人の継続支援へとつなぐことができましたと思います。スタッフの皆様、ありがとうございました。

**岡山倉敷フィリピーノサークル 顧問 調整員 古城 デイジー**

岡田小学校に避難している人を見て、とても心が痛みました。海外と違って様々なボランティアグループが駆けつけていました。一つ残念なのは、避難所に掲載されている説明が日本語で書かれていたことでした。活動中、受付だけ英語表記にしました。せめてローマ字表記があれば、外国人も情報を得ることができたでしょう。日本で初めて災害支援に関われて、とても光栄に思います。これからも、救援活動に参加したいと思います。

**医療法人ときわ会藤井クリニック 調整員 高本 美帆**

災害発生2日目 災害支援活動というものに初めて参加し、次々と届く支援物資の仕分けを行った。こんなに直ぐにたくさんの方から物資が届くことに驚き、温かさを感じた。ただ物資の偏りもあり、下着などがほとんどなく被災者でないとわからないことも多いと感じた。今回の活動を通して、本気で緊急時のための普段からの準備と、対応策を自分なりに考えなければいけないと思った。

**医療法人ときわ会藤井クリニック 調整員 三輪 真理**

梅雨明けした蒸し暑い7月8日、きびじアリーナ避難所へ中学2年生の息子と一緒に行きました。災害も避難所もボランティアも初めての経験でした。最初は状況がわからず、何をすればよいかかわからない自分を情けなく感じていました。次第に、大量の支援物資が搬入され、仕分け作業をしました。個人の持ち込みもたくさんありました。たくさんの支援物資の仕分け作業は大変でしたが、人のやさしさを感じました。

**地元ボランティア 調整員 山崎 真理**

仕事の夏休み6日間、AMDA 総社災害対策本部で活動しました。特に心に残っているのは、活動後の感想や課題などをお聞きしたことです。皆様の熱い思いと貴重な現場情報が溢れていました。皆様と共に活動できたことは大きな誇りです。

**地元ボランティア 調整員 市村 功**

西日本豪雨災害で倉敷市真備町の多くの被災された人達が小学校の校舎・体育館で不自由な生活をされているのを見ました。少しでも笑顔を取り戻してもらいたいと思いAMDAさんの復興支援活動に参加しました。

私の活動はAMDAさんのスタッフとボランティアさん達の活動が少しでも楽にできるようにみなさんの後方支援のお手伝いをするのでした。AMDAさんの復興支援活動に参加できたことに感謝しています。ありがとうございました。

医療法人芳越会 ホウエツ病院 調整員 篠原 さゆり

今回当法人理事長より、AMDA 災害対策本部に事務方として支援に入ってほしいと依頼がありました。情報の整理と今後入ってくる情報を収集するためのツールを作成しました。人手の少なさや情報収集の重要性を感じました。

医療法人さくら診療所 調整員 篠原 隆史

7月23日から28日まで真備町で支援活動に参加しました。当初、送迎や食事の配送をしながら被災地を幅広く見られました。報道されない被災地域に救援が届かない実態を見て、巨大地震発生後の四国に不安を感じました。

一般社団法人岡山県鍼灸マッサージ会 調整員 松崎 豊彦

鍼灸マッサージ師会を通じアムダの活動を知りました。医療ボランティア初参加でしたので各医療従事者の方がどのようにケアされるかを勉強し被害にあわれた方のお役に立ちたいと思いました。

地元ボランティア 調整員 小椋 順子、小椋 健大朗

私たちが西日本豪雨災害で被災（床下浸水でしたが）して思うのは、世界中で異常気象を起因として災害が頻発する中、岡山は災害が少ないから大丈夫！という認識の甘さがあったということです。どこでどんな災害が発生するかなんて分からない時代になり、日頃からの備えが大事だと思い知らされました。今回、私たちがAMDAでお手伝いできたのは限られた時間でしたが、被災された皆さまが1日でも早く元の生活に戻れますようにと祈っています。照りつける太陽の下で活動される派遣者の方々、AMDA事務所内外で対応に追われる職員やボランティアの皆さんに頭が下がる思いでいっぱいです。酷暑の時期に長期間の緊急救援活動、本当にお疲れ様でした。



大きな漂流物が町のあちこちに（倉敷市真備町）

AMDA 緊急救援ネットワーク登録調整員 小野 亮

参加した経緯としては、私の身近な場所で災害が起こり、自分に何かできることをしたいと常に考えていました。その中でボランティアセンターでのお手伝いや現地での活動を続けていました。続けるなかで、被災された方と傾聴などケア活動もしたいと思い、AMDAに参加しました。活動のなかで役にたったかは分かりませんが、少しですが被災された方の傾聴をすることができました。

医療法人ときわ会藤井クリニック 調整員 西中 真依

今回の西日本豪雨災害で事前の準備、速やかな判断と対応の大切さを改めて痛感しました。

自分には足りていないものばかりで、医療現場で働いていながら自分にできることの少なさに歯がゆい思いでした。少しでも役立てたらとAMDAさんの活動に参加し、貴重な経験をさせて頂きました。これからも自分にできる復興支援をしていきたいです。

AMDA 兵庫 看護師 相羽 亜紀子

支援活動のお役に立てればと、健診車を使った外来診療に参加しました。病院が被災したことで地域の方々の不安も強く感じましたが、知っている医療関係者に会え薬を受け取れたことで安堵された表情を見てお手伝いが出来てよかったと思いました。

岡山倉敷フィリピーノサークル 相談役 調整員 大山 マージョリー

AMDAの活動に参加する際、被災地でどのような活動をするのか率先して見つけ出すのは参加者本人です。状況は違うものの、被災地の景色は海外と同じで、大きな悲しみが私を襲いました。総社市や倉敷市での医療支援活動中、熱中症、脱水、外傷や心的ストレスなどの患者が多く見られました。このような緊急時は、立ち止まって考える時間はありません。直感に従うのみです。AMDAの活動に参加できることをいつも光栄に思い、感謝しています。

岡山倉敷フィリピーノサークル 調整員 滝川 マリーナ

7月28日、岡田小学校で活動することとなった私は、避難所の様子を見た後、活動に参加した。鍼灸などの施術を受ける前は表情の硬かった人も、施術後は元気を取り戻して帰っていく様子に安堵した。AMDA被災者支援の一端を担えたことに感謝している。

生活協同組合おかやまコープ 調整員 梅崎 一夫

はじめて「調整員」として参加させていただき、AMDAの迅速な対応や、果たされる役割の大きさをあらためて実感することができました。今回の経験を活かし、何ができるのか考え続けていきたいと思います。貴重な経験をありがとうございました。

生活協同組合おかやまコープ 調整員 山下 輝

AMDAに参加されるボランティアのみなさんが岡山駅から集合場所の総社市役所に行く手段がなく困っていらっしやっただけ、朝、夜の送迎をさせて頂きました。日中は岡田小学校への物資搬入などおかやまコープならではのフットワークが良い行動で協力させて頂きました。

清水博文税理士事務所 調整員 渡辺 恵子

今回限られた地域で近くだったから出来たことも、もっと被害が広範囲に及び、自分が被災者だったら…。このような活動が果たして出来るのだろうかと思います。AMDのスタッフの方々の活動には、改めて畏敬の念を抱きました。

国際医療勉強会 ILOHA 調整員 米井 恒太

大学のサークル「国際医療勉強会 ILOHA」経由で参加させて頂きました。がれき撤去等ではなく医療面からの支援は自分にとって災害支援を新たな視点から知る良い機会となりました。少しでもお力になれば幸いです。

生活協同組合おかやまコープ 調整員 岡崎 かおり

おかやまコープとして現地に派遣され、「調整員」として、他県から来られたスタッフさんの送迎や物資の買い出しなどをお手伝いさせて頂きました。AMDAの方から「調整員さんがいてくれるからこそ、私たちは仕事に集中できます」と言って頂き、「こんなことでも役に立てた」という実感を持つことができました。

地元ボランティア 調整員 林美絵、林信和

岡田小学校で足浴のお手伝いをしました。ハッカを数滴垂らした水の中に足をひたしてもらい、笑顔でお話を聴きながら、“しんどいことがこの水に溶け出していきますように”と、心をこめてマッサージしました。

地元ボランティア 調整員 高田 敦子

真備町の大変な状況を知り、愛知から参加した。岡田小学校避難所で活動に参加、暑い日が続いていたため、持参したおしぼり冷却器を提供した。この経験を風化させず、今後もできることをしていきたい。

徳島県 美波町国民健康保険美波病院 看護師長 尾崎 美紀、看護師 吉田 扶紀、看護師 篠原 範臣、看護師 木村 光代  
徳島県 美波町消防防災課 課長 調整員 近藤 和人

美波町は今後、南海トラフ地震で被災する可能性があり、その時のための貴重な経験となりました。また、地域の方から「美波町で何かあった時には駆けつけさせてもらいますね。」との言葉を頂き、感動と繋がり大切さを感じました。

AMDA 兵庫 医療調整員 藤本 瑞穂

一度目はAMDA兵庫の支援物資運搬で総社入りした時、二度目は活動に参加できる日を事前に伝え、本部からの連絡を受けて参加した。調整員としての活動は初めてだったが、何か役に立つことがあればという思いで参加した。

AMDA 兵庫 助産師 早瀬 麻子

鍼灸チーム調整員として活動させて頂きました。自らも被災されながらも鍼灸チームで活動して下さっていた現地の方を通して、役割があることで前向きに頑張っておられる姿に頭が下がる思いでした。東日本の時に比べて鍼灸チームの初動がかなり早くなっているのも素晴らしいことだと感じました。



サンワーク総社避難所 保健師による巡回

赤磐市職員 保健師 我澤 成美

今回、市から AMDA への派遣という初めての形で支援に入りました。避難者の方々が自分のことだけでなく、他の避難者家族のことを思い互いに励まし合っている姿をみて、人の心・力に感心すると共に、支援者としてしっかり寄り添えたのか、今後どのように支援できるのか考えさせられました。

赤磐市職員 保健師 田村 由美子

避難者の方々が大変我慢しておられ不自由な生活を強いられている現状がよくわかりました。そのような中、皆さんが前向きに考えようとしておられる姿に、なかなか出来ることではないな、と思えました。今回支援に入らせていただき、何かお役に立てたのか、と思うばかりです。

AMDA 兵庫 保健師 河田 里奈

AMDA 兵庫から保健師・調整員として派遣させていただいた。AMDA の医療保健活動が、被災された方の心身の健康を支え、自治体が持つ力を取り戻す手助けをしていると感じた。今後も支援を継続していきたい。



総社市救護所での熱中症対策に向かう医療チーム

株式会社マスカット薬局総社店 薬剤師 横田 洋子

AMDA で活動するのは初めてで、今回被災者の薬相談にのりました。服用薬剤名が不明、流されて何も無いと言った状況の中から情報を拾い出して医師に繋げることで薬剤師としての機能が活かされたと思っています。

一般社団法人岡山県薬剤師会 薬剤師 吉田 和司

西日本豪雨災害に際して、ふだん見慣れた光景が1日にして濁流に飲まれた出来事には、誰もが深い悲しみを覚えました。被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げるとともに、1日も早く日常生活に戻るよう願っております。岡山県薬剤師会においても、この度、災害支援特別委員会を立ち上げました。あつてはいけないことですが、今後訪れるであろう災害に対し、少しでも準備ができるよう心づもりしていけたらと思います。

有限会社アイ薬局 薬剤師 村木 惇人

被災された方々に少しでも貢献したいと考えボランティアに参加させていただきました。実際に避難所に入ると無力さはものすごく実感し、もしこのような災害が再び起きた時のために対策や訓練などを積む必要があると感じました。

薬剤師 匿名

慣れてなくて大変だったなあ。勝手がわからなかった。何ができるのかな？と思った。受診をご案内するタイミング、精神状態を見極めて判断をするのが難しかった。精神的なケアが必要だったかもしれない。今後、連携してやっていけたらいい。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 教授 薬剤師 名倉 弘哲

岡山では、これほどの大規模水害を経験したことが、県民にとって意識改革になったことであろうと推察します。過去の災害と同様、被災地では医薬品ニーズが印象的でしたが、岡山では災害時の受援体制整備が課題であると思われます。

有限会社アイ薬局 薬剤師 高田 昌義

きびじアリーナで巡回を行い、具合の悪い方や、浸水被害で薬を流してしまった慢性疾患の方を見つけ、医師への診察につなげました。多くの方の「かかりつけ医療機関」が被害を受けていたので問合せもできず（電子）お薬手帳の重要性を再認識しました。

北信針灸師会（一般社団法人長野県鍼灸師会） 会長 鍼灸師 横矢 直之

AMDA のボランティア活動にて貴重な体験ができ、発見もありました。それは早さであり、対応力です。備品然り人材然り、そしてそれらを調整している方の対応が目を見詰るものでした。普段の診療にも関係することだと感じながら、その方たちの言動、行動を観させてもらいました。自分もそのようでありたい、そうなれるように今後の自分の仕事の励みとなった岡山での体験でした。わずか一日でしたが、ありがとうございました。※長野県針灸師会は6支部から成り立ち、北信針灸師会はそのうちの一つです。



災害鍼灸チームが活動したケアルーム

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 鍼灸師 奥村 成亨

今回、鍼灸師となり始めて災害における活動に参加した。週に一度の参加であったが、各週ごとに違ったこと、場面を経験することが多く、この経験がこれからの災害活動で役立つようにしたいと考えている。

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 鍼灸師 兼森 史峻

肉体的にも精神的にも相当ストレスがたまっているはずなのに、それを外に見せないようにする姿が印象的だった。施術することで、また会話をすることでストレスが少しでも解消できるようにと思って接した。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 鍼灸師 高木 謙輔

災害発生から素早く現地入りし、拠点进行、多職種と連携し施術を行うスピード感、県鍼灸師会の中でも行動を起せた人間はわずか数人で、災害ボランティア自体が初めての先生がほとんどだったので、もっと広く AMDA の活動を学ぶべきだと思う。

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 鍼灸師 山口 大輔

酷暑の中、環境が整わない避難所生活で体の不調を訴えケアルームを利用する人の中に小中学生までもが含まれていたことに、そのストレスの大きさは計り知れないと感じた。鍼治療と会話で少しでも癒やせればと思った。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 鍼灸師 小原 陸夫

AMDA 災害支援鍼灸活動に 2 日間参加した。看護師による弾性ソックスの装着レクチャーや保健師に同行して避難者の生活状況の把握も体験でき、ニーズに即した支援活動を行うには他職種連携が必要だと感じた。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 鍼灸師 小野 由実子

今回の災害では被災された方に対して鍼灸治療という形で AMDA の活動に関わらせて頂きました。2 カ所の避難所で治療させてもらい中には鍼治療は初めてという方も多くいらっしゃいました。帰りには「受けて良かった」と笑顔になって帰られ少しでも避難所生活の助けになれば良いなと思いました。

AMDA 緊急救援ネットワーク登録鍼灸師 小林 大祐

災害時において、鍼灸が素晴らしい役割を持っているということ、統合医療として他の医療職と協力しあうことでより活かされるということが、今後も AMDA の活動を通じて広がっていくことを望みます。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 なぐら堂鍼灸院 鍼灸師 浅山 友美

施術スペースの衛生面への配慮の重要性和コミュニケーションの取り方の難しさを感じました。

常葉大学健康プロデュース学部健康鍼灸学科 鍼灸師 村上 高康

私は熊本地震から参加しており今回は 2 回目です。今回、改めて「直接触れて癒やす」という事の大切さを実感しました。活動を支援して頂きましたスタッフの皆様へ感謝致します。1 日も早い復興をお祈りしております。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 松浦治療 鍼灸師 大賀 裕介

7 月 7 日の雨がここまでなるとは思っていませんでした。2 日後院長と市役所や真備の災害支援の状態を確認しに行きましたが対応は遅れておりケアステーションなどはまだ確立されておらず周りもあたふたしていました。しかし AMDA だけは迅速にケアステーションを作り被災された方へのケアを行っており行動が早いと感じました。やはり迅速に対応するには日々それに対して備えていかなければならぬ見習わなければいけない事だと感じました。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 鍼灸師 吉田 和彦

活動には 1 回しか、参加しませんでした。日常の診療では考えられない環境の中での施術は、私にとっても貴重な体験となりました。今後も、活動に協力させて頂ければと思います。ありがとうございました。

明治国際医療大学鍼灸学部はりきゅう学講座 鍼灸師 谷口 剛志

AMDA での活動を通じて、職種を越えた協働、そこで生まれた絆は自身にとっても良い財産になった。学生達にも今回得た経験をぜひ伝えていきたい。被災された皆様の日常が一日も早く戻りますことを祈念しております。

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 鍼灸師 谷口 美保子

災害に対するボランティアに鍼灸師として初めて参加した。避難されている方を中心に施術したが、いつもと違う生活・作業をされている方が多く、少しでもいつもと同じ状態になっていただければと思い、治療を行った。

公益社団法人岡山県鍼灸師会 鍼灸師 竹井 理沙

治療を受けに来て下さった方で「ここに来ると安心する」と言ってくくださる方、治療中に寝られる方がいらっしゃいました。心安らぐ場所になっていると実感し、同時に必要性を感じました。

学校法人順正学園 九州保健福祉大学 鍼灸師 中野 祐也、ゆう鍼灸院 鍼灸師 中野 侑子

我々は、熊本地震の際、AMDA の一員として鍼灸支援活動に参加しました。西日本豪雨災害で AMDA の本部がある岡山が被害を受けたと聞き、何か役に立てないかと思っていたところ、鍼灸支援活動の依頼を頂きました。被災地では、泥水で茶色く染まり、閑散とした家々が悲惨さを物語っていました。いつ終わるかも分からない家の片付けをしながらでも笑顔で挨拶をしてくれるおばあちゃん、自分の家が水浸しになっても住民のために走り回る職員さんやボランティアの人たち、多くの出会いの中で、未来を見つめて生きる「人間の強さ」を感じました。岡山での活動を通して沢山のことを学びました。活動に参加できてよかったです。一日も早い復興を願っております。

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 鍼灸師 北村 圭司

被災者の方の強い心に感銘を受けた。高齢の方から若年の方まで多くの方が復興に向けて日々の活動に邁進されており、少しでもその心に寄り添えるように施術できればと考えていた。

学校法人朝日医療学園朝日医療大学校 鍼灸師 龍神 孝慶

8月4・6日の2日間、岡田小学校の災害活動に参加させていただきました。被害を受けた方々の復興への懸命な姿に、少しでも力になりたいと強く思いました。



鍼灸治療の様子

公益社団法人岡山県鍼灸師会 鍼灸師 東原 広一郎

AMDA の災害派遣活動に参加してみて、被災者の方と身近に接する機会を得ることで、実際に被災に遭われた方々の大変さや苦労がよく分かり、こういった災害時だからこそ身心のケアの必要性を改め痛感した。

関西医療大学 鍼灸師 三浦 大貴

今回参加した経緯は帝京平成大学の今井賢治教授の紹介もありましたが、私は鍼灸の研究や知識、技術を災害鍼灸において活かせればと思い参加した。今回災害鍼灸の活動を通して、より鍼灸師の知識の向上、技術の向上が必要だと考える。

呉竹学園 東京医療専門学校 鍼灸・マッサージ科 鍼灸師 藤田 洋輔

AMDA の活動で感じる事は、協力体制と相互扶助の観点です。それは現地の連携、日常の職場、共に感じます。困った時はお互い様、平時には職場での協力関係を築き、有事には医療職、鍼灸師として貢献したいと思えます。

北信針灸師会（一般社団法人長野県鍼灸師会） 鍼灸師 風間 祐二

岡山県真備町の被災地に AMDA のボランティア活動に参加させていただきました。今回、ボランティア活動の為の準備しておくことの大切さを学びました。現場での連携や状況判断には経験も重要ですが、やはり準備だと改めて勉強させていただきました。また、色々なボランティア団体がありますが、目の前で困っている被災者を救いたいという熱意に隔たりはないと思っています。政治的な要素や損得で団体と協力し合えないという考えが改めてナンセンスだと感じました。多くの鍼灸師が目の前にいる人を幸せに出来るように会としてサポート出来るよう日々精進したいと思いました。ありがとうございました。



健診車で診察に訪れる患者の方々

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録鍼灸師 林 篤志**

地元が被災したことで鍼灸師として地元民として人として、何かできることがないかと思い参加させて頂きました。避難者の方のお手伝いをしているはずが、避難者の方々に元気づけられる不思議で貴重な経験でした。

**AMDA 参与 医師 森 将晏**

7月18日から3日間、まび記念病院が開設した健診車による診療に参加しました。患者さんは少なかったですが、地元の先生方が自分たちも被災しているにもかかわらず復興に向けて努力されている姿を見ました。

**AMDA 緊急救援ネットワーク登録看護師 武田 未央**

災害があまり起こらない地域、と思っていた私たちの地元岡山を、今回このような災害が襲いました。避難所での支援活動では、自らが被災しながらも活動にあたる地元出身の方々に会う機会が多かったです。みんな誰かのために何かしたい…。私たち支援に入るものは、そんな気持ちと地域のつながりを支えることも大切な支援だと、今回の活動で感じています。

**社会医療法人全仁会倉敷平成病院 事務次長 調整員 板谷 尚昌**

私自身、南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関の一員として、普段から災害対応の心構えはできているつもりでしたが、今回の活動を通じ、認識や準備不足等を痛感しました。災害対応に対する認識を新たにしました。

**社会医療法人全仁会倉敷平成病院 看護師 匿名**

今回、初めて災害支援活動に参加させていただきました。戸惑うことが多く、お役に立てたか心配ですが、貴重な経験でした。実際の現場では、バタバタしてしまうので、災害への備えは大切だと思いました。

**社会医療法人全仁会倉敷平成病院 看護師 匿名**

『自分にできることをやろう』と思い参加させていただきました。実際の現場では、様々なニーズがあり、医療支援だけでなく、心のケアも含め、柔軟に対応しなければならないと改めて感じました。

**社会医療法人全仁会倉敷平成病院 看護師 匿名**

被災地では、多くの方々（チーム）が活動していることに驚きました。日々の業務でも重要ですが、多くの方々が活動する現場では、情報の共有はすごく大切なことだと思いました。

**コニカミノルタ株式会社 調整員 江幡 吉貴**

今回は友人からの誘いがあり、災害地の現状を理解したいと思い参加しました。現場では、被災地の方々の不安や疲労感を感じました。そのため、多少なりともそういった感情が紛らわせたらと思い活動をしていました。

**コニカミノルタ株式会社 調整員 高木 祐志**

AMDA インターンの際に、お世話になった総社市や倉敷市が豪雨の被害を受けていると初めて知ってから、すごく気になっていました。想像以上に悲惨な状況でしたが、皆さんが立ち上がる手助けになろうと活動しました。

**地元ボランティア 調整員 中村 宥海**

仏教には『自利利他』という言葉があります。今回、支援活動に参加させて頂き、この真意を体感致しました。



岡田小学校避難所のケアルーム前 環境整備を行う様子

**看護師 匿名**

水害で亡くした恩人の為に何かしたいと思っていた所、友人がアマダで活動したことを知り、私もすぐに応募しました。鎮魂の気持ちが大きかったです。少しでもお役に立てて、私の心も癒されました。感謝しております。

海陽町 保健師 松原 文子、保健師 戎谷 幸子、調整員 長岡 正樹、調整員 藤木 崇

医療支援というイメージがあったAMDAの活動が、今回、一緒に活動させていただいた鍼灸師による支援やその他、多岐にわたることを知りました。毎日のミーティングの中で、それぞれのスタッフの意見により、環境や支援が改善されていくので、様々な意見が必要で、それにより想定外への対応も可能になると感じました。自分たちの活動の調整がされており、沢山の支援者が入ることで、調整の大変さや大切さを感じ、町の体制の中で、調整方法について、具体的に決めておく必要があると考えることができました。地震や津波では、被害が広範囲になると考えられるため、色々なパターンを想定したシミュレーションが必要と感じ、今後の体制整備等、平時からの準備について考える機会となりました。ありがとうございました。



岡田小学校避難所 足浴の様子

岡山県立大学大学院 学生 匿名

今回ボランティアでの住民の方との関わりで、災害後は多職種が多方面から住民を継続的に観察しながら、移り行く感情への支援や生活の移行に伴った具体的な情報の伝達などの支援を行う事が必要であると学ぶことが出来ました。

学校法人加計学園玉野総合医療専門学校 学生 匿名

メディアで報道されている被災地の様子を見て心が痛み、岡山に住む看護学生として何かできることはないかと思ったので参加した。年齢を問わず、避難生活に対して苦痛や不満が溜まっており、話したいことがたくさんあるんだなと思った。それに対してどんなことが私にできるか考える良い機会となった。

被災された地域の早い復興、被災された方々の心のケアとして何かできることはないか考えたので参加した。被災されて間もない時期にボランティアに行かせて頂き、復興には長い期間がかかるので、積極的にボランティアに参加していきたいと思った。

看護学生として困っている人に対して何かできることはないかと思った。話を聞くことが心のケアに繋がると学んだ。医療職や介護職など専門的な知識を持つ人が集まり、声を上げて活動する必要がある。レクリエーションを通し、歌や体操をすることで笑顔になれたり、明るくなれると分かった。

足湯の看護技術を活かして、災害で傷ついた心を少しでも楽にしてあげられると思ったので参加した。最初は何をしたいのかわからなかった。コミュニケーションを取っていくうちに話すだけでもありがとうと言って下さったりした。少しでも役に立てればと思っていたが逆に元気をもらった。辛い思いをしているのに、日々前に進んでいる姿にすごいと思った。

AMDAに興味があった。また、真備町の被災から何か自分にできることがあれば参加したいと思っていたから参加した。多くのサポートによって被災地が支えられていた。また現地の方の笑顔に逆に私自身も勇気づけられた。

実際に現地に行って自分の目で現状を見てみたかった。何か役に立てればと思って参加した。鍼灸師や他県からきた保健師もボランティアに参加していて、いろいろな分野の人が力も合わせて復興に近づけていくパワーを感じた。

岡山で災害が起きて、自分は何もしてきてないなと感じ何か役立てることがあればと思ったため参加した。災害が起きて、少したってからは被災者の心のケアが必要になっていると感じた。また食事はおにぎりやパンのときが多いそうなので、食事について災害の時はよりよくしていく必要があると感じた。

被災地の状況や災害の大きさ、ボランティアの必要性を知りたくて参加させていただきました。思っていたより、被害が大きくて驚きました。被災者の人は私たちボランティアに気をすく使っておられて、私たちは被災者の人が気を使わないように配慮することも大切だと感じました。

災害の現場に実際に行くことで何に困っているのか自分に何ができるのかが知りたかったので参加した。たくさんの人の協力が必要になると思った。直後だけでなく長い目線での支援について考えていく必要があると感じた。

足湯を行うことで、被災者の疲れを少しでも軽減させることができたらと思い参加した。小学校で足湯のボランティアに参加し、日々のストレスが溜まっているということが分かった。また子供の遊ぶスペースがあまりないということが参加してみて気付いた。

県外のクラスメイトが、主体的に被災地に行っていて、地元の私が何もしないのはいけないと思ったから参加した。何かできることはないかと考え、被災地に行くことにした。突然の出来事で様々なストレスを抱えていることが分かった。今後のことが少しずつ考えられた人は、希望を感じれているように思った。今は大変な時期だが、1日1日頑張っているように感じた。

# AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動 活動地を訪問して下さった団体一覧

## 自治体

- ・ 徳島県庁
- ・ 徳島県美波町
- ・ 徳島県阿南市
- ・ 徳島県海陽町
- ・ 高知県黒潮町
- ・ 岡山県赤磐市
- ・ 岡山県総社市
- ・ 総社市社会福祉協議会

## 薬局関係 \*五十音順

- ・ 一般社団法人岡山県薬剤師会吉備支部
- ・ 有限会社アイ薬局

## 医療機関 \*五十音順

- ・ 一般社団法人吉備医師会
- ・ 一般社団法人瀬戸健康管理研究所 SHL丸亀健診クリニック
- ・ 医療法人さくら診療所
- ・ 医療法人サンスあさのクリニック
- ・ 医療法人社団かとう内科並木通り診療所
- ・ 医療法人社団時正会佐々総合病院
- ・ 医療法人高杉会高杉こどもクリニック
- ・ 医療法人ときわ会藤井クリニック
- ・ 医療法人芳越会ホウエツ病院
- ・ 医療法人横浜柏堤会戸塚共立第2病院
- ・ 株式会社岡山医学検査センター
- ・ 社会医療法人全仁会倉敷平成病院
- ・ 社会福祉法人旭川荘療育・医療センター
- ・ 独立行政法人国立病院機構福山医療センター
- ・ 美波町国民健康保険美波病院
- ・ モンゴル・ウランバートルエマージェンシーサービス

## 大学 \*五十音順

- ・ 岡山県立大学
- ・ 学校法人朝日医療学園朝日医療大学校

- ・ 学校法人加計学園玉野総合医療専門学校
- ・ 学校法人ノートルダム清心女子大学
- ・ 国際医療勉強会 ILOHA
- ・ 国立大学法人岡山大学 法学部教授 黒神 直純
- ・ モンゴル国立医科大学

## 企業 \*五十音順

- ・ 賀川法律事務所
- ・ 株式会社イシダ工務店
- ・ 株式会社大塚製薬工場
- ・ 株式会社廣榮堂
- ・ 公益財団法人風に立つライオン基金
- ・ 清水博文税理士事務所
- ・ 十字屋グループ
- ・ 小規模多機能ホームぶどうの家真備
- ・ 生活協同組合おかやまコープ
- ・ 生活協同組合コープこうべ
- ・ 中外製薬株式会社
- ・ 有限会社蒲池畜産

## 団体 \*五十音順

- ・ AMDA 沖縄
- ・ AMDA 熊本鍼灸チーム
- ・ AMDA 兵庫
- ・ 一般財団法人岡山経済同友会
- ・ 一般社団法人岡山県鍼灸マッサージ師会
- ・ 一般社団法人 Bridge for Fukushima
- ・ NPO 法人福祉苑リーベの会
- ・ 岡山倉敷フィリピーノサークル
- ・ 公益社団法人岡山県鍼灸師会
- ・ 認定特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS)
- ・ 人道援助宗教 NGO ネットワーク (RNN)
- ・ 特定非営利活動法人 リザルツ
- ・ 日本青年会議所医療部会

# AMDA 本部で支援活動を支えて下さったボランティア一覧

## 一般

井口 恵子	常原 一枝	山本 忠嗣
一井 公子	中尾 友則	山本 睦子
大橋 節子	長門 浩	横山 幸子
岡本 陸雄	難波 佳子	
清輔 幸子	前田 智子	
黒瀬 美砂子	松本 浩治	
近藤 優衣	丸山 加代子	
坂本 みえ子	水田 陽子	
杉山 七実	村野 陽治	
田中 啓子	矢部 朝子	
谷 佳世	山本 順子	

## AMDA 中学高校生会

赤木 祐貴	常原 拓真
井口 海	中浦 陽子
岩月 麻里菜	中嶋 竜也
岩本 ののか	沼本 佳歩
江口 優人	政木 英永
小川 紗季	政木 悠布
小坂田 葵	山本 康太
小坂田 空	
坂口 真央	
佐藤 裕人	
橘 乃絵	

# AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動 時系列で見る活動の動き

		総社市	
7/6	19:40	大雨特別警報発表	
	22:00	避難指示発令（総社市）	
	22:49	AMDA 職員、支援活動の可能性に向けて待機、情報収集を開始	
7/7	7:00	被害状況を鑑み、支援活動の開始を決定	
	7:14	総社市危機管理室に連絡	
	11:35	AMDA 第1次派遣者、総社市役所到着	
	11:52	災害対策本部において片岡聡一総社市長と活動について協議	
	12:00	AMDA 第2次派遣チーム（看護師1名、調整員1名）がAMDA本部より車にて出発	
	13:45	AMDA 第2次派遣チームが総社市役所到着	
	14:00	吉備医師会の有志の先生方およびモバイルファーマシー（移動薬局）が合流	
	14:12	AMDA、モバイルファーマシー、吉備医師会有志の先生方、総社市保健師とともに医療チームを結成し、避難所となっていた「きびじアリーナ」に向けて車で出発	
	14:24	合同医療チームがきびじアリーナ避難所に到着	
	15:10	特別警報解除、大雨洪水警報、土砂災害警報は継続中（総社市）	
	17:18	医療チーム二手に分かれ、一つのチームはきびじアリーナ避難所に残り医療支援を継続 もう一方のチームは同避難所を出発し、昭和小学校避難所へ向かった	
	17:40	昭和小学校避難所に到着	
	18:00	きびじアリーナ避難所での診察終了	
20:23	昭和小学校避難所での診察終了		
7/8	9:00	AMDA きびじアリーナ救護所を開設	
	18:00	きびじアリーナ救護所での活動を終了	
7/9	きびじアリーナ避難者 962 人を熱中症予防のため、他の 8 カ所の避難所へ移動		
		総社市	倉敷市真備町
7/10	サンワーク総社避難所にて健康支援活動開始（8/15 まで） 岡山県災害対策本部での会議出席 倉敷地域災害保健復興連絡会議に出席（8/15 まで毎日 1 日 2 回出席）		岡田小学校避難所を訪問し挨拶 翌日からの支援活動決定
	7/11		倉敷市立岡田小学校にて避難者を対象にマッサージを開始（8/15 まで不定期で実施）
7/14	昭和公民館、下原公会堂内救護所にて、熱中症対策を実施（7/16 まで）		倉敷市立岡田小学校避難所にて、鍼灸治療開始（8/15 まで）
7/15			倉敷市立岡田小学校避難所にて、弁護士による無料相談実施（8/15 日まで 5 日間実施） 在日外国人被災者へのサポートもあわせて実施
7/18			まび記念病院健診車にて診察（28 日まで）
7/22			真備公民館菌分館にて看護師による支援を開始（8/31 まで）
7/26	サンワーク総社避難所にて鍼灸支援活動開始（8/15 まで）		
7/29	6:43	台風 12 号中国地方横断に伴い避難勧告発令	
	8:30	吉備医師会協力のもと、AMDA より医師 2 名、調整員 1 名が総社市保健師と公設避難所 10 カ所すべてを巡回、避難者の健康相談を実施	
7/31			岡田小学校にて、RNN(人道援助宗教 NGO ネットワーク)と合同で食事の配布を開始
8/5			真備公民館岡田分館救護所にて、総社市保健師と医療支援活動開始（8/12 まで）
	モンゴル国立医科大学医師、パトラフ・ムンフバヤル氏（岡山県・国際貢献ローカルトゥローカル技術移転事業にて岡山済生会病院にて研修中）、活動に参加		
8/9	モンゴル・ウランバートルエマージェンシーサービス 103 より、アルタンザガス・アディヤスレン医師が活動に参加（8/10 まで）		
8/15	真備公民館菌分館での支援活動を除き、緊急支援活動終了		
8/31	真備公民館菌分館での支援活動終了		

# AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動 職種別派遣者一覧

(名前 | ふりがな | 所属 | 年齢 ※年齢は派遣時のもの)

## 医師 \* 派遣順

- 高杉 尚志 | たかすぎひさし | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・高杉こどもクリニック | 47 歳
- 藤井 基弘 | ふじいもとひろ | 藤井クリニック | 48 歳
- 菊本 健一 | きくもとけんいち | 藤井クリニック | 43 歳
- 浅野 直 | あさのただし | あさのクリニック | 41 歳
- 森 将晏 | もりまさはる | AMDA 参与 | 71 歳
- 鈴記 好博 | すずきよしひろ | 徳島大学・AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 52 歳
- 瓜生 悠平 | うりうゆうへい | 倉敷中央病院 | 31 歳
- 安藤 由香 | あんどうゆか | 岡山労災病院 | 48 歳
- 稲葉 圭佑 | いなばけいすけ | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 30 歳
- バトラッフ ムンフバヤル | モンゴル国立医科大学 | 33 歳
- アルタンザガス アディヤスレン | モンゴル・ウランバートルエマージェンシーサービス 103 | 29 歳

## 看護師 \* 派遣順

- 王子田希実子 | おうしでんきみこ | 地元ボランティア | 41 歳
- 齊宮 幸子 | さいみやさちこ | 総社市山手福祉センター | 64 歳
- 難波 亜矢 | なんばあや | 総社市山手福祉センター | 44 歳
- 林 智恵子 | はやしちえこ | 総社市山手福祉センター | 30 歳
- 平田 靖子 | ひらたやすこ | 地元ボランティア | 46 歳
- 吉田 由記子 | よしだゆきこ | 地元ボランティア | 39 歳
- 小曾根 京子 | おぞねきょうこ | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 37 歳
- 堀内 美由紀 | ほりうちみゆき | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 55 歳
- 渡邊 静 | わたなべしずか | 地元ボランティア | 54 歳
- 岡部 悦子 | おかべえつこ | 地元ボランティア | 58 歳
- 大島 瑞穂 | おおしまみずほ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・福山医療センター | 51 歳
- 片山 智之 | かたやまともゆき | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・福山医療センター | 35 歳
- 岸本 貴子 | きしもとたかこ | 地元ボランティア | 57 歳
- 荒木 典子 | あらきのりこ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・倉敷平成病院 | 32 歳
- 西村 公江 | にしむらきみえ | かとう内科並木通り診療所 | 45 歳
- 宮下 則子 | みやしたのりこ | 地元ボランティア | 56 歳
- 清水 美紀 | しみずみき | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・倉敷平成病院 | 31 歳
- 関 洋美 | せきひろみ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・佐々総合病院 | 39 歳
- 堀野 大樹 | ほりのだいき | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・戸塚共立第 2 病院 | 41 歳
- 田村 成美 | たむらなるみ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・倉敷平成病院 | 28 歳
- 小野田 春花 | おのだはるか | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 23 歳
- 伏見 由美子 | ふしみゆみこ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・旭川荘療育・医療センター | 43 歳
- 相羽 亜紀子 | あいばあきこ | AMDA 兵庫 | 43 歳
- 森野 佐奈美 | もりのさなみ | 地元ボランティア | 46 歳

- 太田 博美 | おおたひろみ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・旭川荘療育・医療センター | 50 歳
- 山河 城春 | やまかわしろはる | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 43 歳
- 森田 良子 | もりたしょうこ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関 旭川荘療育・医療センター | 42 歳
- 多田 由美子 | ただゆみこ | 地元ボランティア | 56 歳
- 矢山 香織 | ややまかおり | 日本青年会議所医療部会 | 30 歳
- 植月 聡子 | うえつきさとこ | 地元ボランティア | 30 歳
- 武田 未央 | たけだみお | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 44 歳
- 中川 桂子 | なかがわけいこ | 地元ボランティア | 45 歳
- 吉富 昌子 | よしとみまさこ | 地元ボランティア | 55 歳
- 安藤 孝子 | あんどうたかこ | 地元ボランティア | 60 歳
- 菅原 久美子 | すがはらくみこ | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 38 歳
- 篠原 範臣 | しのはらのりたか | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体関連・美波病院 | 48 歳
- 木村 光代 | きむらてるよ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体関連・美波病院 | 38 歳
- 尾崎 美紀 | おざきみき | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体関連・美波病院 53 歳
- 吉田 扶紀 | よしだふき | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体関連・美波病院 | 50 歳
- 監物 かおり | けんもつかおり | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 41 歳

## 薬剤師 \* 派遣順

- 村木 理英 | むらきりえい | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・アイ薬局 | 57 歳
- 村木 惇人 | むらきあつひと | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・アイ薬局 | 25 歳
- 新留 香二 | にいどめこうじ | おかやま薬局 | 51 歳
- 武田 章利 | たけだあきとし | おかやま薬局 | 34 歳
- 横田 洋子 | よこたようこ | マスカット薬局 | 64 歳
- 住田 諒介 | すみだりょうすけ | サカエ薬局 | 27 歳
- 高田 昌義 | たかだまさよし | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・アイ薬局 | 50 歳
- 大月 昭子 | おおつきあきこ | 岡山県薬剤師会吉備支部 | 48 歳
- 尾上 優 | おのうえゆう | 吉備薬剤師会 | 44 歳
- 加藤 稔 | かとうみのる | マスカット薬局 | 41 歳
- 榮 ゆうこ | さかえゆうこ | サカエ薬局 | 35 歳
- 堀江 政行 | ほりえまさゆき | 岡山県薬剤師会 | 61 歳
- 安延 恵美 | やすのべめぐみ | 吉備薬剤師会 | 55 歳
- 吉田 和司 | よしだかずし | 岡山県薬剤師会 | 50 歳
- 名倉 弘哲 | なくらひろのり | 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授 | 53 歳

## 医療調整員 \* 派遣順

- 内藤 道子 | ないとうみちこ | 地元ボランティア | 24 歳
- 大山 詔子 | おおやまのりこ | 地元ボランティア | 30 歳
- 川尻 智香 | かわじりとほか | 岩国医療センター | 30 歳
- 宮本 翔太 | みやもとしょうた | 岩国医療センター | 26 歳

# AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動 職種別派遣者一覧

(名前 | ふりがな | 所属 | 年齢 ※年齢は派遣時のもの)

- 原田 弥生子 | はらだみおこ | AMDA 兵庫 | 51 歳
- 藤本 瑞穂 | ふじもとみずほ | AMDA 兵庫 | 47 歳
- 渡部 寛史 | わたなべひろし | 東京都立多摩総合医療センター | 27 歳
- 瓜生 綾乃 | うりうあやの | 地元ボランティア | 27 歳
- 藤田 麻緒 | ふじたまお | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー・大阪市立総合医療センター | 26 歳
- 高倉 果林 | たかくらかりん | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 45 歳
- 加藤 爽子 | かとうさわこ | 倉敷中央病院 | 27 歳
- 小原 陸夫 | こはらりくお | 岡山県鍼灸師会 | 50 歳
- 竹井 理紗 | たけいりさ | 岡山県鍼灸師会 | 24 歳
- 東原 広一郎 | ひがしはらこういちろう | 岡山県鍼灸師会 | 40 歳
- 才野 優一 | さいのゆういち | 岡山県鍼灸師会 | 42 歳
- 高木 謙輔 | たかぎけんすけ | 岡山県鍼灸師会 | 35 歳
- 大賀 裕介 | おおかゆうすけ | 岡山県鍼灸師会 | 22 歳
- 藤田 洋輔 | ふじたようすけ | 呉竹学園東京医療専門学校 | 38 歳
- 谷口 剛志 | たにぐちたけし | 明治国際医療大学はりきゅう学講座 | 43 歳

## 心理士 \* 派遣順

- 札幌 千絵 | ふだばちえ | 医療法人たかはしクリニック

## 保健師 \* 派遣順

- 我澤 成美 | がさわなるみ | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・赤磐市職員 | 56 歳
- 田村 由美子 | たむらゆみこ | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・赤磐市職員 | 49 歳
- 伊賀 未来 | いがみく | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・黒潮町職員 | 36 歳
- 松原文子 | まつばらあやこ | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・海陽町職員 | 49 歳
- 戎谷 幸子 | えびすだにさちこ | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・海陽町職員 | 48 歳
- 山崎 茜 | やまさきあかね | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・黒潮町職員 | 41 歳
- 柿内 靖 | かきうちせい | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・黒潮町職員 | 43 歳
- 原田 真理子 | はらだまりこ | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・阿南市職員 | 25 歳
- 柳田 麻衣菜 | やなだまいな | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・阿南市職員 | 25 歳
- 河田 里奈 | かわたりな | AMDA 兵庫 | 33 歳
- 柿内 愛 | かきうちあい | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・黒潮町職員 | 40 歳
- 横井 知子 | よこいともこ | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・黒潮町職員 | 38 歳
- 周治 麻衣 | しゅうじまい | AMDA 南海トラフ災害対応°ラットフォーム協力自治体・黒潮町職員 | 40 歳
- 兼森 史峻 | かねもりふみたか | 朝日医療大学 | 33 歳
- 田尻 尚美 | たじりなおみ | 絶好調鍼灸整骨院 | 31 歳
- 井田 奈美枝 | いだなみえ | 岡山県鍼灸マッサージ師会 | 60 歳
- 小林 大祐 | こばやし だいすけ | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 33 歳
- 松村 幸子 | まつむらゆきこ | AMDA 熊本鍼灸チーム | 55 歳
- 龍神 孝慶 | りゅうじんたかよし | 朝日医療大学 | 28 歳
- 三浦 大貴 | みうらひろき | 関西医療大学 | 33 歳
- 上田 誠 | うえだまこと | 岡山県鍼灸マッサージ師会 | 41 歳
- 浜野 浩一 | はまのこういち | NPO 鍼灸地域支援ネット | 53 歳
- 飯塚 美紀代 | いいづかみきよ | NPO 鍼灸地域支援ネット | 54 歳
- 村上 高康 | むらかみたかやす | 常葉大学 | 40 歳
- 阿久津 圭祐 | あくつけいすけ | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 25 歳
- 北小路 博司 | きたこうじひろし | 宝塚医療大学 | 68 歳
- 中野 侑子 | なかのゆきこ | ゆう鍼灸院 | 29 歳
- 中野 祐也 | なかのゆうや | 九州保健福祉大学 | 33 歳

## 助産師 \* 派遣順

- 増矢 幸子 | ますやさちこ | 徳島大学 | 34 歳
- 早瀬 麻子 | はやせまこ | AMDA 兵庫 | 47 歳

## 鍼灸師 \* 派遣順

- 今井 賢治 | いまいけんじ | 帝京平成大学教授、AMDA 災害鍼灸ネットワーク代表世話人 | 53 歳
- 風間 祐二 | かざまゆうじ | 長野県鍼灸師会北信越支部 | 40 歳
- 横矢 直之 | よこやなおゆき | 長野県鍼灸師会北信越支部 | 44 歳
- 小野 由実子 | おのゆみこ | 岡山県鍼灸師会 | 31 歳
- 國安 俊成 | くにやすとしなり | 岡山県鍼灸師会 | 56 歳
- 和彦 | よしだかずひこ | 岡山県鍼灸師会 | 43 歳

## あん摩マッサージ指圧師 \* 派遣順

- 山崎 克枝 | やまさきかつえ | 48 歳

## 弁護士 \* 派遣順

- 賀川 進太郎 | かがわしんたろう | 賀川法律事務所 | 56 歳
- 加藤 高明 | かとうたかあき | 賀川法律事務所 | 35 歳
- 板谷 多摩樹 | いただにたまき | 弁護士法人岡山テミス法律事務所 | 39 歳
- 八木 和明 | やぎかずあき | 賀川法律事務所 | 39 歳

## 介護福祉士 \* 派遣順

- 藤田 智幸 | ふじたともゆき | ケアハウス タなぎ苑 | 35 歳

# AMDA 西日本豪雨災害被災者緊急支援活動 職種別派遣者一覧

(名前 | ふりがな | 所属 | 年齢 ※年齢は派遣時のもの)

## 調整員 \* 派遣順

- 河田 雅史 | かわたまさし
- 石堂 智行 | いしどうともゆき | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 48 歳
- 西中 真依 | にしなかまい | 藤井クリニック | 34 歳
- 高本 美帆 | たかもとみほ | 藤井クリニック | 44 歳
- 橋本 宏美 | はしもとひろみ | 藤井クリニック | 34 歳
- 逸見 奈加子 | へんみなかこ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・高杉こどもクリニック | 33 歳
- 三輪 真理 | みわまり | 藤井クリニック | 40 歳
- 福田 悦子 | ふくだえつこ | 地元ボランティア | 49 歳
- 中村 宥海 | なかむらゆうかい | 地元ボランティア | 47 歳
- 宮本 龍門 | みやもとりゅうもん | 地元ボランティア | 36 歳
- 山上 正道 | やまがみせいどう | AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS) | 48 歳
- 富岡 洋子 | とみおかひろこ | AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS) | 51 歳
- 長谷川 智紀 | はせがわともき | 地元ボランティア | 20 歳
- 石原 光記 | いしはらこうき | 地元ボランティア | 19 歳
- 竹久 佳恵 | たけひさよしえ | AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS) | 43 歳
- 板谷 尚昌 | いただにたかまさ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・倉敷平成病院 | 47 歳
- 明石 光広 | あかしみつひろ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・赤磐市職員 | 30 歳
- 林 裕美 | はやしひろみ | AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS) | 42 歳
- 大山 マージョリー | おおやままーじょりー | 岡山倉敷フィリピーノサークル | 45 歳
- 佐藤 希子 | さとうきこ | 国際医療勉強会 ILOHA | 18 歳
- 古城 デイジー | こじょうでいじー | 岡山倉敷フィリピーノサークル | 63 歳
- 高田 敦子 | たかだあつこ | 地元ボランティア | 47 歳
- 立花 有梨 | たちはなゆり | 地元ボランティア | 21 歳
- 山下 輝 | やましたあきら | 生活協同組合おかやまコープ | 44 歳
- 立花 奈緒美 | たちはななおみ | 地元ボランティア | 49 歳
- 難波 和代 | なんばかずよ | 地元ボランティア | 29 歳
- 小椋 健大朗 | おぐらけんたろう | 地元ボランティア | 21 歳
- 小椋 順子 | おぐらじゅんこ | 地元ボランティア | 51 歳
- 篠原 さゆり | しのはらさゆり | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・ホウエツ病院 | 42 歳
- 岩脇 美和 | いわわきみわ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・ホウエツ病院 | 36 歳
- 安川 篤子 | やすかわあつこ | 生活協同組合おかやまコープ | 47 歳
- 松永 健太郎 | まつながけんたろう | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 32 歳
- 白幡 利雄 | しらはたとしお | AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS) | 50 歳
- 西村 輝 | にしむらあきら | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 56 歳
- 岡崎 かおり | おかざきかおり | 生活協同組合おかやまコープ | 39 歳
- 江幡 吉貴 | えばたよしたか | コニカミノルタ株式会社 | 25 歳

- 高木 祐志 | たかぎゆうし | コニカミノルタ株式会社 | 25 歳
- 梅崎 一夫 | とがさきかずお | 生活協同組合おかやまコープ | 53 歳
- 長岡 正樹 | ながおかまさき | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・海陽町職員 | 49 歳
- 藤木 崇 | ふじぎたかし | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・海陽町職員 | 43 歳
- 篠原 隆史 | しのはらたかし | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関・さくら診療所 | 64 歳
- 宮本 晋吾 | みやもとしんご | 日本青年会議所医療部会 | 35 歳
- 山崎 真理 | やまさきまり | 地元ボランティア | 56 歳
- サヒライクバレ | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 41 歳
- 松崎 豊彦 | まつざきとよひこ | 岡山県鍼灸マッサージ師会 | 42 歳
- 中原 永昌 | なかはらえいしょう | 地元ボランティア | 28 歳
- 篠原 慎一 | しのはらしんいち | 地元ボランティア | 41 歳
- 古萩 祐蔵 | こかくゆうぞう | 地元ボランティア | 68 歳
- 滝 | マリーナ | たきがわまりな | 岡山倉敷フィリピーノサークル | 46 歳
- 松本 弥生 | まつもとやよい | 地元ボランティア | 39 歳
- 七條 隆能 | しちじょうたかよし | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・阿南市職員 | 47 歳
- 西野 高史 | にしのたかふみ | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・阿南市職員 | 29 歳
- 米井 恒太 | よねいこうた | 国際医療勉強会 ILOHA | 22 歳
- 法花 巧 | ほつかたくみ | 地元ボランティア | 21 歳
- 林 信和 | はやしのぶかず | 地元ボランティア | 49 歳
- 林 美絵 | はやしみえ | 地元ボランティア | 49 歳
- 市村 功 | いちむらいさお | 地元ボランティア | 49 歳
- 桑本 彩花 | くわもとあやか | 国際医療勉強会 ILOHA | 19 歳
- 小野 菜々子 | おのななこ | 岡山大学被災地支援団体・おかやまバトン | 20 歳
- 近藤 和人 | こんどうかずひと | AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・美波町職員 | 55 歳
- 野口 律奈 | のぐちりつな | 帝京平成大学 | 53 歳
- 小野 亮 | おのあきら | AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー | 49 歳
- 渡辺 恵子 | わたなべいこ | 清水博文税理士事務所 | 41 歳

他調整員 1 名 合計 213 名

## AMDA 本部からの派遣者 \* 派遣順

- 難波 妙 | なんばたえ | 調整員 | 55 歳
- 橋本 千明 | はしもとちあき | 看護師 | 38 歳
- 神倉 裕太郎 | かみくらゆうたろう | 調整員 | 26 歳
- 岩尾 智子 | いわおともこ | 看護師 (米国免許) | 34 歳
- 三宅 孝士 | みやけたかし | 調整員 | 赤磐市役所職員 (AMDA 本部に outward) | 56 歳
- 大西 彰 | おおにしあきら | 調整員 | 50 歳
- クリスパー・フット | 調整員 | 26 歳
- 菅茂 茂 | すがなみしげる | 医師 | AMDA グループ代表 | 71 歳
- アルチャシユスタジョシ | 調整員 | 42 歳
- 今井 康人 | いまいやすと | 調整員 | 71 歳
- 難波 比加理 | なんばひかり | 調整員 | 58 歳
- ブルックス 雅美 | ぶるつくすまさみ | 調整員 | 41 歳
- 芦川 篤子 | あしかわあつこ | 調整員 | 47 歳



# AMDA

認定特定非営利活動法人アムダ：AMDA  
〒700-0013 岡山県岡山市北区伊福町3-31-1  
TEL：086-252-7700 FAX：086-252-7717  
<http://www.amda.or.jp>

随時ボランティアを募集しております。

2018年11月24日発行